Ⅱ　（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（人孔・雨水管関係）工事に伴う発掘調査（1321調査地点）

・

（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（樹木関係）に伴う発掘調査（1322調査地点）

・

（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（電気）に伴う発掘調査（1325調査地点）

１．調査の目的と経過

（1）調査地点とこれまでの調査成果

熊本大学本荘地区は、本部がある黒髪地区から南西に約２km の白川沿いに位置する。北・中・南の３地区に分かれており、本調査を実施したのは本荘北地区で、熊本大学病院が置かれている。敷地内は、三の井手と呼ばれる水路が暗渠となって北東から南西へ横断している。調査地点は、この本荘北地区のほぼ中央に位置している。

本荘地区は、本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）に含まれ、再開発に伴い1996（平成８）年から本格的な発掘調査が実施されてきた。遺跡の主体は古墳時代と奈良・平安時代の集落址で、近年では近世・近代の遺構・遺物にも注目している。縄文時代は、後期後葉以降の遺物は出土するが、遺構は未確認である。弥生時代は、前期の土器をともなう溝が数か所（同一のものを含む）で確認されているのみで、検出地点も病院敷地の北西隅に限定されている。本調査地点周辺での既往の調査成果を概観すると、北側に位置する基礎医学研究棟建設にともなう発掘調査（9601調査地点）では、奈良・平安京時代の集落址と近世～近代の墓が検出された。このときはじめて「杁本寺」の刻書が確認され、現在の地名「九品寺」との関係が注目されるようになった。また、56基の近世～近代の墓は、墓の種類（甕棺・座棺）と人骨の年齢・性別および副葬品が報告された（小畑編2008）。9601調査地点東側隣接地に臨床医学教育研究センターが建設される際も（1104調査地点）、約440基の墓を発掘調査した（石丸編2013）。両調査地点は、北東側に隣接する仙宗寺の墓地で、副葬品から当時の風俗が伺える。本調査地点の北西側（白川側）の医学総合研究棟建設工事にともなう発掘調査（0101調査地点）では、奈良・平安時代の竪穴建物等のほか、畑の畝が検出された。その南西側の隣接地、医学教育図書棟建設工事にともなう発掘調査（0707調査地点）では、小区画の水田跡が検出され、一帯の奈良・平安時代の土地利用の変遷考える上で重要な成果が得られている。また、本調査地点の南東側では、本調査後の2017年に、旧管理棟（旧外来診療棟：２代目）の解体工事を実施した。その際に実施した発掘調査（1708調査地点）では、日向往還の旧ルートが確認され、近世の地層および遺構の確認に注意喚起がなされるようになった（山野・吉留編2020）。

（2）調査の目的

本荘北地区の熊本大学病院は、1901（明治34）年に現在地に移転・運営されてきた。本事業は、４代目となる外来診療棟が2014（平成26）年９月に開業するのにあわせ、隣接する入退院棟の正面玄関前のロータリー・休息所広場・建物・駐車場として利用していた一帯を、新しい外来診療棟のプリムナードとして整備する事業である。本事業では、内容別に４件の文化財保護法第93条１項を提出した。「（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（人孔・雨水管関係）」は、古い雨水枡・排水管等の撤去と新たな浸透井戸・雨水枡・排水管・U字側溝の設置のほか、不要となる擁壁の解体撤去などの工事で、これを1321調査地点とした。「（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（電気）」は、既存の基礎医学研究棟と第一立体駐車場付近、新しい外来診療棟の間にハンドホールと電気配線を敷設する工事で、これを1325調査地点とした。「（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（樹木関係）」は、今回の整備に支障となる樹木の移植事業で、これを1322調査地点とした。本書では、この３件に関わる発掘調査の成果について記述する。「（医病）環境整備（東側駐車場等）工事（舗装・構造物関係）」は、1320調査地点として対応したが、全体的に掘削が浅く、掘削が深い箇所も発掘調査には至らなかった。

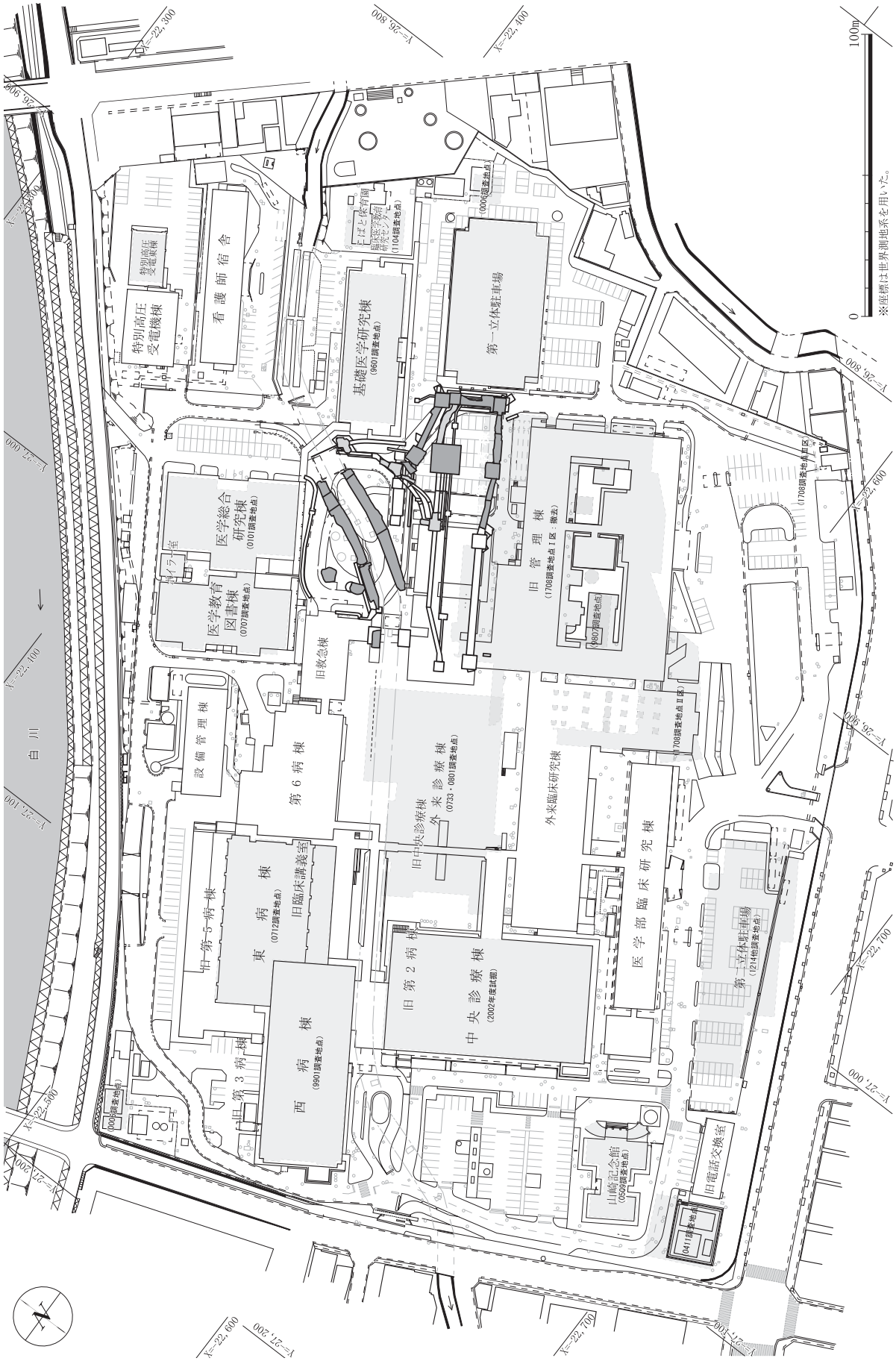

図２　本荘北地区における調査地点位置図（S=1/2000）

（3）発掘調査の経過と組織

2013（平成25）年度は、１名を遺跡の調査に配置し、１名が報告書作成業務に従事する体制の予定であった。黒髪南地区において、（黒髪南）国際革新技術研究拠点施設新営工事にともなう発掘調査（1309調査地点）が８月から10月初旬まで実施された。同じく８月からは（黒髪南）ライフライン再生（給水設備等）工事（1310調査地点）の開始が決定され、報告書作成業務に従事する予定の１名が発掘調査に対応した。当該事業に関わる発掘調査や立会は、学内構内の動線上の問題や工事の工程上の都合により、広範囲を効率的に発掘調査することができず、長期化すると予想された。施設部では10月以降に中～大型事業が６件並行する計画が立てられていたため、急遽調査員を１名増員するとともに事業調整をおこない発掘発掘調査に２名、報告書作成業務に１名で対応する体制をとった。本荘中地区において、11月から（本荘中）基幹整備（自家発電設備）工事に係る一連の３件の発掘調査（1317・1318・1319調査地点）が12月末まで実施された。本事業（1321・1322・1325調査地点）は、年度当初の計画では10月から開始する予定であったが、調査体制と他の事業の優先順位の都合のため11月に遅らせ、他の事業への対応を考慮し、同地点に長期間拘束されることのない樹木移植・支障物撤去などの軽微な工事の立会から開始した。1322調査地点は2013（平成25）年度内に４本の樹木の抜根を実施した。埋蔵文化財への影響はなく、発掘調査には至らなかった。1325調査地点は、2013（平成25）年度内に４箇所の既設ハンドホール・外灯・照明灯の撤去・新設を実施したが、掘削が埋土内におさまり発掘調査には至らなかった。本格的な発掘調査としては、1321調査地点１区を2014（平成26）年１月から開始し、柴田亮が担当した。２区の一次掘削を終えたところで、2013（平成25）年度内の作業は終了した。2014（平成26）年度になり、1321調査地点は2区から、1325調査地点は長大な掘削範囲の区間を整理して１区から、そのほか1320調査地点および1322調査地点の軽微な立会を大坪志子が引き継いだ。

事業の範囲は、新しい外来診療棟・医学教育図書棟・医学総合研究棟・旧管理棟・第一立体駐車場に囲まれた南北約70m、東西約105mの範囲である。1321調査地点が最も調査面積が大きく、掘削深度もある工事である。５×５mの掘削を必要とする浸透井戸を合計6箇所に設置し、その間を配管する工事である。また、整備事業範囲を縦断する水路（暗渠）の補修工事も計画された。長年地中にあった水路の蓋を撤去し、新たに門型カルバートを設置する工事で、水路の両岸が発掘調査対象となった。1325調査地点は、ハンドホールと配線を敷設する工事である。概して掘削深度が浅いことから、発掘調査を実施した範囲は全体の1/3程度である。1322調査地点では、樹木移植の一ヶ所で発掘調査を実施した。

発掘調査の実施については、立会を実施している途中、遺物包含層や遺構面を確認した段階で、熊本市文化市民局文化創造部文化財課（以下「熊本市文化財課」とする）に連絡を入れ、発掘調査に切り替えるか、もしくは立会のままとするかいずれかとなっていた。切替の際の規準は発掘調査範囲であった。しかし、本事業では立会範囲が広範囲にわたり小区画で進める中で、発掘調査が必要となるか否かは、実際に掘削しなければ撹乱の有無にもよるため不測の状況で、対象範囲を一気に把握することは困難であった。また、支障物による工事範囲の変更も予想された。このため、文化財保護法第92条１項を提出するタイミングが問題となった。これについて、４件の届出について、最初に発掘調査の必要が生じた段階で熊本市文化課および熊本県文化課に連絡を入れ、一旦第93条１項の提出図面（面積）で第92条１項を概ね２週間以内に提出することとし、発掘調査範囲が確定した段階で、報告することとなった。小規模な1320調査地点については、立会の範囲内での処理となった。本事業の範囲は一般の利用者や病院職員、各種業者の往来があるため、全範囲を工事用地として囲い、広範囲を

図３　1321・1322・1325調査地点調査区配置図（S=1/500）

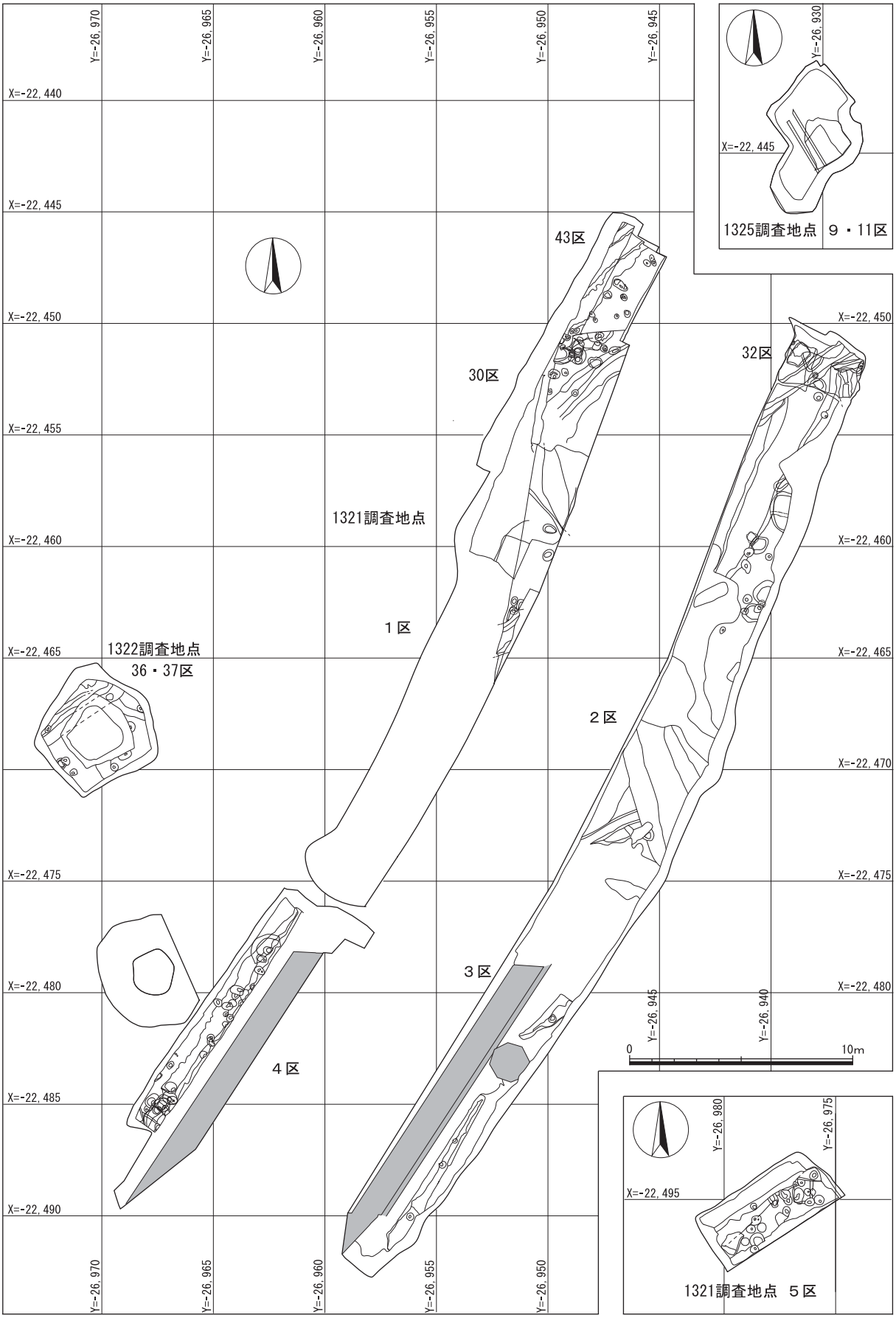

図４　1321・1322・1325調査地点遺構配置全体図１（S=1/250）

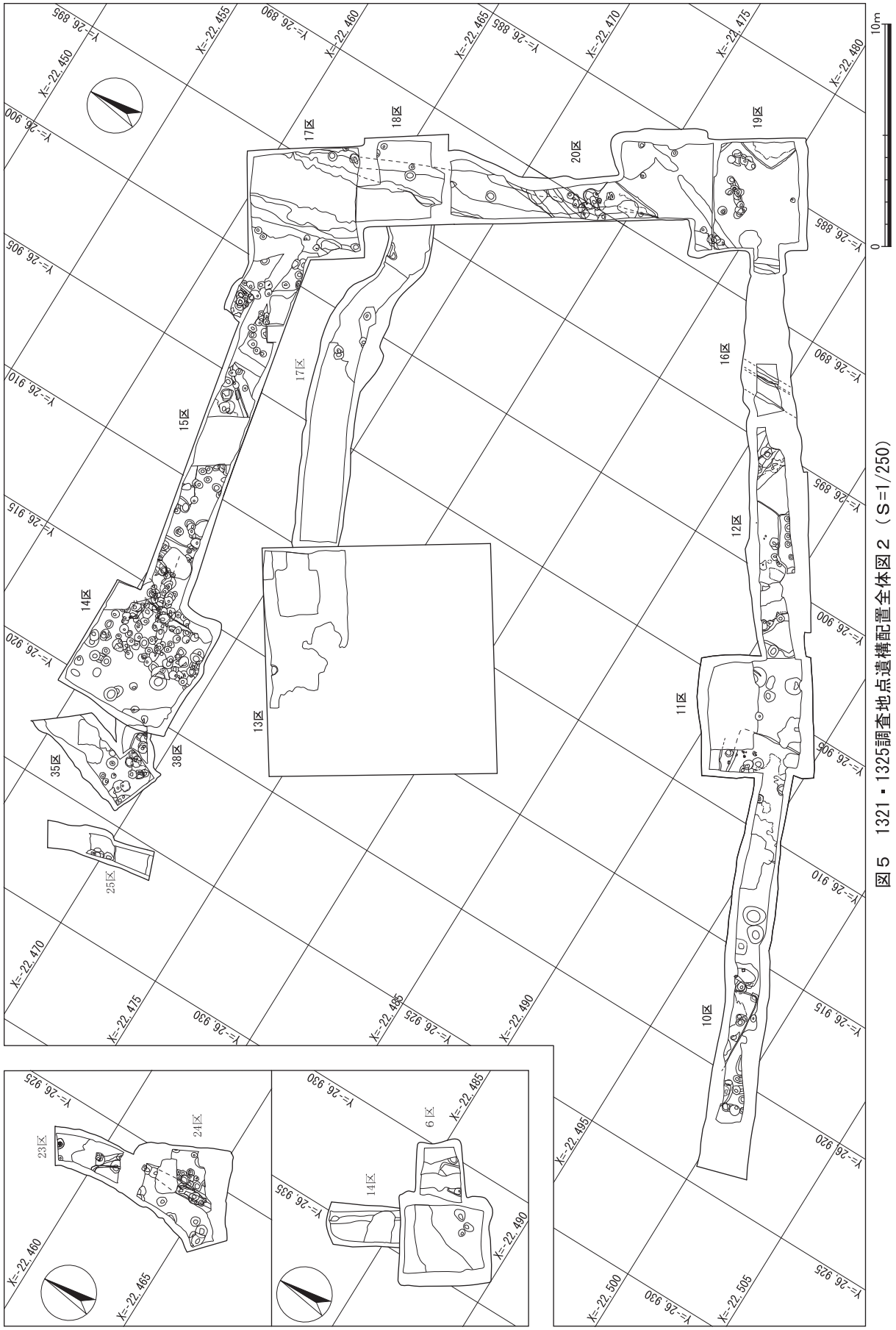

図５　1321・1325調査地点遺構配置全体図２（S=1/250）

効率的に発掘調査することはできなかった。また、工事も少しずつ施工・完成させながら進めるため、工事工程と人の動線を勘案した小区間を設定して発掘調査を進めた。このため、1321調査地点は45区、1325調査地点は25区に分かれる（図３）。小面積の調査では、掘削作業と記録作業のバランスをとるのがむずかしく、効率は非常に悪い。また、他の事業対応もあり、発掘調査を停止する日もあった。このため、少しでも発掘調査を迅速化するために、株式会社九州文化財研究所および株式会社有明測量開発社に補助業務を委託した。発掘調査は1321調査地点を主軸に実施し、1325調査地点は、その合間に立会を実施した。1325調査地点で発掘調査が必要となった場合には、それぞれの工事業者と工程を相談しながら進めた。

発掘調査は、既往の発掘調査成果と同様に、奈良・平安時代の遺構が検出された。また、一部区間では、近世～近代のものと考えられる大溝が検出された。大きな発見は、門型カルバート設置地である30区で、近世のものと考えられる石垣を検出したことである。現在の水路（暗渠）の傍で、若干方向をたがえていることや、使用されている間知石の形態から、旧三の井手の石垣と考えられる。これにつては、10月23日には報道機関に対してプレスリリースし、10月25日に大学病院管理棟で記者会見、翌26日に現地説明会を実施した。このほか、1321調査地点13区は、土壌汚染対策法の対象区画として、熊本市環境局職員の立会のもとに掘削を実施した。ここでは、1901（明治34）年に現在地に県立病院が移転して間もない頃に築造されたと考えら土壌汚染対策法の対象区画として、熊本市環境局職員の立会のもとに掘削を実施した。煉瓦建物の一部とみられる構造物が検出された。環境整備事業は、2015（平成27）年２月23日、1320調査地点の車止め設置に関わる掘削の立会を最後に終了した。

発掘調査経過の概要および当時の調査組織は以下の通りである。なお立会のみの区は除外する。

＜1321調査地点＞

2013年11月15日　1321調査地点（人孔・雨水管関係）・1322調査地点（樹木関係）立会開始（調査担当：柴田亮）。

2013年11月20日　1320調査地点（舗装・構築物関係）（調査担当：柴田亮）。

2014年１月21日　１区の立会開始（～１月28日）。文化財保護法第92条の届出を熊本県文化課へ提出。発掘調査に切り替わる。

2014年１月28日　２区の調査開始（～２月３日一旦停止）。

2014年４月25日　２区の調査再開（～５月15日）（調査担当：大坪志子に交代）。

2014年４月28日　５区の一次掘削。

2014年５月７日　５区の調査開始（～５日21）。３区の一次掘削。

2014年５月９日　３区の調査開始、同日終了。

2014年５月15日　４区の調査開始（～５月28日）。

2014年５月27日　10区西側の調査開始（～６月９日）。

2014年６月10日　10区東・11区調査開始（～6月25日）。

2014年６月11日　７区の調査開始（～６月12日）。
12区調査開始（～６月30日）。

2014年６月19日　13区調査開始。土壌汚染対策法の対象区のため、熊本市環境局職員立会野元掘削（～６月30日）。

2014年７月８日　14・15西区調査開始（～７月29日）。

2014年７月22日　16区調査開始（～７月24日）。

2014年７月29日　15東・17区調査開始（15区：～８月８日、17区：～８月12日）。
2014年８月11日　18区調査開始（～８月12日）。
2014年８月12日　19区調査開始（～８月18日）。
2014年８月18日　20区調査開始（～８月28日）。
2014年９月29日　30区調査開始（～11月12日）。
2014年10月１日　30区で、２号溝を掘削開始、栗石を検出。
2014年10月７日　２号溝の栗石の図面・写真等記録を終え、撤去。間知石を検出。
2014年10月８日　甲元眞之先生（熊本大学文学部名誉教授）が来訪。
木下尚子先生（熊本大学文学部）が来訪。
2014年10月20日　熊本市文化振興課　原田範昭氏・鶴島俊彦氏に連絡。
2014年10月21日　鶴島俊彦氏（熊本市文化振興課）が来訪。
2014年10月23日　山尾敏孝先生（熊本大学大学院自然科学研究科）、甲元眞之先生（熊本大学文学部名誉教授）、西住欣一郎氏・廣田静学氏・岡本真也氏（熊本県教育庁文化課）が来訪。
2014年10月25日　三の井手旧石垣発見の記者会見開催。
2014年10月26日　現地説明会開催。
2014年11月12日　山砂と不織布シートで石垣を保護、埋め戻して保存。
2014年11月13日　32区調査開始（～11月20日）。
2014年11月21日　35区調査開始（～11月27日）。
2014年12月２日　38区調査開始（～12月３日）。
2014年12月５日　43区調査開始（～12月９日）。
2015年２月23日　45区立会を以て終了。

＜1322調査地点＞

2013年11月15日　移植元樹木の抜根開始。
2014年11月27日　移植先、36・37区調査開始（～12月５日）。（調査担当：大坪志子に交代）

＜1325調査地点＞

2013年11月20日　1325調査地点（電気設備）立会開始（調査担当：柴田亮）。
2014年６月９日　６区の調査開始（同日終了）。（調査担当：大坪志子に交代）
2014年６月11日　７区調査開始（～13に里）。
2014年６月20日　９・11区調査開始（～７月11日）。
2014年７月16日　14区調査開始（同日終了）。
2014年８月12日　17区調査開始（～８月18日）。
2014年11月５日　22区調査開始（～11月５日）。
2014年11月５日　23区調査開始（～11月７日）。
2014年11月７日　24区調査開始（～11月11日）。
2014年11月11日　25区調査開始（～11月13日）。終了。

調　査　員：大坪志子（熊本大学埋蔵文化財調査センター）、柴田亮（同、現岡山大学文明動態学研究所）

：越川欣和、西谷彰（株式会社九州文化財研究所）（2014年４月25日～６月30日）
：島浦健生、米村大、（株式会社有明測量開発社）（2014年７月１日～８月20日）
事 務 担 当：大崎喜美子
発掘作業員：石村義則、今村明美、栗崎信行、後藤まや、白石美枝子、関律子、中村良一、西村和子、野田昇、早田咲百合、番山明子、松本晋治、松山誠一、松山れい子、森川征子、森川護、森本清子、米満司郎
調 査 指 導・協力者：甲元眞之（熊本大学名誉教授）、山尾敏孝（熊本大学大学院自然科学研究科）、岡本真也、西住欣一郎、廣田静学（熊本県教育庁文化課）、鶴島俊彦（熊本市熊本城調査研究センター）（敬称略、五十音順、所属は2014年度当時）

（４） 整理作業の経過と組織

遺物は、発掘調査現場では縄文時代から古代・近世までのものを、近代については本学の来歴を示すものを取り上げた。その後、洗浄・注記・接合・実測・写真撮影を実施した。注記の方法は、例言に記したとおりである。土器の細片（概ね２㎝以下）は注記せず、出土時の遺物カードとともに一括して収納・保管している。実測には残存状態が良いもの、遺構の時期・性格を示すために必要なものを中心に抽出し、接合による復元と必要に応じて石膏による補強等をおこなった。実測図はデジタルトレースで製図、一部は写真合成をおこなった。このほか、図化はおこなわなかったが、遺物の出土情報として写真を掲載したものもある。ただし、本書に掲載した遺物は、全出土量の１～２割程度である。遺構実測ソフトで作成した遺構図は、調査員と整理作業員でデータを編集し、発掘調査現場で作成した手書きの遺構図・遺物実測図はデジタルトレースで製図した。掲載した遺物には、整理作業時の通番号（整理番号）と本書の図番号（報告書番号）を付して、未掲載品とは別途整理・保管している。

本書の刊行までの整理作業と作業時の組織は以下のとおりである。

2015年１月より　遺物の洗浄開始（～３月）
2019年９月より　遺物の注記
2019年10月より　遺物の接合開始（～４月）
2019年11月より　遺構・土層図のトレース作業開始（～12月）
2020年５月より　遺物の実測開始
2020年８月より　遺物実測図のトレース開始
2020年11月より　遺物の写真撮影開始（～2021年２月）
2021年７月より　遺物の一覧作成開始（～９月）
2023年１月まで　挿図・図版作成、遺物一覧表の確認・修正
2023年１月　　入稿

調　査　員：大坪志子（熊本大学埋蔵文化財調査センター）・柴田亮（当時：大村市教育委員会）
事務補佐員：大崎喜美子・山田由紀・福田由美香・植田裕子
整理作業員：井上裕美・江口路・鬼塚美枝・小山正子・後藤恵・首藤優子・末吉美紀・園田智子・濱﨑清子・増井弘子・久保田和美・下高理恵・内村雄一

２．各調査地点における各調査区の検出遺構と出土遺物

本事業に関わる発掘調査は、前項で述べたとおり1321調査地点・1322調査地点（樹木関係）・1325調査地点で実施した。本項では、上述の調査地点とその区間の順に、成果について記述する。発掘調査成果の記述がない区は、全面撹乱で既に遺跡が破壊されていたか、或いは包含層や遺構面を確認したが、それ以上の工事による掘削を必要とせず、遺跡を保存した区である。

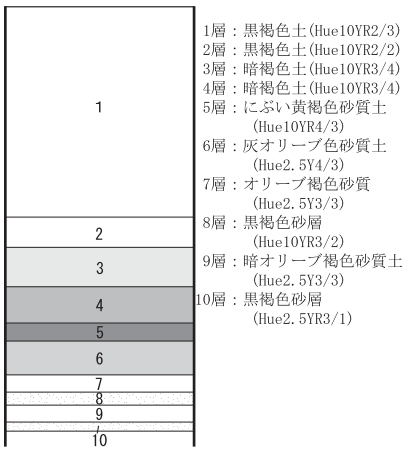

図６　1321 調査地点８区南壁土層柱
（S=1/50）

（１）調査地点の基本層序

本調査地点では、本事業を施工する工事業者により、重機で近・現代の撹乱埋土を除去したのち、奈良・平安時代の遺物包含層から調査を実施した。この遺物包含層は地点によっては分層が可能である。この遺物包含層を除去後、いわゆるアカホヤ火山灰の二次堆積といわれる暗褐色土の遺構面での調査となる。本調査は、区間が細分されており、撹乱や地点ごとの差異等から繁雑になるため、土層の説明は各地点において適宜提示することとする。ここでは、地表下約３ｍまで掘削した1321調査地点８区の土層を基本層序として提示する。

2013年に、黒髪南地区で最終調査面と認識していた遺構面より下位の地層から、縄文時代後期の墓と人骨が発見され（山野編2019）、最終遺構面とする地層の下に対する注意が喚起された。本調査地点では、この点を考慮し、工事業者の協力を得て1321調査地点８区で地表下約３ｍまで掘削し、土層の堆積状況の確認を試みた。その結果、遺構面下は白川の洪水砂と考えられる砂の層と、それが固結した砂岩の層による互層が続くことを確認した。縄文時代の海進想定範囲と標高も合わせて、本地点では遺跡が存在する可能性は極めて低いと判断された。層序は以下のとおりである。

１層は現代埋土で、アスファルト舗装の下は、砕石が混入する土である。２層は古代の遺物包含層である。現代の工事・整地で削平されているが、他の地点では、まだ上位から検出される。古代の新しい段階の遺構は、この層に掘り込まれる。３層は従来地山（遺構面）としている土層で、遺構の主たる検出面である。黒髪南地区以外では、この層の下で遺構や遺物を確認していない。４層は粘性が高くブロック状に固まる土である。５層は粘性の低い砂質土である。６層はオリーブ色に見える砂層である。７層は、砂が固く固まった岩盤状の層で、９層も同様である。８層は粗い砂の層で白川の洪水砂と考えられ、10層も同様である。10層以下も、砂の岩盤状の層と砂層の互層が続くと考えられる。

（２）1321調査地点における検出遺構と出土遺物

①１区

１区は、本荘北地区を北から南に横断する水路（暗渠）の右岸に位置する。門型カルバートの工事範囲は、当初大きく６区に分けた。１～４区と、残した古い蓋の南側の５・６区で、１区は北西に位置する（図３）。全体は南北約22.5m、幅約３～4.6mであるが、大半がすでに破壊されており遺構が確認できたのは北半部である。本地区では、３基の竪穴建物と２条の溝を検出した。

＜検出遺構＞

１区では、３軒の竪穴建物と、２条の溝を検出した。

５号竪穴建物（図７）

５号竪穴建物は、１区の北端に位置する。北・東・西側は調査区外にのびると考えられ、西側はさらに撹乱を受けている。また、北東部を３号溝に切られているため、大半を失っている。残された南壁から、竪穴建物の主軸は北西 - 南東方向と考えられる。土層断面図Ｂ－B’では、５層が床面、３層が埋土である。土層断面図Ａ－A’の３層も同様に埋土である。出土遺物はない。近隣の9601調査地点をはじめとして本荘北地区における既往の調査成果では、本竪穴建物の主軸方向をもつものは古墳時代に属しており、５号竪穴建物も、古墳時代に属すると考えられる。

６号竪穴建物（図７）

６号竪穴建物は、１区の中央東側に位置する。７号溝に切られており、北西角が残るのみで、現状の規模は長さ約0.7m、幅約0.4mである。竪穴建物の主軸は、概ね北南方向で、東に約15度ほど傾いている。出土遺物は細片のため図化していないが、土師器が出土している。９号柱穴は、６号竪穴建物の床下から検出されている。

８号竪穴建物（図７）

８号竪穴建物は、１区の中央東側に位置する。６号竪穴建物と７号溝に切られ、東側は撹乱、および水路（暗渠）によって破壊されている。北西角が残るのみで、現状の規模は長さ約0.5m、幅約0.2mである。出土遺物はない。８号竪穴建物の主軸の向きは、６号竪穴建物と同じである。既往の調査成果では、古代の竪穴建物の主軸方向は大きく二つに分けられることがわかっており、北より少し東に傾くものは、７世紀末から８世紀初頭頃と考えられている。６・８号竪穴建物は所属時期を判断できる遺物がないが、８世紀後半以降の遺物が出土している７号溝に切られていることから、矛盾はないと考えられる。

３号溝（図７）

３号溝は１区の北端に位置しており、１区の北東隅をかすめるように南北に走る。北・東・南は調査区外で、現状の規模は、長さ約3.8m、幅約２m、深さは0.5m 程度である。主軸は概ね北で、西に15度ほど傾く。地形から、南が下流である。平面図では、現状右岸の立ち上がりは非常に緩やかで、溝の中央部が急に深くなる土層断面図の：Ａ－A’、１層・２－１層・２－２層・６層が本遺構の埋土である。土層断面図Ｂ－B’では、現代埋土により５号竪穴建物との切り合いが一見逆に見えるが、土層断面図Ａ－A’と、土層の関係により本溝が５号竪穴建物を切っていることが分かる。８世紀後半～９世紀前葉の遺物が出土した。２区で検出した21号溝と同一の溝である可能性が高い。

７号溝（図７）

７号溝は、１区の中央東側に位置する。北東－南西に調査区を横断しており、西側は撹乱を受け、東側は調査区外である。現状の規模は最大で約0.5×2.2m、深さ約0.3m程度の範囲が残っているが、本来は幅1.4m 前後の溝であったと考えられる。遺物から古代のものと考えられる。

＜出土遺物＞（図８・55）

図８：１～２は３号溝で出土した土師器の坏と甕の口縁である。甕の口縁は薄手で上に開く。８世紀後半～９世紀前葉と考えられる。３～11は、７号溝で出土した。３と５は、刻書があり、３は「枚

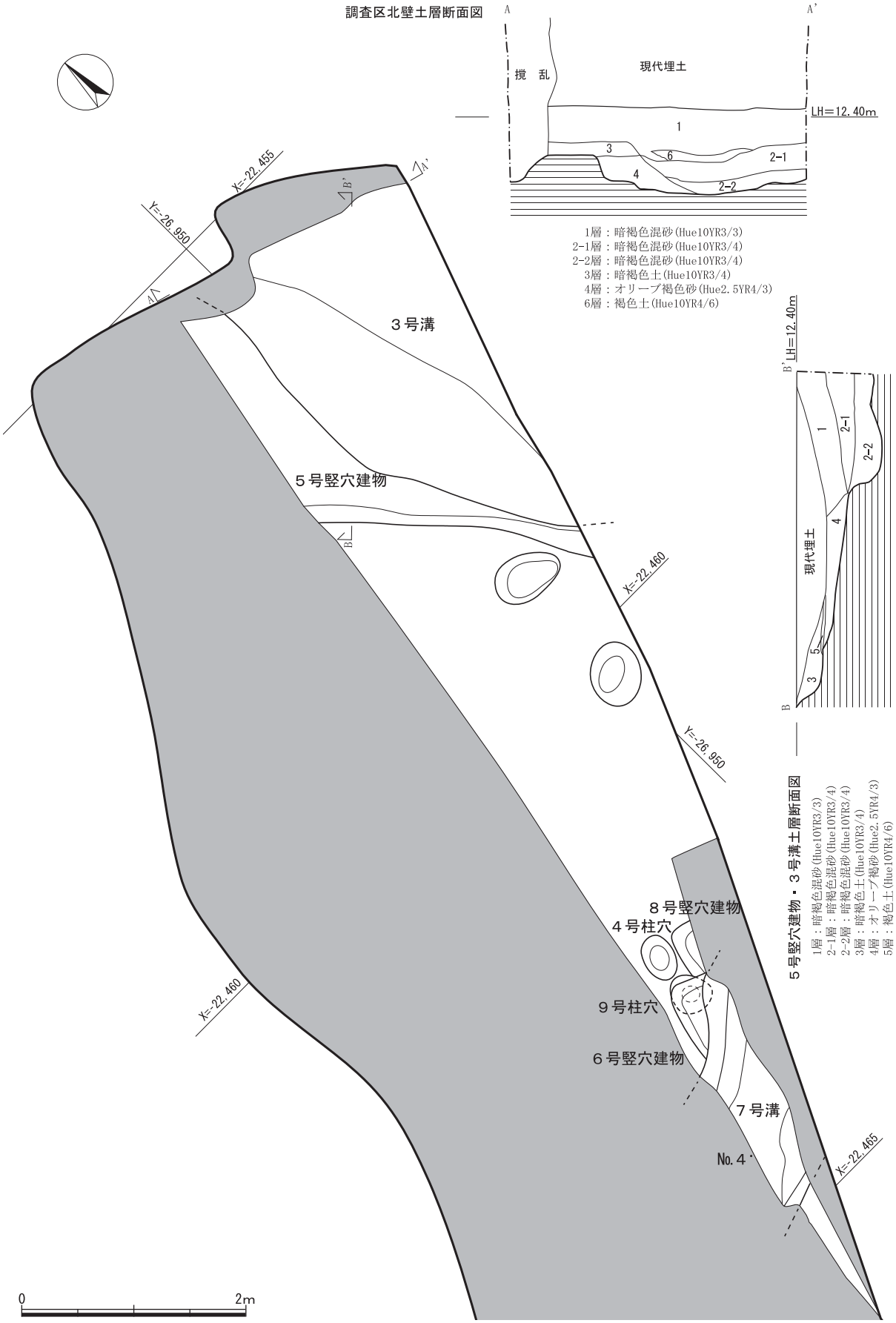

図７　1321調査地点１区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

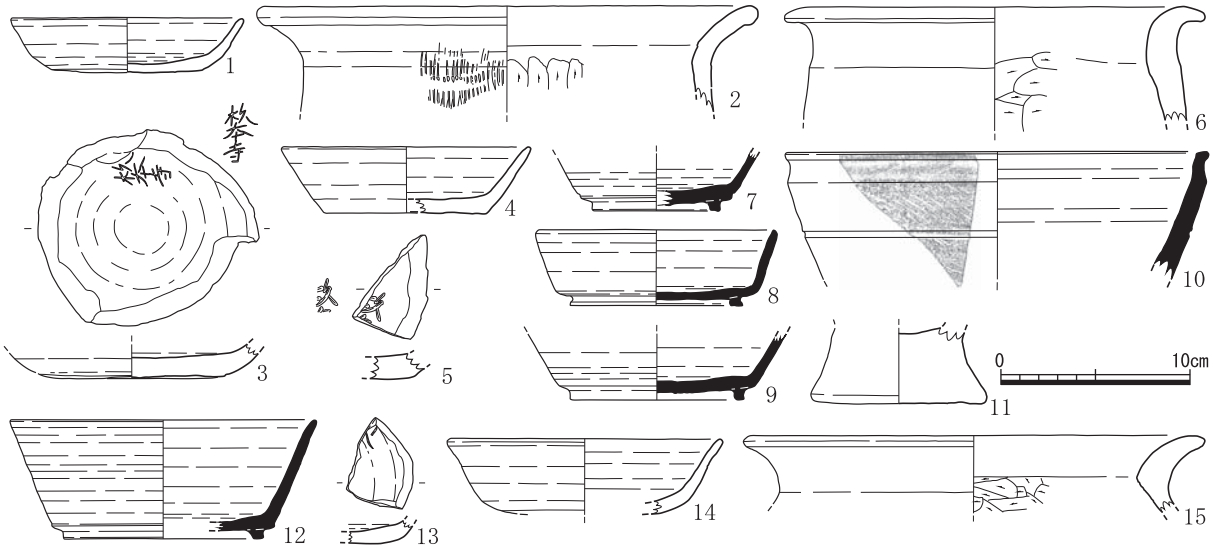

図８　1321調査地点１区出土遺物実測図（S=1/4）

本寺」と全ての文字が解読できる。５も「枚」のつくりの部分と考えられる。６は土師器甕の口縁部である。厚みがあり、端部が外に折れる。７世紀後半～８世紀初頭か。７～９は須恵器の坏で、直線的に外に開く身に低く小さい高台が若干内側に付く。８世紀後半～９世紀初頭のころと考えられる。10は須恵器の鉢の口縁部である。11は弥生土器である。甕棺の脚部で、細くしまりかなり厚みがあるが上げ底にならない。括れがある。甕棺の蓋の頂部の可能性も考えられる。12は遺物包含層出土である。須恵器の坏で、８世紀後半～９世紀初頭のころと考えられる。13～15は撹乱の出土で、13・14は土師器の坏で13には刻書がある。文字は不明である。遺物は概ね８世紀末～９世紀初頭と考えられる。15は土師器の甕の口縁部である。このほか、布目瓦（図55：266）が３号溝から１点が出土している。また、７号溝からは、動物の歯が出土している。

②２区

２区は門型カルバートの工事範囲の一つで、１区の対岸、水路（暗渠）の左岸に位置する。全体は南北約22.5m、幅約3.5～4.5mである。中央部に大きな撹乱があるが、Ⅰ区と比較すれば、遺構が残っていた。本地区では、４条の溝と５基の土坑、そのほかピットを検出した。

＜基本土層＞（図10）

本調査区は、古代の遺物包含上面までは撹乱が及んでおり、調査区周囲も撹乱のため良好な土層を観察できる地点がなかったが、本調査区の南東側で図10の土層断面図Ａ－Ａ’を作成した。１層は現代の土層である。２層は古代の遺物包含層、３層は古代の遺物包含層又は遺構埋土である。隣接する32区との間で、遺構の土層断面図を兼ねて採図したのが図９：Ａ－Ａ’である。地表下0.7mで古代の遺物包含層となり、遺構面（地山）までは、色調の若干の違いにより３層に分かれる。

＜検出遺構＞

２区では、溝が４条、土坑が７基、そのほかピット数個を検出した。

10号溝（図９）

10号溝は２区の北端に位置し、北西隅をかすめるように北東から南西に走っている。図９のとおり、

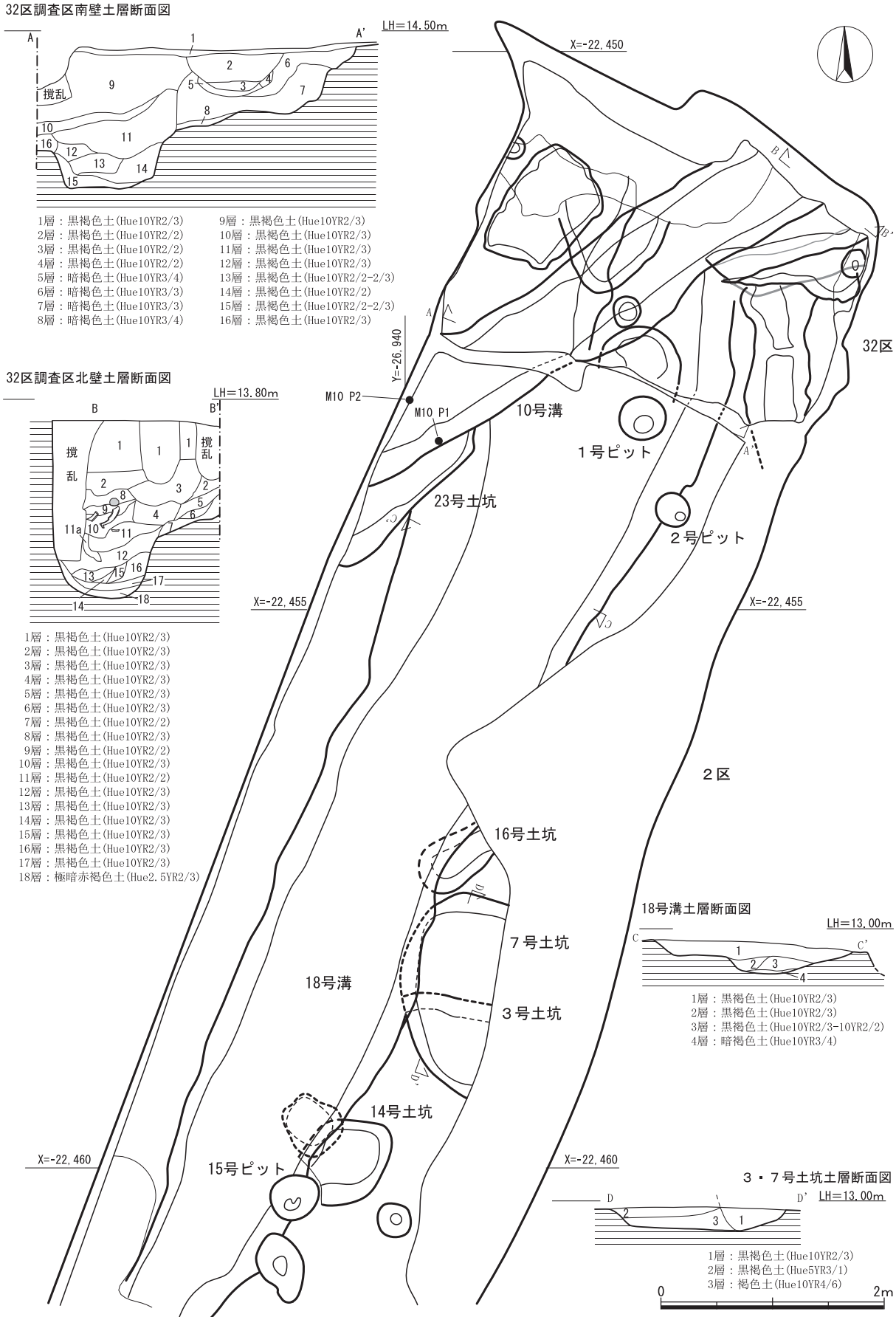

図９　1321調査地点２・32区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

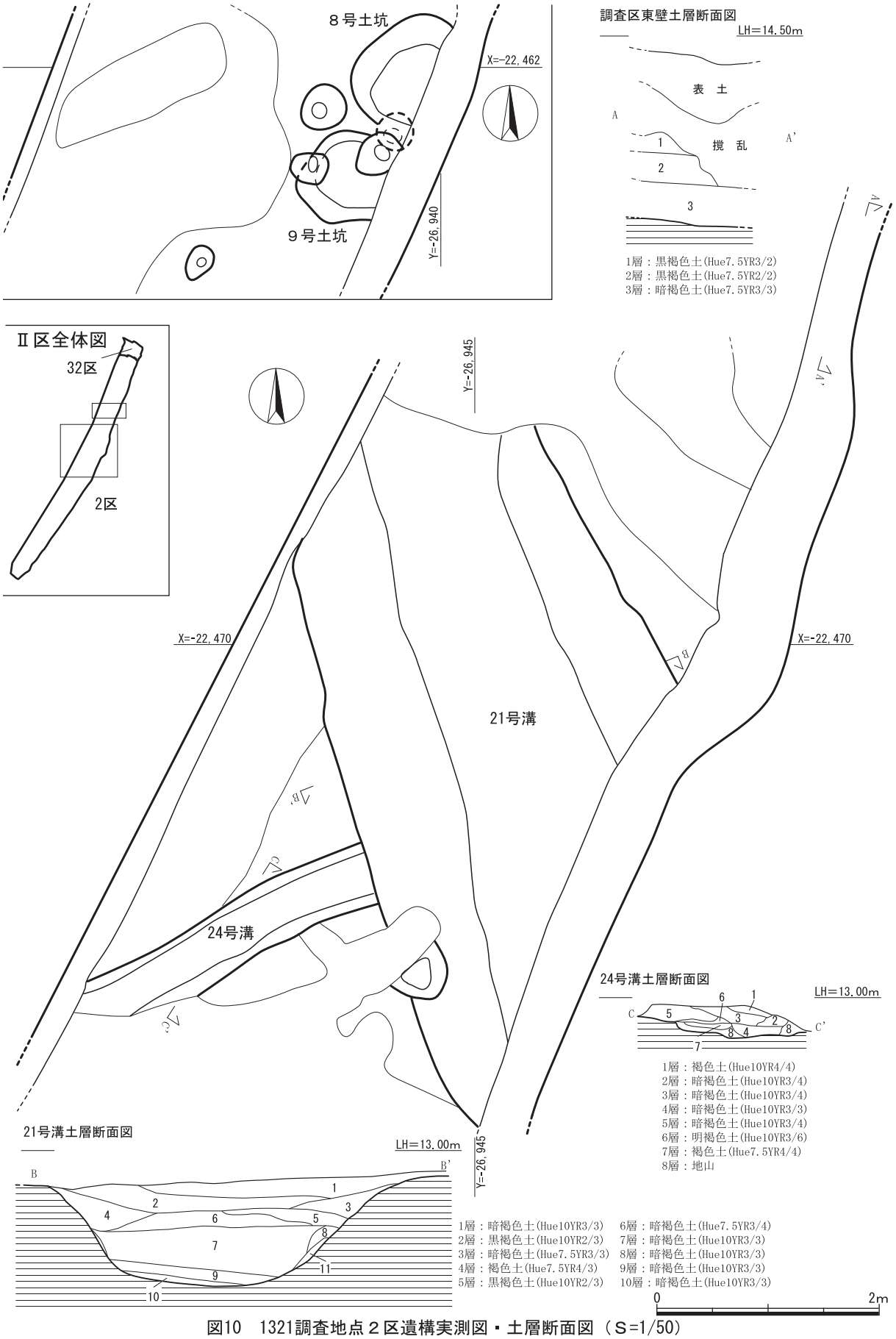

図10　1321調査地点２区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

北は32区にのび、南は調査区外である。現状の規模は長さ約1.9m、幅約0.75m、深さは約0.6mであるが、本来１m程度はあったと考えられる。土師器や須恵器が出土している。２区調査時には18号溝よりは新しいと考えていたが、後述するように32区の調査時に逆であることを確認した。

18号溝（図９）

18号溝は、区の北半中央を北東から南西に走る溝で、現在の水路（暗渠）とほぼ並行している。10号溝と23号溝に切られている。北は32区に続く。現状の規模は長さ約9.3m、幅約0.9～1.95mである。32区の南壁土層断面図Ａ－Ａ’では最も深いところで0.8m程の深さがあるが、南に行くにしたがい浅くなる。土層断面図Ｃ－Ｃ’では、最も深いところで0.3mである。東側にはテラスのように一段平坦な部分がある。２～４層が堆積したのち、拡張した可能性がある。現状では撹乱等のため失われた部分もあり、溝の幅は南に行くほど狭くなるが、本来はそのまま南にのびた可能性がある。しかしながら、２区の中央にある大きな撹乱より南側では続きは検出されなかった。北側から約１/３の範囲の溝の側面・底面は、鉱物の沈着のため硬化しており、一定期間の水の流れを示している。出土遺物は細片が多くほとんど図化しなかったが、土師器や須恵器が出土している。

24号溝（図10）

24号溝は、区の南端に位置する。東北東から西南西に走る溝で、北側は21号溝に切られ、南側は撹乱を受け、調査区外となる。現状の規模は長さ約m、幅約0.6m、深さ約0.4mである。出土遺物がなく、明確な所属時期は不明であるが、周辺の状況から古代の溝の可能性が高い。

21号溝（図10）

21号溝は、２区の南端に位置し、北北西から南南東に走り２区を横断している。現状の規模は長さ約6.7m、幅約3.1m、深さ約0.95mである。土師器と須恵器が出土し、９世紀前半代と考えられる。溝底部では完形に近い土器が出土することが多いが、本溝では細片ばかり80点ほどで、溝の規模から考えて量も非常に少ない。土層断面図Ｂ－Ｂ’をみると、10・９・７層はいずれも整地したように水平に堆積し、４・６・５・３上も両脇が若干上がることから、道など溝以外の遺構である可能性もある。

７号土坑（図９）

７号土坑は２区の北端から南に５m付近、18号溝の東側、東壁下に位置する。東側１/３程度は調査区外にのびる。当初は楕円形の７号土坑の南部に、別の遺構が切っているようでそれを３号土ピットとした。しかしながら、３号ピットのプランが明確に把握できなかったため、ベルトを残して掘削することにした。土層断面図Ｄ－Ｄ’から、１層が３号ピット、２・３層が７号土坑の埋土と考えられる。７号土坑は長さ約1.6m以内の楕円形、３号ピットは７号土坑の半分弱を占める0.2mほどの掘り込みと想定される。骨などに注意をしたが特別な様子はなかった。出土遺物もない。

８号土坑（図10）

８土坑は２区の中央部やや北の、東壁下に位置する。１/４程度が調査区外にのびる。８号土坑の現状の規模は約1.1×0.8m、深さ約0.2mである。８号土坑は土師器と須恵器の小片が１点ずつ出土している。厚い甕の口縁が含まれており、８世紀後半代と考えられる。

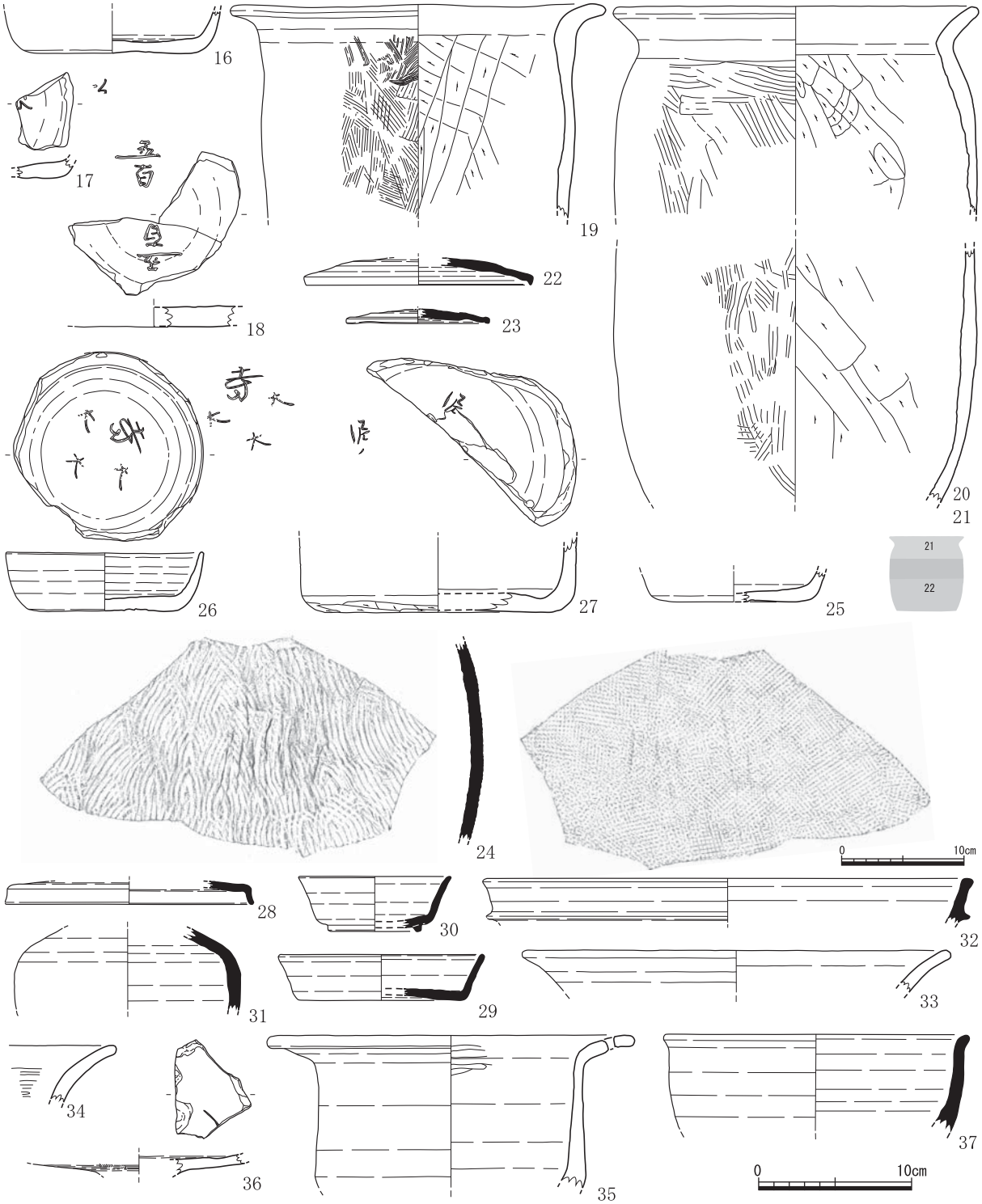

図11　1321調査地点２区出土遺物実測図（S=1/4・1/5）

９号土坑（図10）

９号土坑も、2区の中央部やや北の、東壁下に位置する。１/４程度が調査区外にのびる。９号土坑の現状の規模は約0.9×0.8m、深さ約0.25mである。土師器と須恵器の破片が10点ほど出土している。

14号土坑（図９）

14号土坑は７号土坑の南側、18号溝の東側に位置する。歪な円形で、現状の規模は約09. ×0.7m、

深さ約0.15mである。出土遺物は土師器と須恵器の破片が合計３点出土してる。図化はしていない。

16号土坑（図９）

16号土坑は７号土坑の北に位置する。北側の一部は調査区外にのびる。長楕円で、現状での規模は約0.7×0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

そのほか、ピットを検出したが、掘立柱建物になるような柱列は確認されなかった。

＜出土遺物＞（図11・55）

図11：16～24は、10号溝から出土した遺物である。16～17は土師器の坏で、18は鉢の底部か。17・18には刻書がある。17は文字の一部分で不明であるが､近辺で出土する「枚本寺」という刻書の「枚」のつくりの特徴に類似する。18は「五百」であろう。19～21は土師器の甕である。19は肥厚し大きく外反する口縁からそのまま胴部になる。８世紀中葉～後半か。20と21は接点がなかったが、同じ場所で出土し点あげされたもので、同一個体と考えられる。口縁は僅かに外反・肥厚し直線的に大きく開き、内器面の頸部は削りにより稜が立つ。22・23は須恵器の蓋、24は須恵器甕の胴部である。25は18号溝から出土した、土師器の坏である。26～32までは遺物包含層で出土した遺物である。26は土師器の坏で、見込みに刻書がある。「寺」１つと「大」３つの４つの文字を菱形に配置して刻んでいる。27はほぼ垂直に立ち上がる土師器の鉢？の底部で、刻書がある。文字は不明である。28～32は遺物包含層出土で、それぞれ須恵器の蓋、坏・碗・壷で、32は甕の口縁と判断した。33～37は撹乱からの出土である。33・34は細片のため判断が難しいが、甕の口縁と考えられる。36は高坏の坏部である。水平に広がる形態で、同様の形態で丹塗のものが21号溝の上位で出土している。刻書かと思われる刻みが一筋ある。37は須恵器の鉢で、口縁部がわずかに外反し、肩が張らずに胴部となる。８世紀代～９世紀初頭のものか。このほか、布目瓦（図55：267）が21号溝から１点出土している。

③３区

３区は、本荘北地区を北から南に横断する水路（暗渠）の左岸に位置する。門型カルバートの工事範囲で、２区の南側に隣接する（図３）。全体は南北約22.5m、幅約4.5mである。３区はほとんどが撹乱を受けていた。水路（暗渠）岸となる北西側は長大なコンクリート構造物、３区中央部やや北には８角形のコンクリート構造物が設置されていた。このほか、配管などの掘削もあり、遺物包含層や遺構面の一部は削平されおり、遺物包含層が残されていたのは南端部の約２mの範囲のみである。

＜検出遺構・出土遺物＞（図12）

３区で検出した遺構は、ピット4個のみである。２・３号ピットは上部の削平を勘案すると、ある程度の深さがあり、柱穴の可能性がある。１号ピットはボウル状で、２・３号とは深さが異なる。いずれも出土遺物はない。

３区全体から出土した遺物は、土師器片が３点のみである。図化はしてない。

④４区

３区は、本荘北地区を北から南に横断する水路（暗渠）の左岸に位置する。門型カルバートの工事範囲で、１区の南側に隣接する。全体は南北約16.6m、幅約3.2mである。３区と同様に水路（暗渠）

岸側には長大なコンクリート構造物があり、調査区の半分強は破壊されていたが、残りの部分では遺構の残りが確認できた。

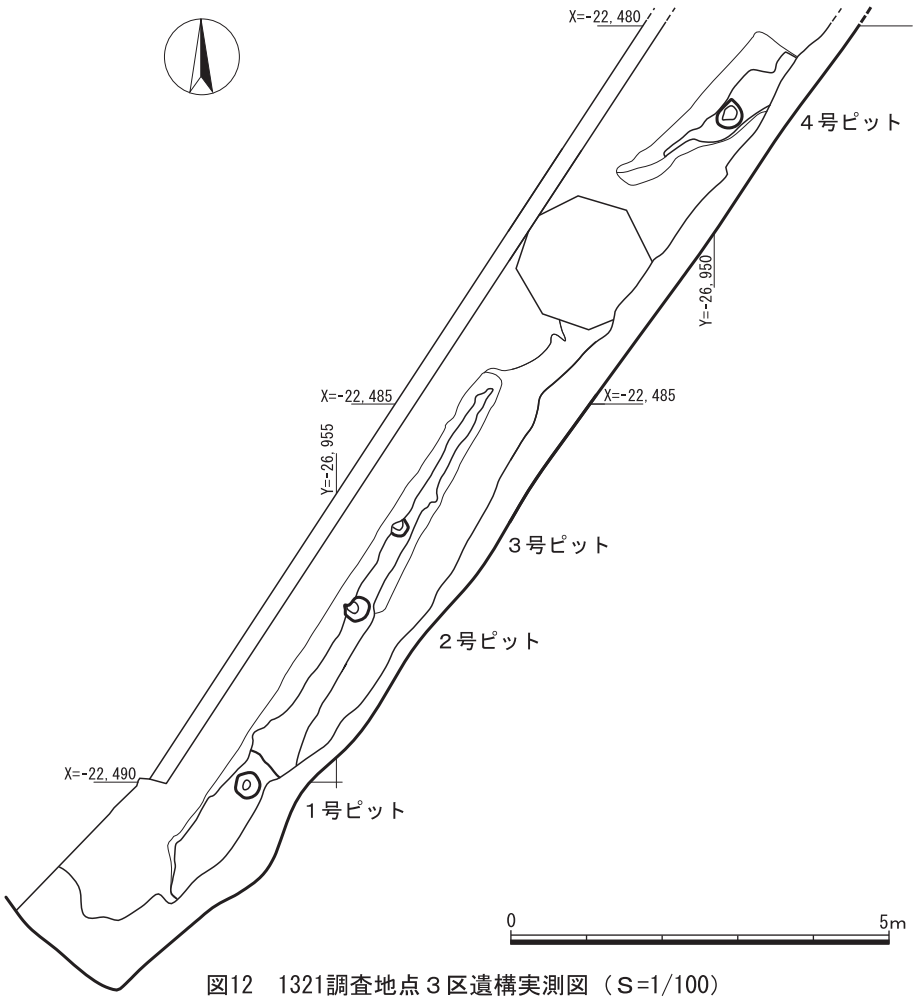

図12　1321調査地点３区遺構実測図（S=1/100）

＜土層＞（図13）

本調査区の土層は、調査区の北西側を西壁として実測した。全体として整然とした水平堆積が形成されていた。表土下の１層は、黄色味が強い粘性のある土である。耕作土にしては混入物が少ない。周辺で確認される耕作土は粘性が低くぼそぼそとした感じであることとも異なる。２層以下は土質や色調から古代の遺物包含層と考えられる。２層には遺物は含まれず、３層以下から遺物が出土した。西壁に沿うように、本地区では溝が検出されており、９・10層がその溝の埋土と考えられる。４層・６層は溝の埋没後に形成された竪穴建物の埋土の可能性がある。本調査区では、掘削時に識別ができなかった。７・８層も同じく、溝の埋没後に形成された遺構の埋土である可能性が高い。

＜検出遺構＞

４区では、竪穴建物１軒、溝状、土坑２基を検出した。

８号竪穴建物（図13）

８号竪穴建物は、４区の南西隅に位置し、西壁の一部が調査区にかかる状態である。２号土坑の下位で検出した。主軸は南北方向で西に17度ほど傾く。現状の規模は長さ約0.8m、幅約0.35m、深さ約0.25mである。竪穴建物の端であるためか、硬化面はなかった。土師器と須恵器の細片が数点出土している

４号溝（図13）

４号溝は、４区の西側に位置する。調査区と並行しており、調査区西半、調査範囲のほとんどを占める。北・西・南側は調査区外にのびる。北は１区に続く地形から考えて南西に流れていたと考えら

れる。南端部の一部はほかの遺構に切られているが、現状の規模は長12m、幅約1.1m、深さ約0.4mである。掘り込まれている地山の特性やほかの遺構との切り合いの影響により掘方はやや不明瞭である。北から４mの付近の底部で、遺物がやや集中した状態で出土した。ほか、骨の細片が数点散在していた。

９号溝（図13）

９号溝は、４区の南端に位置し、調査区を横断している。西側は８号竪穴建物に切られ、東側は撹乱、南は調査区外である。２号土坑の下位で検出した。現状の規模は長さ約１m、幅0.45m、深さ約0.25mである。現場では溝として記録したが、竪穴建物の可能性もある。土師器と須恵器の細片が数点出土している。

１号土坑（図13）

１号土坑は、４区の北から2.3m付近に位置する。東側半分が撹乱により破壊されており、現状の規模は約1.6×0.9mの半月状である。検出した際には、埋土は近現代の土で撹乱と認識して掘削したが、下位で埋土が変わったため、遺構として記録した。したがって、検出時のプランは撹乱のプランで、遺構の当初のものではない。土師器と須恵器の細片が出土している。

２号土坑（図14）

２号土坑は、４区の南端に位置する。東側は、撹乱により破壊されており、南側は調査区外にのびる。現状の規模は長さ約1.65m、幅約0.7m、深さ0.2mの長方形である。古代の

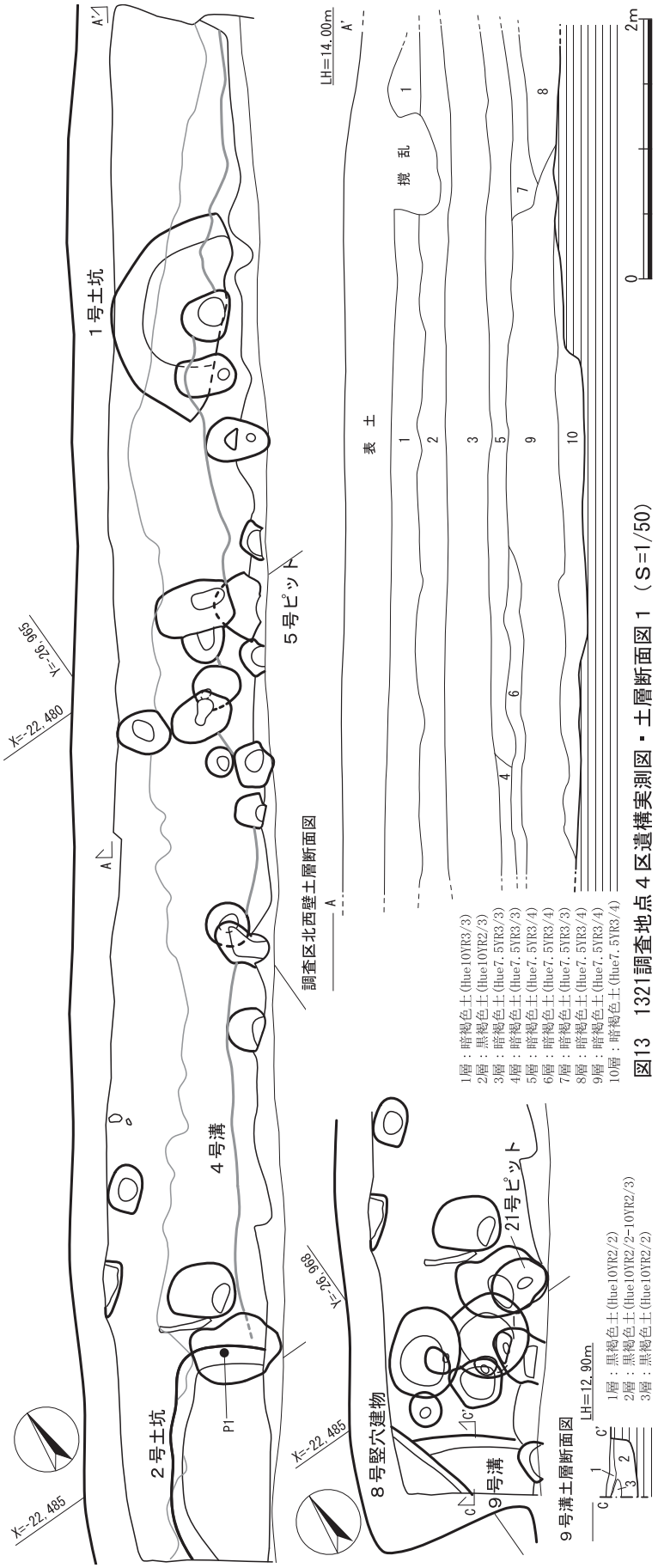

図13　132調査地点４区遺構実測図・土層断面図１（S=1/50）

遺物包含層に掘り込まれており、土壌から当初は撹乱と判断して掘削した。しかし、混入物がなかったため、掘方を記録した。緩やかに皿状に立ち上がる。土師器と須恵器の細片が出土している。

ほか、多数のピットを検出した。４号溝の範囲内のものは、４号溝の掘削後の検出で、４号溝に切られたものである。したがって本来の深さや形状をとどめておらず、歪なものが多い。また、東側の撹乱際に位置するものも、やはり歪な形状となっている。全体として重複も多く、掘立柱建物等を復元しうるものではなかった。

＜出土遺物＞（図15・56）

図15：38～52は、４号溝から出土した遺物である。38～43は土師器の坏、44は鉢と考えられる。42～44には刻書がある。本荘北地区では「枚本寺」と刻書された土師器が出土することから、42の文字は「本」と「寺」と推察される。43は「本」「寺」の一部と推察される。44は「縄」か。45は鉢である。46は長頸壷か甕の頸部と考えられる。47は甑の下半で、18個の蒸気孔が穿たれている。48は須恵器の蓋、49は碗である。50は須恵器の皿、51は高坏の脚部で、絞りの痕跡が明瞭である。52は須恵器の台付壷の胴・底部でろう。４号土溝からはこのほかにも須恵器甕の胴部片をはじめ多くの土師器片・須恵器片が出土している。53は１号土坑から出土した須恵器の蓋である。１号土坑からはこのほか56に類似する須恵器の碗のほか、土師器片が出土している。54は21号ピット出土の須恵器の蓋である。55～62は遺物包含層出土の遺物である。55・56は刻書がある土師器の坏である。55の文字は「枚（スギ）」もしくは「杉（スギ）」、56は「枚」で「枚本寺」と推察される。57は甑の把手である。58は須恵器の蓋で、かえりのない形態で７世紀代に遡るか。59～61は須恵器碗、62は台付の大型鉢か、壷の底部と考えられる。遺物は全体としては8世紀後半～9世紀前葉のころと考えられる。このほか、刀子のような鉄製品が１点（図56：278）出土している。

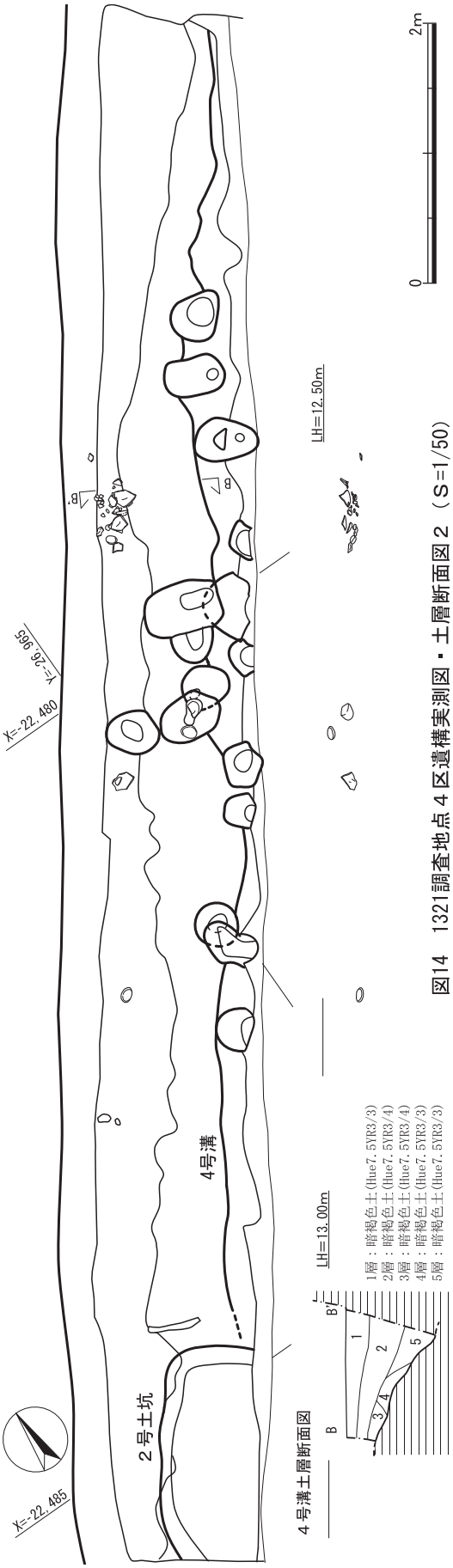

図14　1321調査地点４区遺構実測図・土層断面図２（S=1/50）

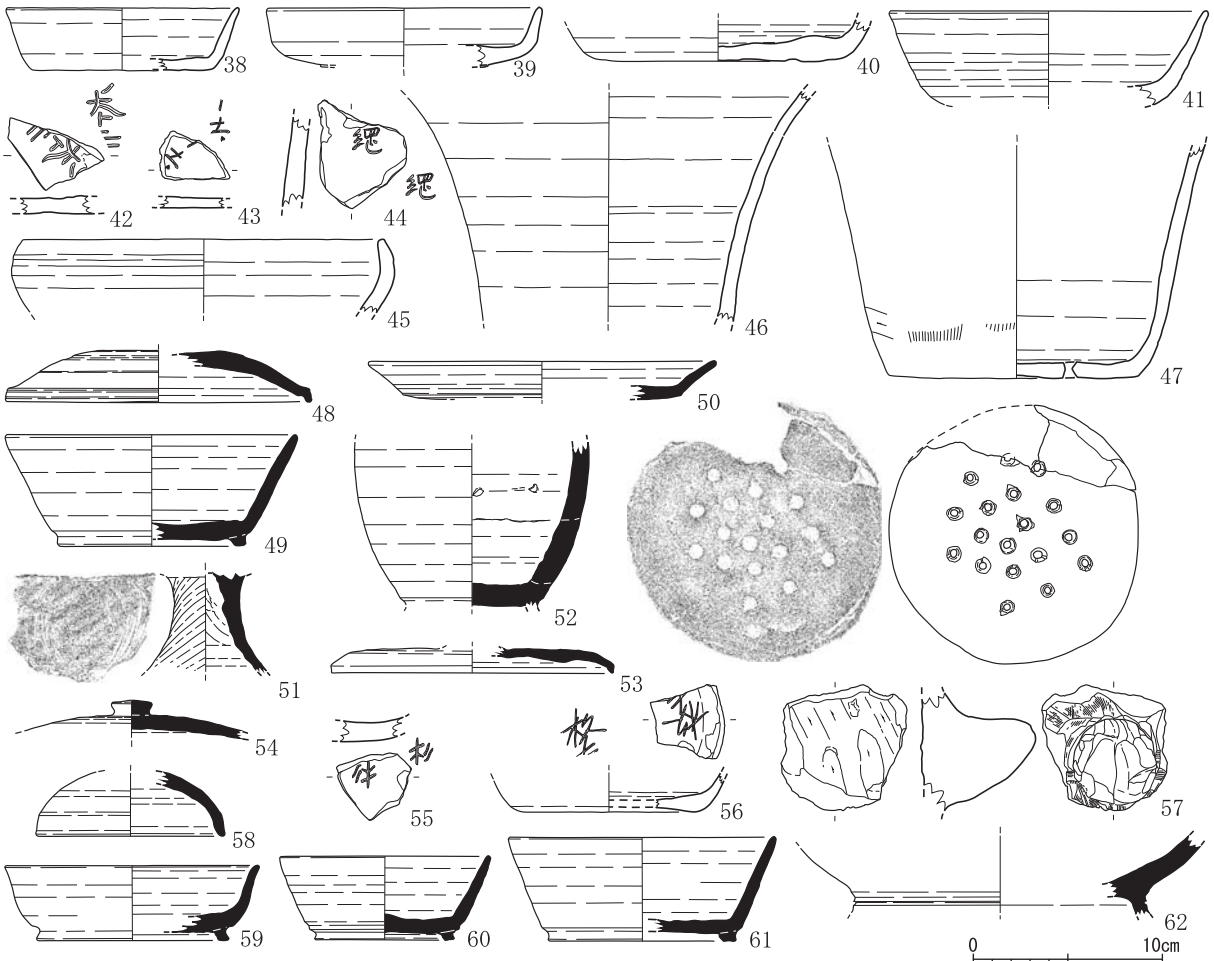

図15　1321調査地点４区出土遺物実測図（S=1/4）

⑤５区

５区は、本荘北地区を北から南に横断する水路（暗渠）の右岸に位置する。門型カルバートの工事範囲で、４区の南側に位置する。全体は南北約6.3m、幅約2.9mである。北西側は、配管が平行して敷設されており、南東側が水路（暗渠）岸となる。５区は、ほかの区に比べれば撹乱が少なく遺構の残りは良好であったが、調査区の周囲が撹乱また水路（暗渠）のため、調査区の土層断面は作成しなかった。

＜検出遺構＞

５区では、溝３条と土坑１基、ほかピットを検出した。

１号溝（図16）

１号溝は、５区の北東端の中央に位置する。東西に走り、北・東側は調査区外にのび、北西側は撹乱により破壊されている。また、３号溝を切っている。現状の規模は長さ約1.1m、幅約0.63m、深さ約0.5mである。９世紀前葉の土師器の坏が出土しており、方向からも古代の溝と考えられる。

３号溝（図16）

３号溝は、５区の北西側半分を占めるように、北西から南東に走る。北西側は撹乱により破壊され、調査区外にのびる。北西は１号溝に切られるが、本溝の方が深く底は本来の姿のままで、調査区外へ

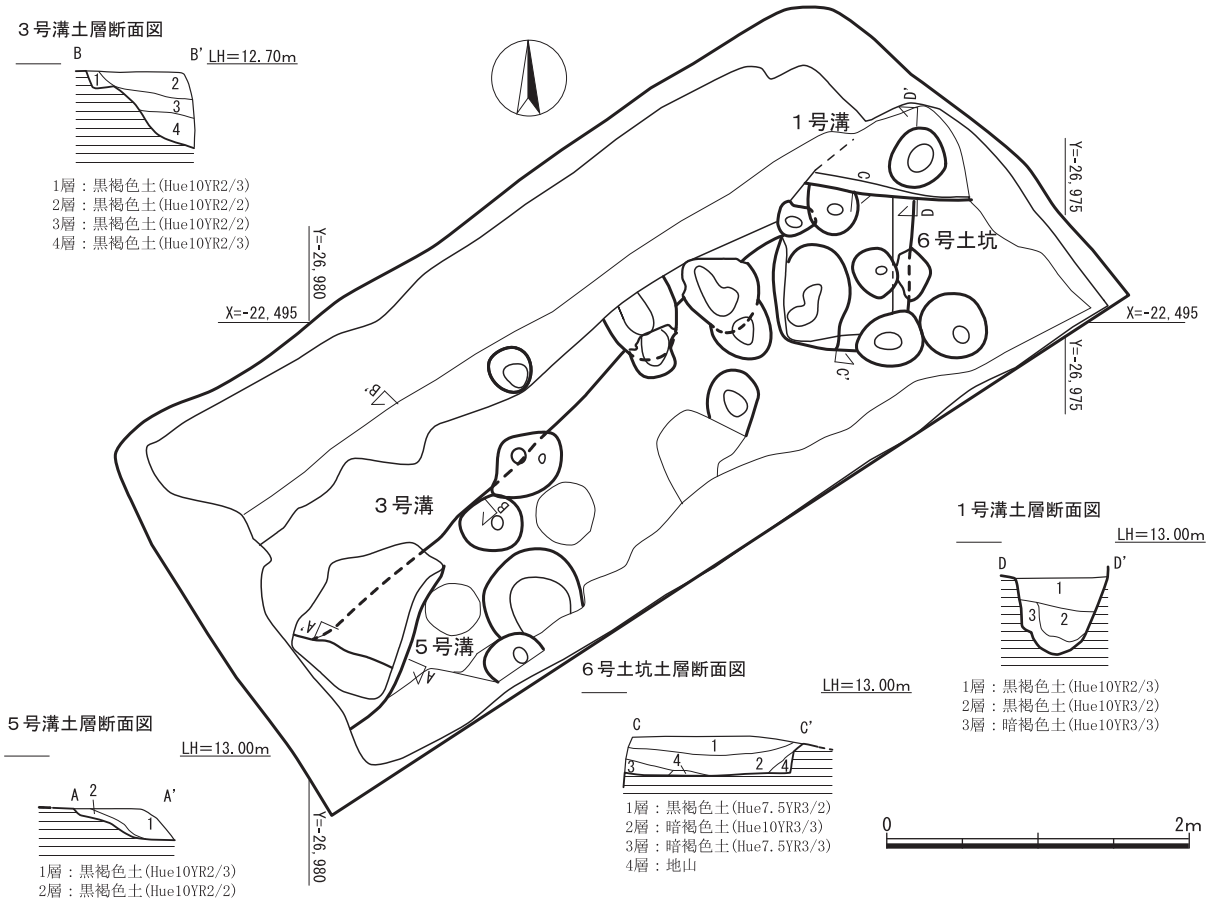

図16　1321調査地点５区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

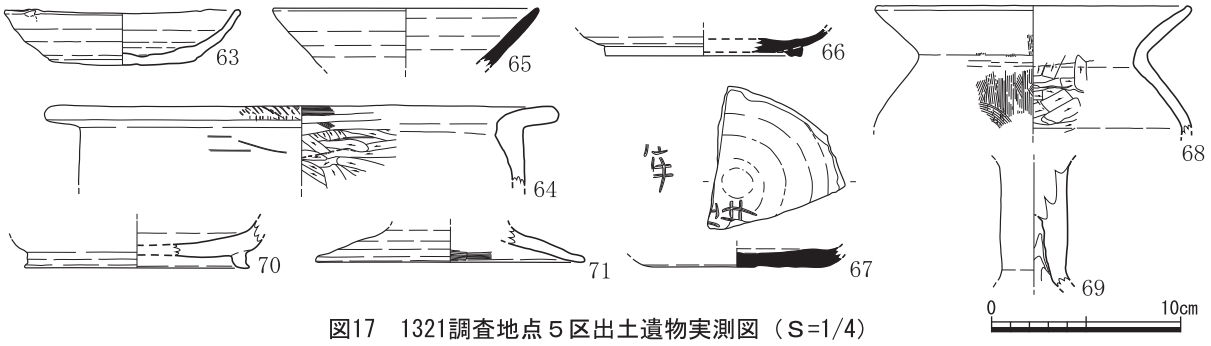

図17　1321調査地点５区出土遺物実測図（S=1/4）

とのびる。南側も調査区外にのびる。現状の規模は長さ約5.1m、幅約0.7m、深さ約0.5mである。B－B'土層断面図では、２～４層が溝の埋土である。３・４層には、地山とする土層より下位の土層の粒が混入する。溝の上端は、南西に行くにしがたい南東側に広がっているが、中場は調査区とほぼ平行に南西に走っている。８世紀末から９世紀前葉の土器が出土している。

５号溝（図16）

５号溝は、５区の南西端に位置する。調査区の南東端から北に向かって走る。北・西側は３号溝に切られ、南側は調査区外にのびる。現状の規模は長さ約1.3m、幅約0.75m、深さ0.2mである。竪穴建物の可能性も考えたが、断面の形状（A－A'）から溝とした。８世紀後半の須恵器の坏のほか、古式土師器が出土している。本溝の埋土は、他の遺構の埋土と比べて明るい暗茶褐色で、耕作土のように黄色やオレンジ・白などの粒子が入り、ザラザラしているように見える土である。9901調査地点

（西病棟建設地点）では古代の土壌は黒色と暗褐色の２期に分かれることを確認し、暗褐色は新しい方と認識している。しかし、別地点では色が明るい方が古い場合もあり、５号溝も本区の主な遺構の中では最も古い構築順となる。

６号土坑（図16）

６号土坑は、５区の北東部に位置する。北側を１号溝に切られ、ほか、大小のピットの重複がある。現状の規模は長さ約1.1m、幅約0.9m、深さ約0.28mである。底部も、長方形に端正に掘削されている。土坑底では、さらにいくつかのピットが検出されたが、特記する特徴はない。

そのほか、ピットを検出したが、掘立柱建物になるような柱列は確認されなかった。

＜出土遺物＞（図17）

図17：63は１号溝から出土した土師器の坏である。８世紀末～９世紀前葉と考えられる。64～66は３号溝から出土した。64は甕の口縁部で、頸部が肥厚しており、口縁はほぼ水平に折れて開く。65・66は須恵器の坏である。66は低く小さい高台が付き、８世紀後葉の特徴を示す。67～69は５号溝から出土した。67は須恵器の坏で、刻書がある。68・69は古式土師器の甕と高坏の脚部である。70・71は遺物包含層出土である。土師器の碗と古式土師器の高坏の脚部（裾）である。68・69・71は古墳時代前期、ほかは概ね８世紀後半～９世紀前葉と考えられる。

⑥10区西

10区は、本事業の発掘調査範囲の南側に位置する。浸透井戸を設置する８区と11区の間を東西に繋ぐ配管部分である。工事の都合上、管路を一度に掘削しなかったため、東西に分けた。東西約８m、幅約２mである。10区の東側は図17の１号ピットの実線部までで、土層断面（A－A’）を実測している部分が10区西の東端である。

＜基本土層＞（図18）

10区西は、周囲が撹乱のため適当な箇所がなく、10区東との境となる東壁で、基本層序として土層断面図を作成した。土層断面図Ａ－A’の１層は、礫やコンクリートガラなどはないが、近現代の土層である。２・３層が古代の遺物包含層の黒褐色土である。２層より３層のほうが黒い。４層は２・３層の中間色で、この付近に何らかの遺構があった可能性が考えられる。５層は、色調の記載では同じになるが、地山との漸移層で２・４層よりは明るい茶色となり、土質も密で粒子が細かくなる。６層は基本的に３層と同様である。

＜検出遺構＞

10区西では建物１軒、土坑３基、そのほかピット多数を検出した。

３号竪穴建物（図18）

３号竪穴建物は、10区西の中央、北西壁下に位置する。南東角が調査区内にあり、そのほか大半は調査区外にのびる。東壁がやや内側に入り込んでいるが、南壁の状況から主軸は北を向くと考えられる。現状の規模は約3.4×1.1m、深さは0.1m 前後の残りであった。床では、踏み固めた硬化面を確認

した。竈や焼土等はこの範囲では確認されなかった。遺物は細片が多く、全体的に少ない。土師器の坏と甕を図化した。８世紀後半と考えられる。

２号土坑（図18）

２号土坑は、10区西の中央やや東側、３号竪穴建物の0.4mほど東側に位置する。北側は調査区外にのびる。現状の規模は長さ約1.2m、幅約0.9m、深さ約1.05mである。土層図Ｂ－Ｂ’では４～11層が埋土となる。11層は地山の土が壊れて堆積したものである。１・２層は基本土層であるＡ－Ａ’の１・２層に対応し、９・10層がそれぞれ基本土層４・５に対応する。

長方形であることや、北側の調査区壁下、坑の縁で破損の少ない土師器坏が出土したため墓坑かと予想された。しかし、人骨などは検出されず、また土坑内からは多くの土器片、移動式竈と考えられるものの破片が出土し、人を埋葬した墓坑とは考えにくい。

４号土坑（図18）

４号土坑は10区西の西端から約2.2mの南壁下に位置する。南半は調査区外にのびる。現状の規

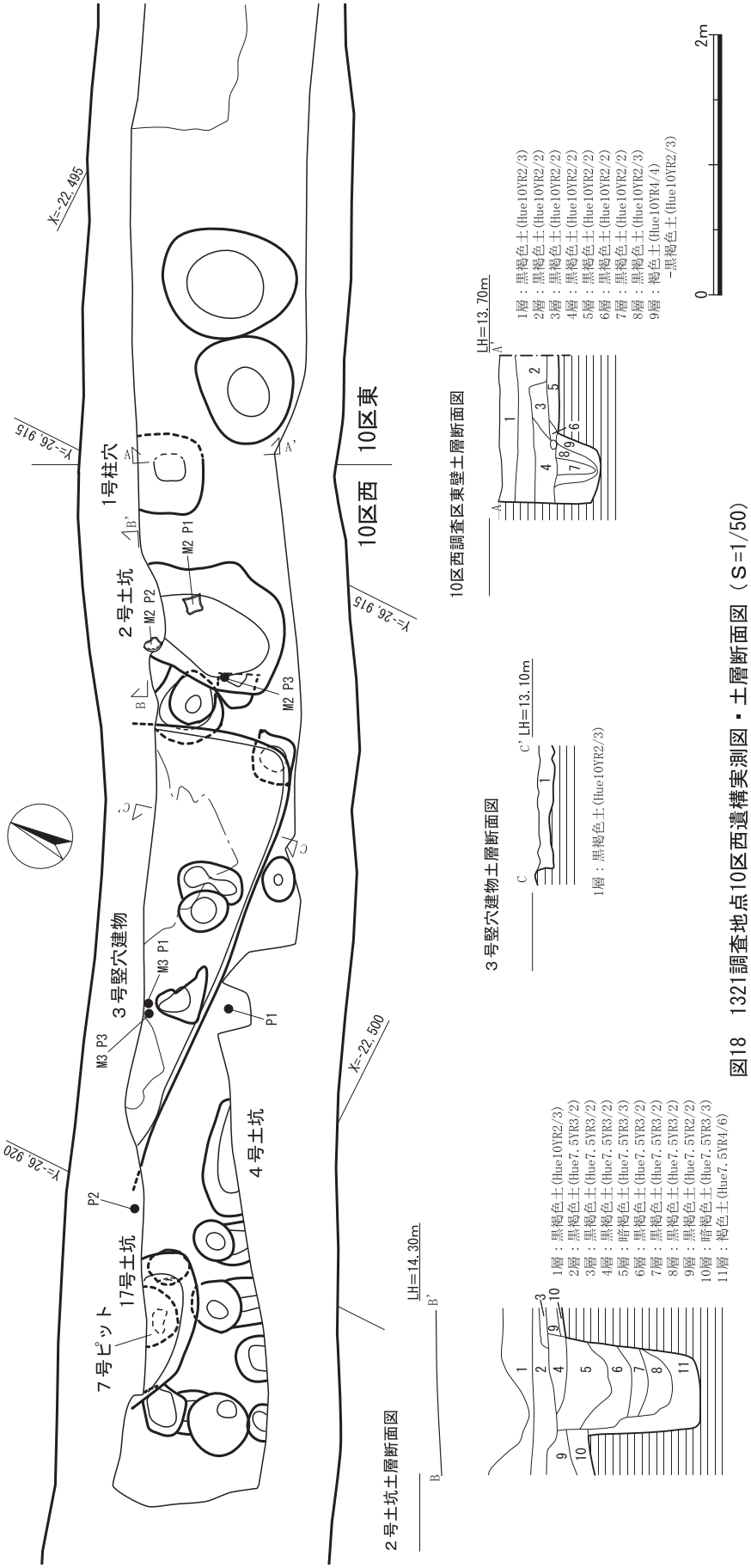

図18　1321調査地点10区西遺構実測図・土層断面図（Ｓ=1/50）

模は長さ約0.9m、幅約0.3m、深さ約0.2mである。ピットの集合ようにもみえるが、検出時のプランに従って掘削した。出土遺物はない。

17号土坑（図18）

17号土坑は、10区西の西端から約0.7mの北壁下に位置する。南半は調査区外にのびる。現状の規模は長さ約1.2m、幅約0.4m、深さ約0.4mである。遺物は土師器片が数点出土しているのみある。開かず直立気味に立ち上がる坏の破片は、８世紀中頃～後半と考えられる。

１号柱穴（図18）

１号柱穴は、10区西の北東隅、10区東との境である東壁下に位置する。北側は調査区外にのびる。調査区を東側に拡張した際には、続きを確認することができなかった。東側に伸びた範囲はわずかであったと考えられる。確認した規模は0.4×0.3mの四角形で、深さは0.3mである。土層断面から、柱穴と考えられる。同様の四角の柱穴は他に検出されなかった。過去には、同本荘北地区の0119調査地点（2010大坪編）で古墳時代の隅丸から四角に近い形の柱穴列が確認されている。

そのほか、多くのピットを検出したが、掘立柱建物になるような柱列は確認されなかった。

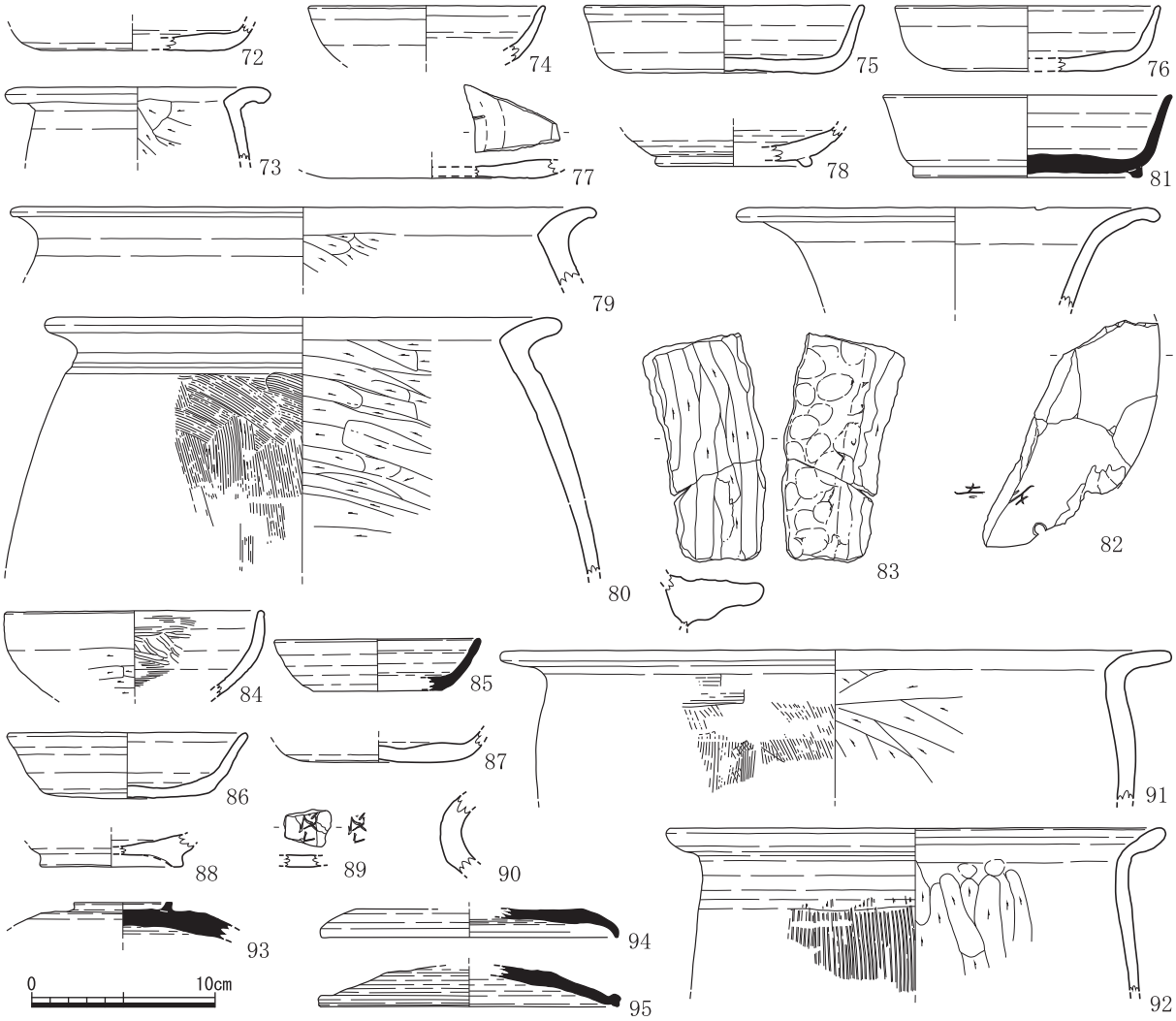

図19　1321調査地点10区西出土遺物実測図（S=1/4）

＜出土遺物＞（図19・57）

図19：72～73は３号竪穴建物から出土した。土師器の坏と小型の甕である。甕の口縁は厚みがあり大きく外反している。ともに８世紀後半のころと考えられる。74～83は２号土坑から出土した。74～77は土師器の坏で、78は碗である。77には刻書文字の一部と考えられる刻みがある。79～80は土師器の甕で、頸部が厚みのある「く」字になる。81は須恵器の坏である。小さく低い高台が底の端に付く。82は、脚にしては内面が綺麗で大形なため、壷の頸部と判断した。端部に一つ穿孔があり、また刻書がある。「寺」か。83は移動式竈のひさしの一部である。平面図左は雑に指でナデでており、平面図右は指で押さえた痕が一面に残る。84～85は7号ピットから出土した。84は土師器の坏で、模倣坏の痕跡がわずかに残る。下半はヘラ削りで調整している。85は須恵器の坏である。86～95は遺物包含層から出土した遺物である。86～88は土師器の坏・碗である。88は78と同様に、径の小さい高台で丸味をもって立ちあがる。89は坏の底部と考えられる。刻書がある。「枕」の下半部と「本」の上部と推察される。90～92は土師器の甕である。91は大きく水平に外板し、92は上に向いて開く。91～92は79～80と比較すると、口縁部が薄手で新相である。９世紀初頭か。93～95は須恵器の蓋である。全体的には８世紀代が中心のようである。このほか、土製紡錘車が１点（図57：286）、泥面子が１点（図57：289）が出土している。

⑦10区東・11区

10区東および11区は、先述のように本事業の調査範囲の南側に位置する。10区東は10区西の東側の続きであり、11区は浸透井戸の設置地である。10区東は東西約7.6m、幅約２ｍで、11区は５×5.5mである。両区にまたがる遺構のため、まとめて記述する。10区東は、大きな撹乱と竪穴建物を検出した。11区は、北側半分弱が撹乱のため破壊され、Ｌ字状に遺構面が残っていた。

＜基本土層＞（図20）

基本土層は、前出の10区西との境である。このほか本地区では、２（27）号竪穴建物の土層を兼ねて、10区東の南壁で土層断面図（図20：Ａ－Ａ’）を、また竈付近の土層断面図を兼ねて11区の西壁で土層断面図（図21：Ａ－Ａ’）を作成した。図20のＡ－Ａ’の１・２層は近現代の土層である。地山と同様の黄色の土で、４区の１層と同じものである可能性がある。３層は４層との漸移層、４層以下が古代の土層で、４・６層が古代の遺物包含層で、他は遺構の埋土である。４層は混入物がほとんどない、黒色の綺麗な土で、５・６層は、白・オレンジなどの粒子が入る、やや明るい茶～黒のザラザラした土である。本荘北区の西側では、４層の綺麗な黒色土に５・６層のザラザラした土を埋土とする遺構が掘り込まれるため、前者が古い古代の遺物包含層、後者が新しい古代の遺物包含層と認識されているが、本地点は逆転している。７層は４・６層の混土層がブロック状に入ったもの、８層は焼土を含む。９～12層は竪穴建物の埋土で、13・15層上面には硬化面が形成されている。図21の土層断面図Ａ－Ａ’は、１層は近現代の土層で、２層以下が古代の遺物包含層である。

＜検出遺構＞

10区東・11区では、竪穴建物１軒、溝１条、土坑１、そのほかピットを検出した。

２（27）号竪穴建物（図20・21）

10区東から調査を開始し、同調査区の東側で遺物と焦土・竈部材片の出土状況から竪穴建物が存在

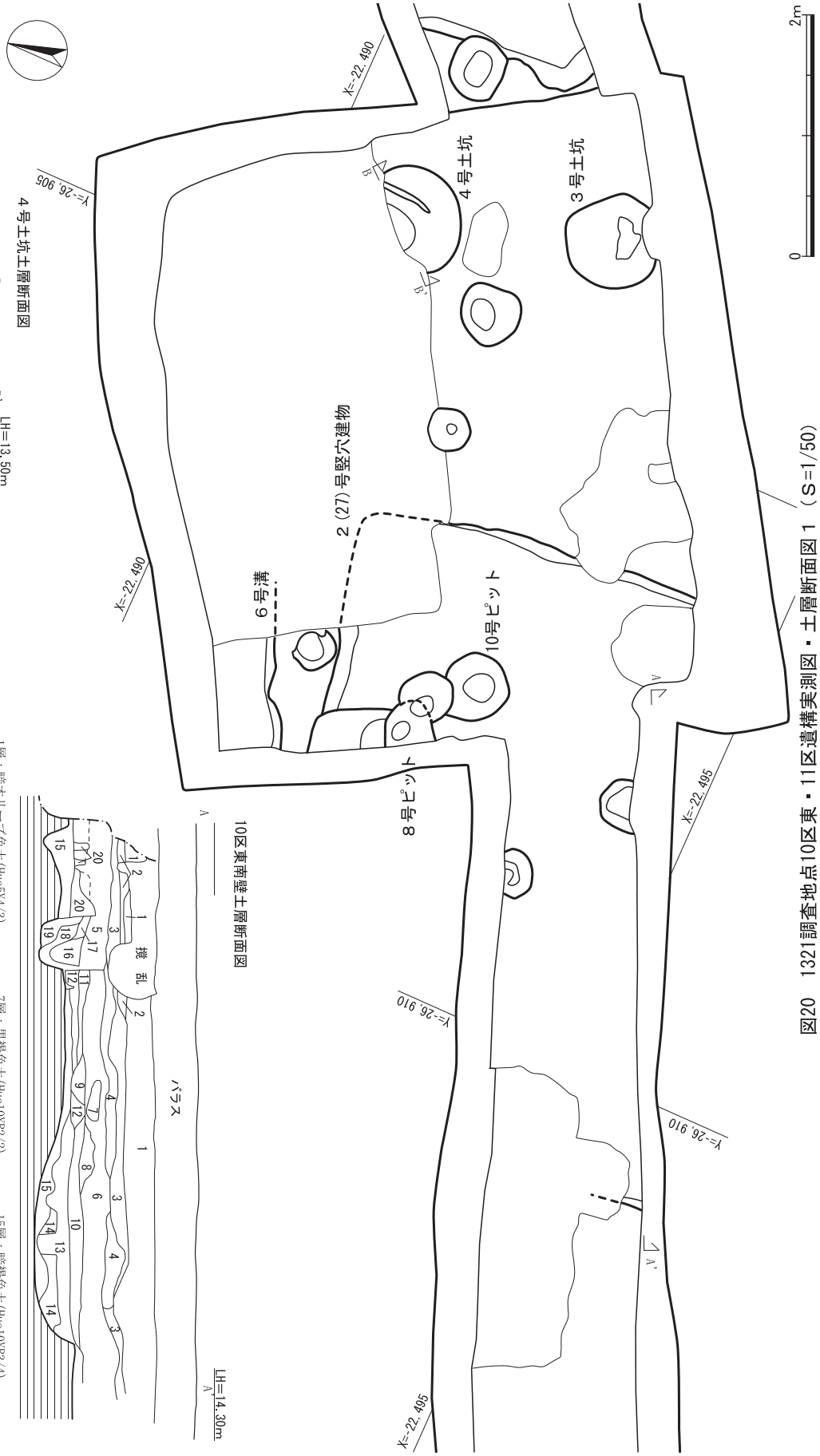

図20　1321調査地点10区東・11区遺構実測図・土層断面図１（S=1/50）

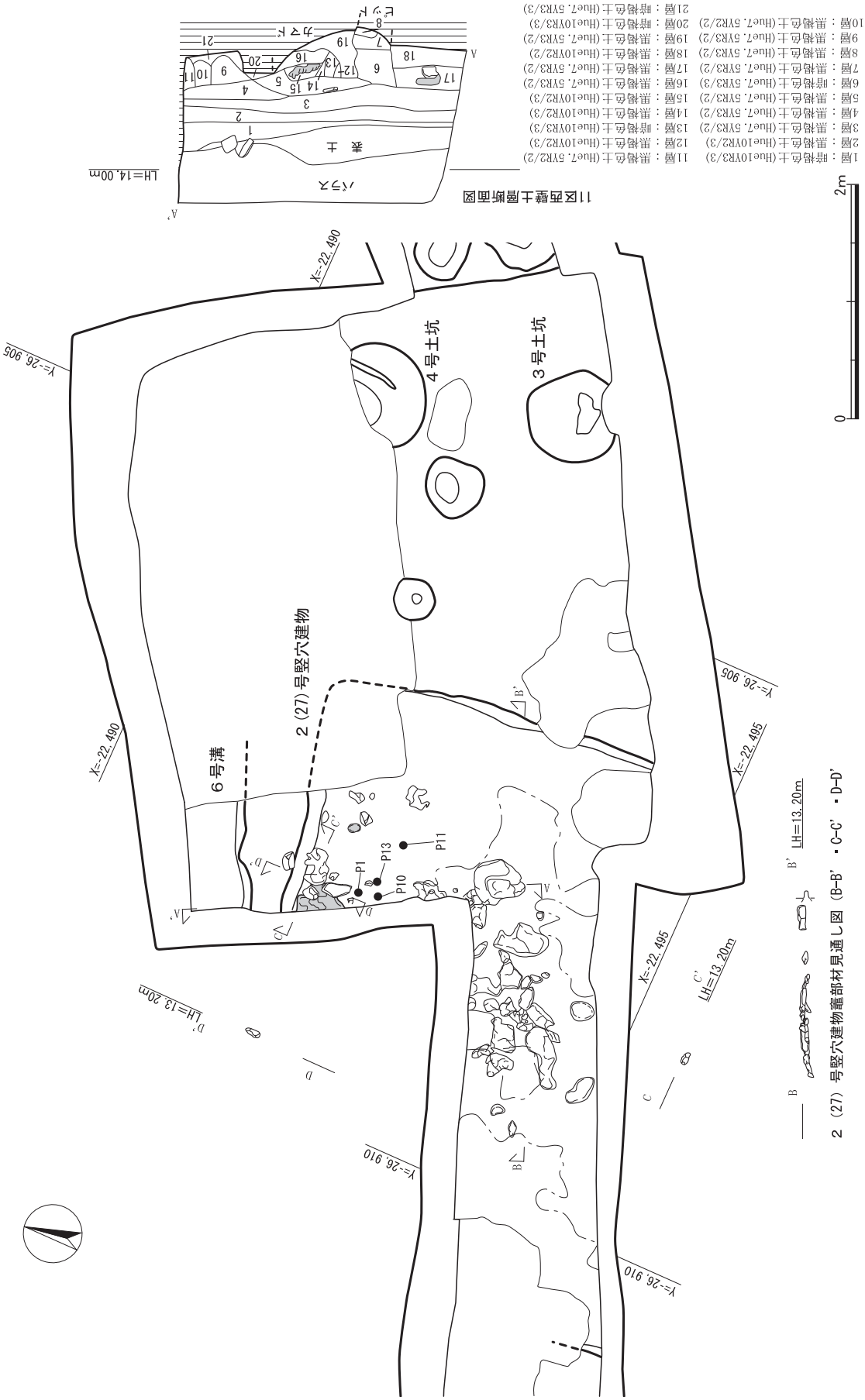

図21　1321調査地点10区東・11区遺構実測図・土層断面図２（S=1/50）

すると想定して掘削をおこなった。東壁は撹乱によりほとんどが破壊され、北・南壁ともに調査区外であることから、当初は全体の把握が困難であった。11区に掘削を広げると、西側で竪穴建物らしいプランを検出した。27号竪穴建物と同一のものか切り合うものかが不明であったため、２号竪穴建物として遺物を分けた。10区東と11区が接続する付近で、焦土と竈の部材が散乱した状態で出土した。しかし、焚口の掘り込みは付近では検出されず、また床を踏み固めることで生じる硬化面が一連のものとして検出されたことから、二つの住居は同一のものと判断した。北壁では、竈の一部かと考えられる掘り込みを検出した。図21の土層断面図Ａ－Ａ’の14・15層には、白色の粘土が含まれる。袖石を設置した際の掘り込みは確認されなかったが、この付近もしくは西側の調査区外には竈の残りが存在する可能性がある。この穴付近を北壁中央として考えると、本竪穴建物の現状の規模では南北約2.9ｍ、東西約4.8ｍ、深さは0.3ｍで、当初は１辺4.5～5ｍとなる。主軸は北を向いている。10号ピットは柱穴であった可能性が高い。ほかの３つの柱穴は、調査区外と考えられる。主軸の向きやプランの大きさ、出土遺物等は、2005（平成17）年に実施した0509調査地点の98号・99号竪穴建物に類似している。遺物は土師器や須恵器が出土している。細片が多い。また、鞴の羽口の破片が出土している。鉄滓などは出土しなかったが、砂岩片の多さは気になるところである。

６号溝（図21）

６号溝は、11区の北西隅に位置する。調査区北壁と並行しており、西・北側は調査区外にのび、東側は撹乱で破壊されている。現状の規模は長さ約0.9ｍ、幅約0.55ｍ、深さ0.2ｍである。底は平に掘削されている。竪穴建物の可能性もあるが、今回の発掘調査区内では硬化面は確認していない。向きは２（27）号竪穴建物と異なり、西側の調査区外では、切り合いが生じていると考えられる。出土遺物はない。

４号土坑（図20）

４号土坑は11区東壁中央付近に位置する。すでに撹乱によって半分以上が失われていた。現状の規模は0.9×0.57ｍ、深さ0.45ｍである。３号土坑とは１間の間隔にあるが、図20の土層断面図Ｂ－Ｂ’のように、柱痕は観察されなかったため、掘立柱建物の柱穴の可能性はない。１層の土は、あまり締まりが良くない。そのため、この土坑を掘削し、２～７層で底をある程度整えたところに、木棺等墓を埋設したとも考えたが、プランが円形であることが気にかかる。１層の土に骨片あるいはその痕跡らしきものもなかった。出土遺物もない。

そのほか、多くのピットを検出したが、掘立柱建物になるような柱列は確認されなかった。

＜出土遺物＞（図22・55・56・57）

図22：96～99は2（27）号竪穴建物出土で、掲載したものは11区の範囲内で出土した。96は土師器の坏である。平底であまり開かずに立ち上がる。97～98は土師器の甕である。97の口縁部は、厚手で内器面は削りにより稜が立つ。大きく外反する。99は須恵器の蓋である。端部はかえりがなくなり下に折れる。これらは８世紀中～後半ごろと考えられる。100は８号ピットから出土した甑の把手で、平らな板状である。９世紀初頭と考えられる。101～107は11区の包含層出土である。２（27）号竪穴建物に属するものの可能性もある。101は土師器の碗で、高台から丸味をもって立ち上がる。102は土師器の坏で底面には、「×」のヘラ記号がある。103～104は土師器の甕で、97と同様に厚手の口縁が

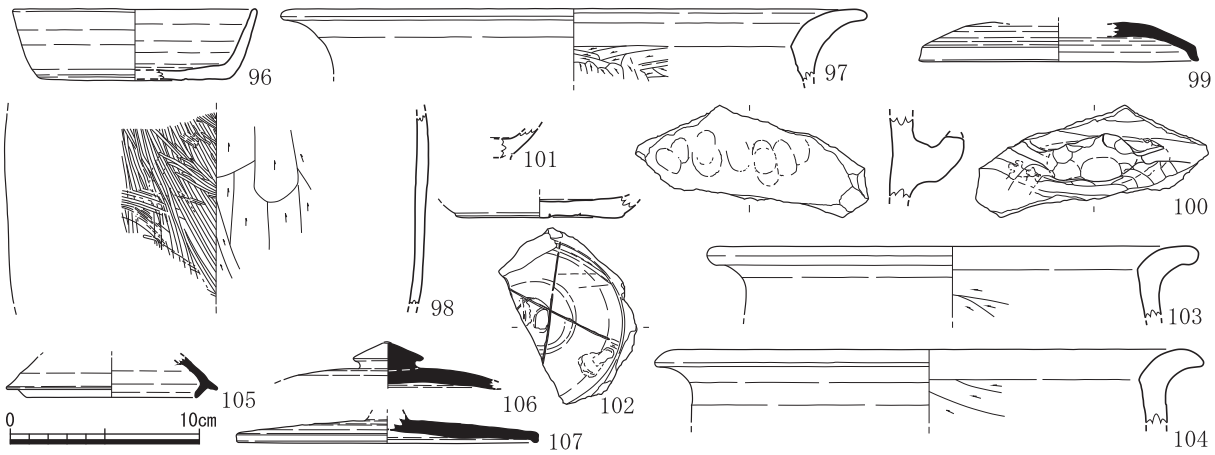

図22　1321調査地点11区出土遺物実測図（S=1/4）

外反するが、口縁部はやや短い。105～107は須恵器の蓋である。105はかえりが付き、器高は高く全体丸味を帯びる。７世紀中葉までさかのぼる可能性がある。106は宝珠形のつまみを有しており、７世紀末葉～８世紀前葉のころと考えられる。107は極端に扁平化し、端部は丸くなっている。全体的には８世紀代を中心としながら、103のように古相のものと、100・102・107のように９世紀代に入ると考えられる新相のものがある。このほか、布目瓦が１点（図55：268）、10区東の包含層から鉄製品（刀子）が１点（図56：279）出土している。また、先述のように２（27）号竪穴建物からは鞴の羽口が１点（図57：293）、遺物包含層からは石製品（紡錘車）１点（図57：287）が出土している。

⑧12区

12区は、本事業の調査範囲の南側に位置する。11区の東側の続きで、浸透井戸の設置地である11区と19区を繋ぐ配管部分である。工事工程の都合により、西側半分強を12区として発掘調査を実施した。東西約10.5m、幅約２m（一部３m）である。既設設備とその撤去の関係上、中央部は東西約５m、幅約0.2mの範囲を拡張した。

＜基本土層＞

12区の北壁で土層断面図を作成した。図23の土層断面図Ａ－Ａ’の２層以下が、古代の遺物包含層および遺構埋土である。２層より上位にある１層とそのほかの土層は、近現代の土層である。他の区と同様、これらは黄色の土である。２・５層が主たる遺物包含層で、堆積状況から４層は５層に掘り込まれた遺構の埋土である可能性が高い。

＜検出遺構＞

１号竪穴建物（図23）

１号竪穴建物は、12区の中央に位置する。北・南側は調査区外にのびる。西壁は本来17号ピット付近にあると考えられるが、撹乱と重なるためか検出されなかった。南側の拡張部においては、東壁の続きや南壁が検出されることを想定して精査したが、明確には竪穴建物の続きを把握できなかった。

図23の土層断面図Ａ－Ａ’から判断すると、17～19が１号竪穴建物の埋土である。遺構検出は地山上面でおこなったため、19層の下半ほどの残りの土壌で確認したことになる。現状の規模は東西約３m、南北は南壁までとすると約1.8mである。遺構確認後の１号竪穴建物からの出土遺物は非常に少ないが、12区の包含層からは大量の遺物が出土しており、竪穴建物であった可能性は高い。19層の上

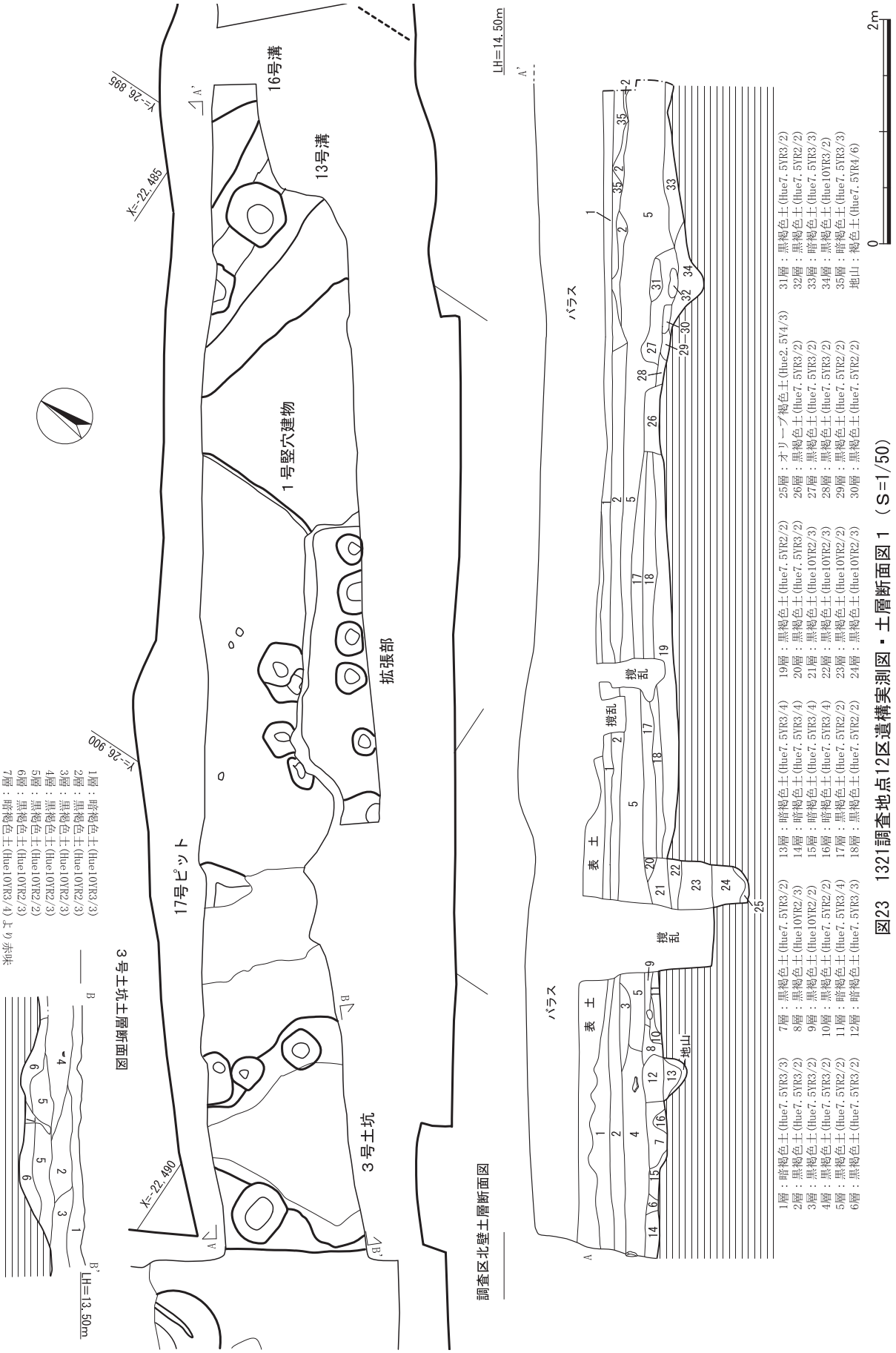

図23　1321調査地点12区遺構実測図・土層断面図１（S=1/50）

面が床面で、床がそれほど硬化しておらず周囲の遺物包含層とともに掘削した可能性がある。上述したように遺構の確認が19層の下半ほどの残りの土壌であった。既に貼り床の下で掘り方である。１点出土した縄文土器は竪穴の掘削・均し時の混入と考えられる。

３号土坑（図23）

３号土坑は、12区の西端に位置する。11区との境付近である。三角形をしており、頂部が北壁の外、底辺が南壁の外にのびる。現状の規模は、約1.2×2.05mである。23図の土層断面Ｂ－Ｂ’では、５～７層が埋土である。北側の６層の左（北側）の土層上面には、硬化面が形成されており、１号竪穴建物を切っていることが確認できる。歪な形で、機能は不明である。遺物は、土師器や須恵器が出土している。

２・12号硬化面（図24）

２・12硬化面は、12区の東端に位置する。硬化面から調査区の東端までの範囲に竪穴建物が存在することを想定して、遺物包含層を掘削した。竪穴建物の立ち上がりは検出されず、硬化面が検出されたため、２号硬化面として範囲測量とエレベーション、直上の遺物の実測をおこなった。長さ約1.4m、幅約0.7mで、西北西-東南東の向きに12区を横断する。２号硬化面を除去すると、下位から別の硬化面が検出された。これを12号硬化面として範囲測量とエレベーションをおこなった。範囲は２号硬化面と重なり、向きも同じである。現状の規模は長さ約1.2m、幅約0.6mである。２号硬化面の上面では、土師器や須恵器などが出土している。この２号硬化面を除去して12号硬化面を検出する間にも土師器片や須恵器片が出土している。

これらの硬化面を除去すると、次に記述する溝が検出され、これらと向きや範囲がほぼ合致する。溝が埋没したのちに道となり、人の往来により形成された可能性も考えられる。

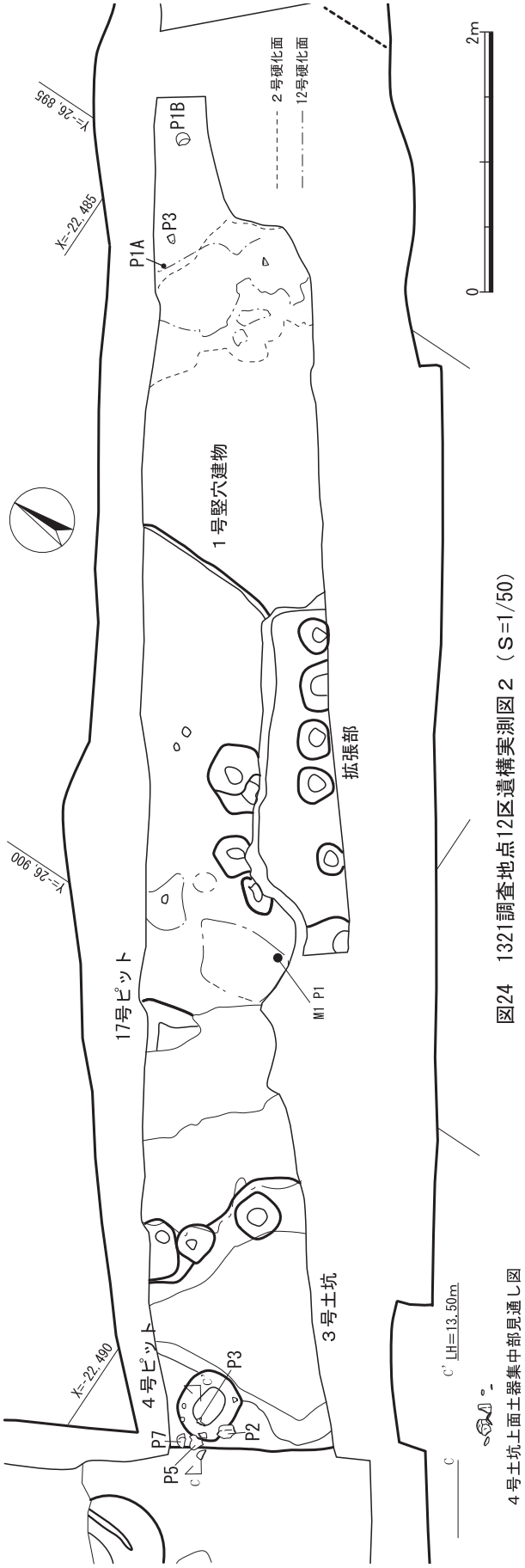

図24　1321調査地点12区遺構実測図２（S=1/50）

13号溝（図23）

13号溝は、12区の東橋に位置する。概ね東西に走り調査区を横断する。西・東側は調査区外にのびる。現状の規模は、長さ約1.7m、幅約1.2～1.5m、底の幅は約0.3m、深さは0.35mである。地形から、東に向かって流れていたと考えられる。右岸は、底からＶ字に立ち上がり、緩やかに浅く角度が変わる。左岸側は後述する16号に上部を切られている。底には一部、ピットのようなくぼみがある。遺物は土師器の細片が２点出土している。

16号溝（図23）

16号溝は、12区の東橋に位置し、13号溝と一部が重複する。現状の規模は、長さ約0.7m、幅約0.4m、深さは約0.1mである。13号溝と同様に東に流れていたと考えられる。13号とともに検出した際には、最初に16号溝（13号右岸－１号左岸の幅）で掘削され、その後13号溝（13号溝右岸－同左岸）が再掘削されたと考えた。そのように掘削・記録したが、土層断面（図22：A－A’）を観察すると、33層が16号溝の埋土、34層が13号溝の埋土で、切り合いは逆であることがわかる。また、溝としてい

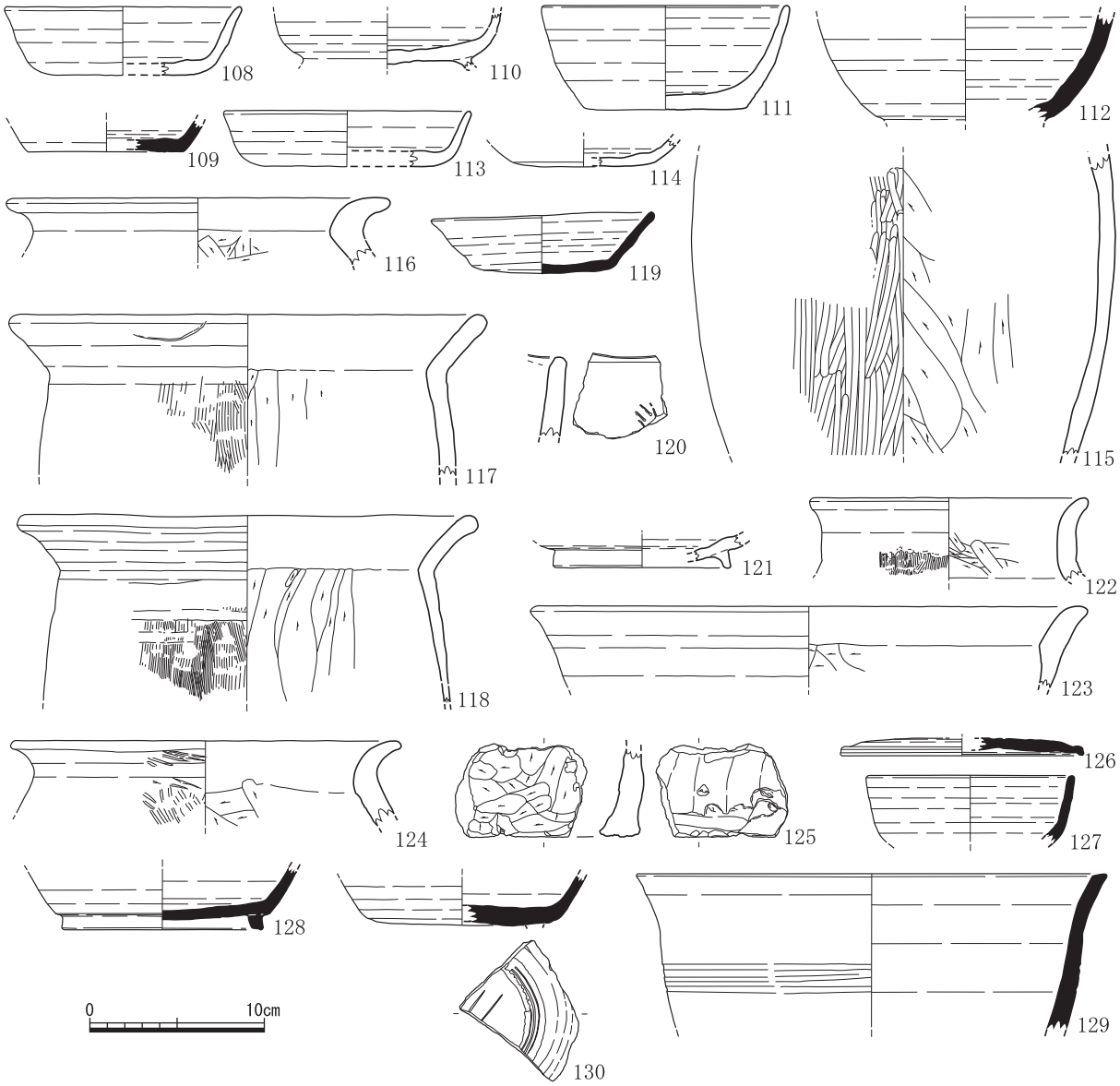

図25　1321調査地点12区出土遺物実測図（S=1/4）

るが、形状からは13号溝が埋没したのち、窪地状となったところへ客土をおこなったか、自然堆積したもののようである。２・12号硬化面が路面の場合は道を整えるための客土と考えられる。

このほか、いくつかのピットが検出されたが、掘立柱建物を構成するような状況は見られなかった。４号ピットの上部では、大きめの土器片が出土した（図24：C－C’）が、遺構との関連は認められない。

＜出土遺物＞（図25・55・56・57）

図25：108～112は２号硬化面上で出土したものである。108は土師器の坏、109は須恵器の坏、110～111は土師器の碗、112は須恵器の台付壷の底部と考えられる。113～115は３号土坑から出土した土師器の坏と甕である。113は垂直気味に立ち上がるのに対し114は開く。前者は８世紀後半、後者は８世紀末～９世紀初頭のころと考えられる。115は甕の胴部であるが、ハケにしては単位が大きい調整痕がある。細い工具で磨いたような調整痕である。116は拡張部の105号ピットから出土した土師器の甕の口縁部で、短く厚手で外反するタイプである。117～119は包含層（４層）の出土で、４号ピット上面で出土したものである。117と118は薄手の口縁が上向きに開く土師器の甕である。明瞭に「く」の字に屈曲しており、７世紀代に筑前南部にみられる甕の特徴に似る。119は須恵器の坏で大きく開くが、器高は低く９世紀前葉のころと考えられる。120～129は、包含層および包含層がやや地山にシミのように残った場所からの出土である。120は土師器の鉢の口縁と考えられ、解読は難しいが刻書がある。121は土師器の碗の底部である。122は甕の口縁である。頸部が直立し、口縁がわずかに外反する古相の甕である。123は甑の口縁部、124は甕の口縁部、125は移動式竈の破片である。126は須恵器の蓋で、かなり変扁平化している。127～128は須恵器の坏である。129は須恵器の金属器模倣の大形の鉢である。口縁下２㎝から軽く屈曲して外反している。130は撹乱から出土した須恵器の坏で、底にヘラ記号がある。遺物は８世紀後半～９世紀前葉のころが主体であるが、122や129は７世紀代に上ると考えられる。

このほか、布目瓦が２点（図55：269・270）、刀子と考えられる鉄製品（図56：280）、土錘（図57：291）、磁器製の破片面子（図57：290）が各１点ずつ出土している。

⑨13区

13区は、本事業の発掘調査範囲の南西側に位置する。新外来診療棟から立体駐車場へ電気配線を敷設するルート上に位置する。10×10mの範囲である。先述のように土壌汚染対策法の対象区画として、熊本市環境局職員の立会のもとに掘削を実施した。掘削すると、13区の北西の１/４強の範囲で、包含層以下の遺跡が残されていた。残りの範囲では、大きなレンガ作りの構造物やそれらに関連すると考えられる撹乱が検出された。

＜基本土層＞

13区の東壁では、地表下0.7mで、古代の遺物包含層に達する。それまでは近現代の土壌である。今回は地表か１mまで掘削したが、遺構面には達していない。本地点において包含層は、0.3m以上の堆積、および１m以下で遺構検出となる。

＜掘削状況＞（図26）

本地点は、地表か0.7mで古代の遺物包含層を検出し、地表下１mまで手作業で遺物包含層の掘削

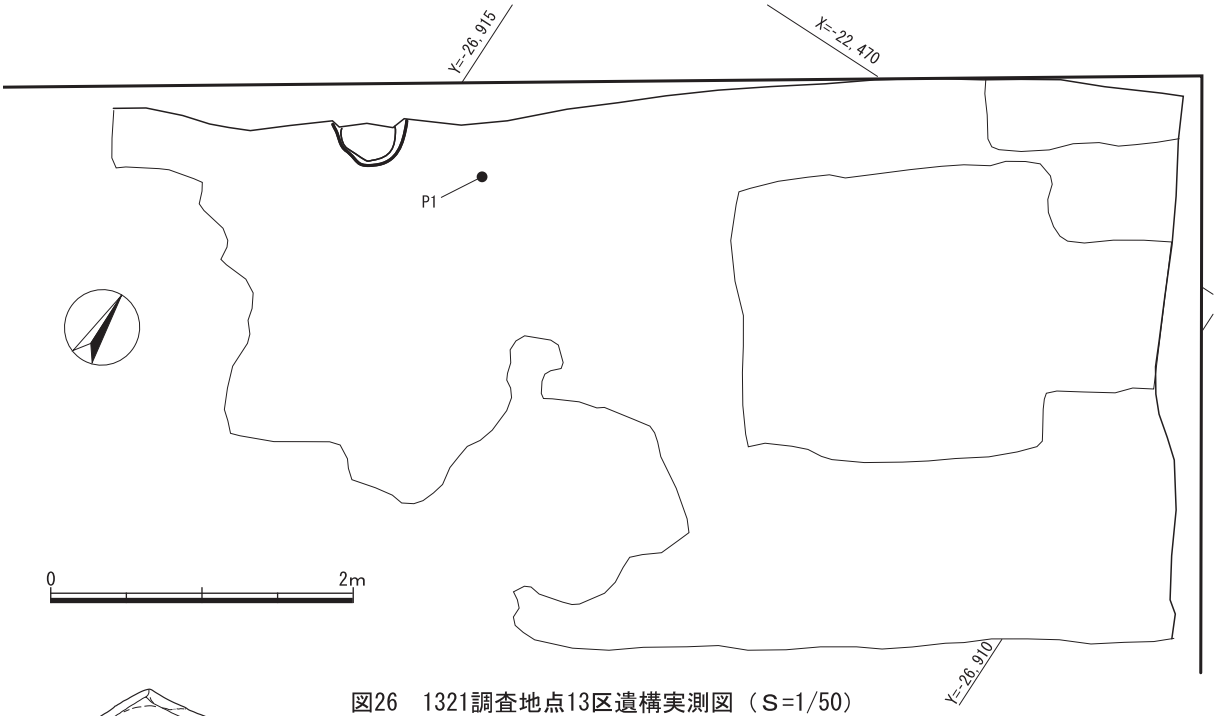

図26　1321調査地点13区遺構実測図（S=1/50）

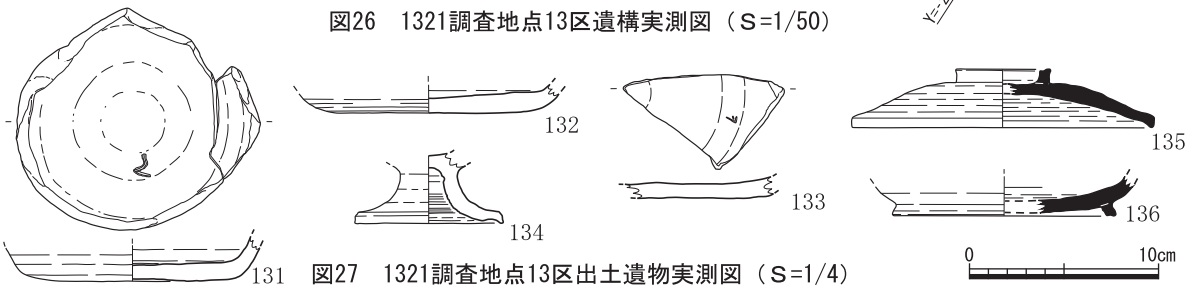

図27　1321調査地点13区出土遺物実測図（S=1/4）

をおこなった。工事に必要な掘削深度が地表下１ｍであったため、掘削はそこまでとした。この深さでは遺構面には達せず、遺構の検出はなかった。この範囲は、遺跡を現状保存したことを記しておく。

本荘北地区の過去の地図を見ると、昭和30年ころには13区付近に汽缶場があったことが分かった（図74－⑤）。水銀による汚染は、汽缶場があったためと考えられる。

＜出土遺物＞（図27）

図27：131～133は包含層出土の土師器の坏で、131には「て」のような刻書がある。134は撹乱出土で、高坏の脚部であろう。裾は括れて開き、端部は下に折れる。小型である。８世紀前半か。135は須恵器の蓋で、高さのある輪状のつまみが付く。下に折れた端部はやや丸くなっている。136は須恵器の碗で、丸味のある底に低く小さな高台が付く。このほか13区からは多くの土師器と須恵器の細片が出土した。

⑩14・15区

14区は、本事業の発掘調査範囲の中央付近、やや東側に位置する。13区の北西（図２では真上）側にある浸透井戸設置地である。15区は、浸透井戸を設置する14区と東側に位置する17区の間の配管部である。14区は5.5×5.5m、15区は長さ約16m、幅２～3mである。17区との接続部では、一部北側に拡張した。14と15にまたがる遺構があるため、14区と15区をまとめて記述する。なお、図面の関係上、15区を東西に分け、14区・15区西と15区東の順に記述する。

図28　1321調査地点14・15区遺構実測図・土層断面図（S=1/50・S=1/10）

14区は、図28のとおり多数のピットが掘り込まれており、竪穴建物や土坑等の遺構プランを把握するのに困難を極めた。15区は、東半分において配管等の構造物による撹乱がめだった。また、14区と同様にピットが多かった。

＜基本土層＞（図28）

本調査区では、浸透井戸設置部から東にのびる管路部分の南壁の一部で、26号竪穴建物の土層断面図を兼ねて土層断面図を作成した。土層断面図Ｃ－Ｃ’の１層の土は、砂質の土で混入物はない。２層も同様である。白川の洪水に起因すると考えられる。近現代の土である。３層以下が古代の遺物包含層・遺構埋土である。３～５層の土にも砂が混入し白川の洪水砂の混土層と考えられる。３・４層は炭粒が入る。３層には、層状の竈の粘土が一部入っており、この付近にあった集落の廃絶後の整地層か、或いは洪水による廃絶を示すものと考えられる。５～９層は、26号竪穴建物の埋土である。５層は砂と２㎝程度の粗粒砂岩が混入する。８層の上面には、26号竪穴建物の床である硬化面が形成されている。

＜検出遺構＞

26号竪穴建物（図28・29）

26号竪穴建物は、15区西端に位置し、一部西壁が14区にある。北・南側が調査区外にのびる。現状の規模は、３×３ｍ、深さ約0.15ｍで、主軸は北を向いている。西壁の南端は、撹乱により途切れているため、さらに南にのびるのかは不明であるが、東西幅から正方形に近いプランを復元するならば、現状の南端がちょうど南西角に相当すると考えられる。15区南壁で観察した土層では、６・７層が埋土で、一点破線が硬化面である。

竪穴建物内では硬化面が検出された。また、14・15区の接続部となる角付近では、竈の痕跡を検出した（図29）。北壁下で粘土と焼土を検出したため範囲を記録して除去すると、袖石の破片や土器が出土した。これらを記録して除去し、完掘すると焚口の可能がある掘り込みを確認した。本荘北地区における既往の発掘調査の成果では、竈は、竪穴建物の一辺の壁の中央部か、角に設けられている。これに照らすと、本竈は竪穴建物の角に設けられた事例に近いが、壁との位置関係から考えると焚口の位置としては竪穴建物の内側に入り込んでいる。遺物は土師器や須恵器が出土しており、土師器の甕、高坏の脚部、須恵器の高坏の脚などがある。

40・41号竪穴建物（図28）

40・41号竪穴建物は、15区西の東端に位置する。15区を東西に分ける基準とした撹乱により、東部を失っている。北側も調査区外にのびる。現状の規模は、２つ合わせて長さ約1.7ｍ、幅約0.65ｍ、深さ約0.1ｍである。主軸は北から約25度西に傾く。遺物包含層を掘削して地山を検出した際、周囲より色調が黒色であったため、遺構として掘削した。竪穴建物と考えるが、中央で段差があり、東側が一段低くなる。埋土が他の遺構のように明瞭な黒色土ではなく、地山のとの漸移層のような土であるため、壁の立ち上がりもやや不明瞭である。土師器の細片が２点のみ出土した。

102号竪穴建物（図28）

102号竪穴建物は、26号竪穴建物の南西に重複すると想定した。ピットを掘削していく過程で、ピット間に周囲の地山土よりは黒色の範囲が残った。それらを掘削すると、僅かながら立ち上がりが

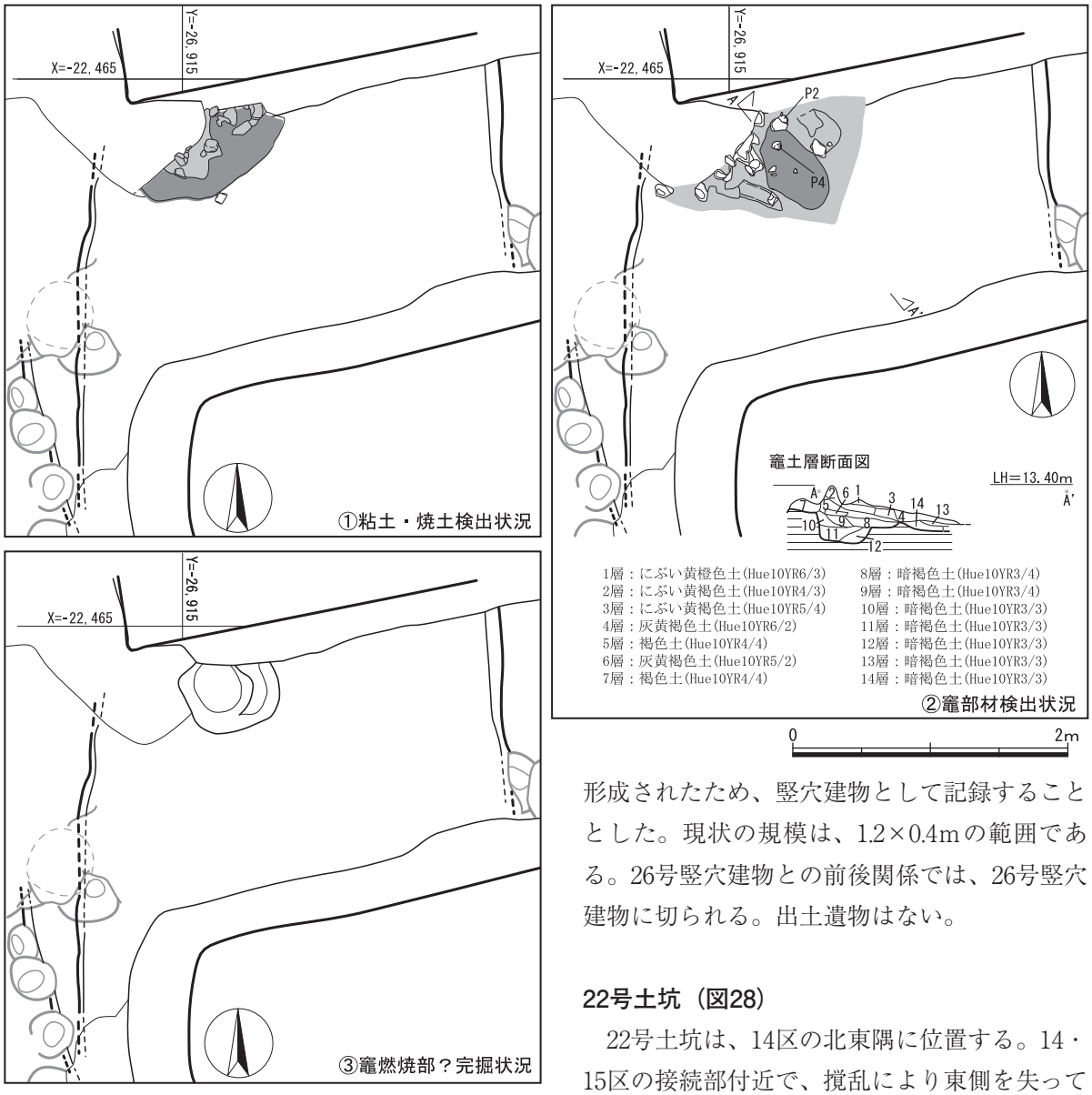

図29　1321調査地点15区26号竪穴建物実測図（S=1/50）

形成されたため、竪穴建物として記録することとした。現状の規模は、1.2×0.4mの範囲である。26号竪穴建物との前後関係では、26号竪穴建物に切られる。出土遺物はない。

22号土坑（図28）

22号土坑は、14区の北東隅に位置する。14・15区の接続部付近で、撹乱により東側を失っている。現状の規模は、長さ約1m、幅約0.65m、深さ約0.1mである。長軸は東西を向く。長方形で墓坑のようだが、そのように判断する特徴はない。土師器や須恵器の細片が出土している。

遺物集中部（図28）

15区の北壁中央下、26号竪穴建物の東側そばで、竈の部材や土器が集中して出土した。一部焼土もあったが、竈の焚口などの遺構に繋がるものは、下部や周辺では検出されなかった。

25号竪穴建物（図30）

25号竪穴建物は15区の中央に位置する。西・南側は撹乱により失われ、北側は調査区外にのびる。現状の規模は、約2.4×1.72m、深は約0.1mである。主軸は約40北から東に傾き、北西に近い。15区西の23号竪穴建物付近で、25号竪穴建物の南壁や西壁に相当する掘り込みは確認していない。15区中央の撹乱の範囲内に、南壁が位置していたと考えられる。竪穴建物の中心になるであろう北西部で、硬化面が検出された。出土遺物は土師器や須恵器が出土しているが、細片が多い。

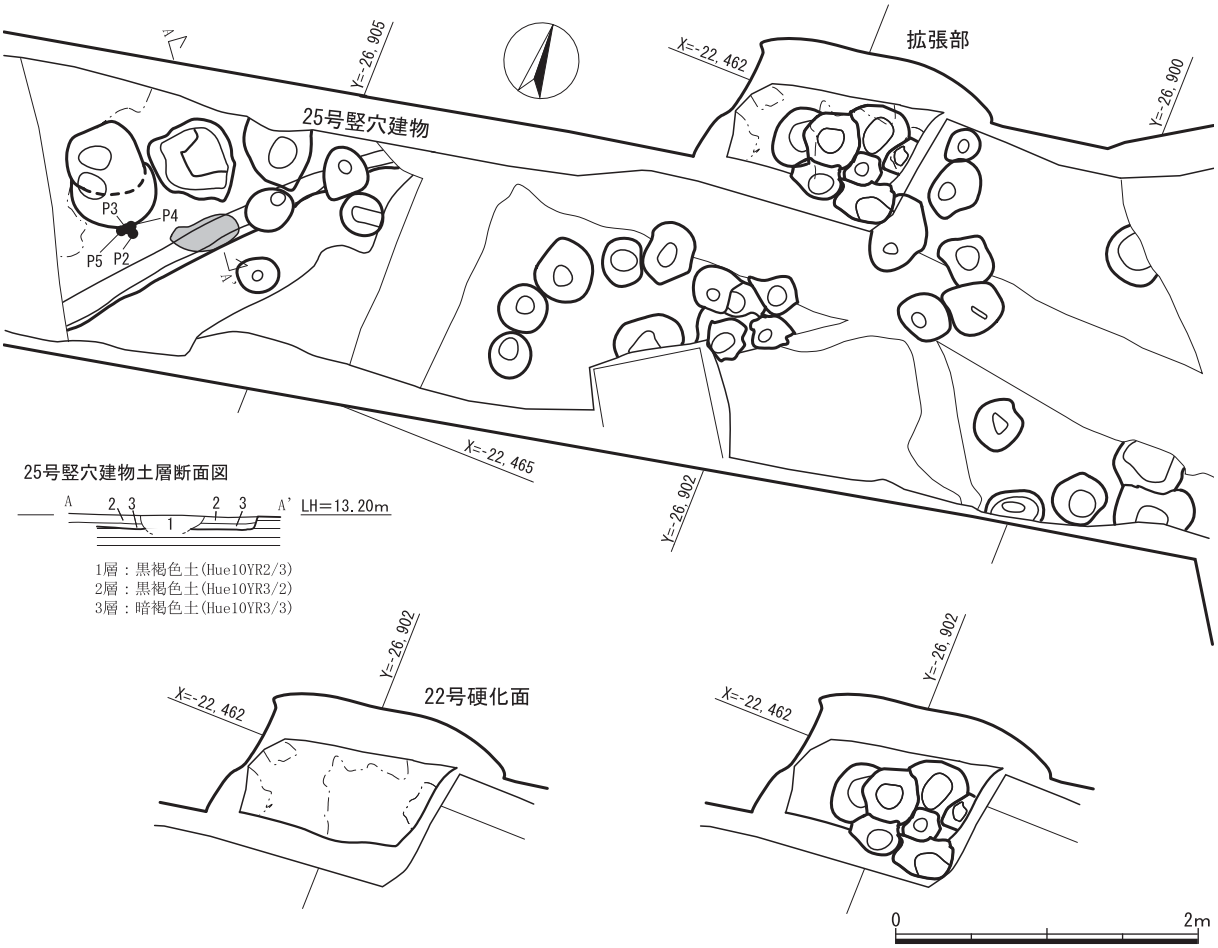

図30　1321調査地点15区東・拡張部遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

22号硬化面（図30）

22号硬化面は15区東端部北側の拡張部に位置する。本来は竪穴建物が存在していたと考えられる。現状の規模は、長さ約1.3m、幅約0.6mの範囲である。拡張部は、周辺より約0.3mレベルが高い。先に掘削した周囲では、硬化面は検出しなかった。土師器や須恵器の細片が出土している。

＜出土遺物＞（図31・55・56・57）

図31：137～147は14区、148～162は15区から出土した遺物である。137～139はそれぞれ29号、30・77号、91号ピットから出土した。137は須恵器の蓋である。扁平化し、端部は玉縁状に仕上げられている。138は須恵器の鉢、139は土師器の坏である。８世紀後半のものと考えられる。140～147は14区の遺物包含層から出土した。140の土師器の坏は、底径が小さく波打つ立ち上がりである。141は土師器の蓋と判断した。刻書がある。「寺」と推察される。142は土師器の坏で、刻書がある。文字は不明である。143は土師器の坏で、底に墨書がある。文字は不明である。144は須恵器の蓋で、天井部に「井」状のヘラ記号がある。145・146は須恵器の坏・碗の底部である。145は低く小さな高台が端付き44はやや高い高台開き気味に、内側に付いている。147は須恵器の甕の頸部である。148は15区の26号竪穴建物から出土した土師器の甕である。149は土師器の甕の口縁部である。古式土師器か。150は25号竪穴建物から出土した土師器の甑と考えられる。151は土師器の坏で、底は糸切りによる切り離しをしている。152～153は須恵器の坏の底部で、153の高台の断面は三角形になり、８世紀前半代のも

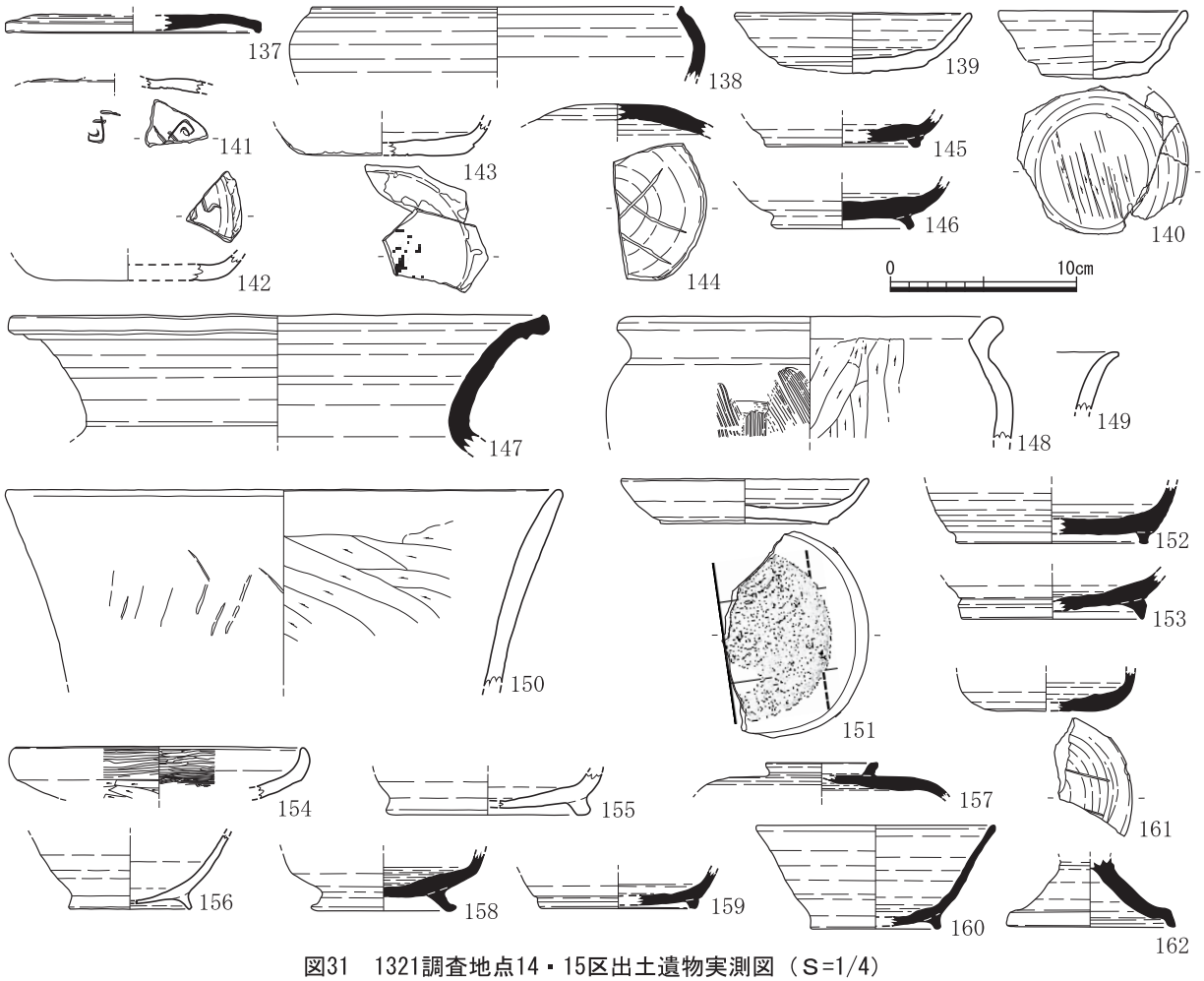

図31　1321調査地点14・15区出土遺物実測図（S=1/4）

のと考えられる。154～162は遺物包含層からの出土である。154は土師器の坏で、７世紀中葉ころのものと考えられる。156は黒色土器の碗で、内側が黒い「黒色土器Ａ」である。「ハ」の字に開く高台が付き、丸味を帯びながら横には広がらずに立がある。157は須恵器の蓋で、輪状のつまみが付く。天井が広く、肩が張る形態をしている。158・159は須恵器の碗・坏である。158はやや高くしっかり開く高台が中央寄りに付く。７世紀後半か。160は須恵器の碗で、高台から一体的に立ち上がり大きく開く。９世紀前半と考えられる。161は須恵器の坏で、底にヘラ記号がある。162は須恵器の高坏の脚部である。本地区の遺物も８世紀後半～９世紀初頭を主体とし、７世紀代にさかのぼるもの、或いは９世紀前葉から10世紀代に入るものも含まれる。このほか、布目瓦が３点（図55：271～273）、鉄製品（刀子）が２点（図56：281・282）、土製品（紡錘車）が１点（図57：288）出土している。

⑪16区

16区は、本事業の発掘調査範囲の南東側に位置する。12区の東側に隣接する。長さ約6.5m、幅約２mの範囲である。撹乱により、遺跡が残っていたのは約2.3×１mの範囲である。

＜検出遺構＞

16区では、重なり合う２条の溝を検出した。

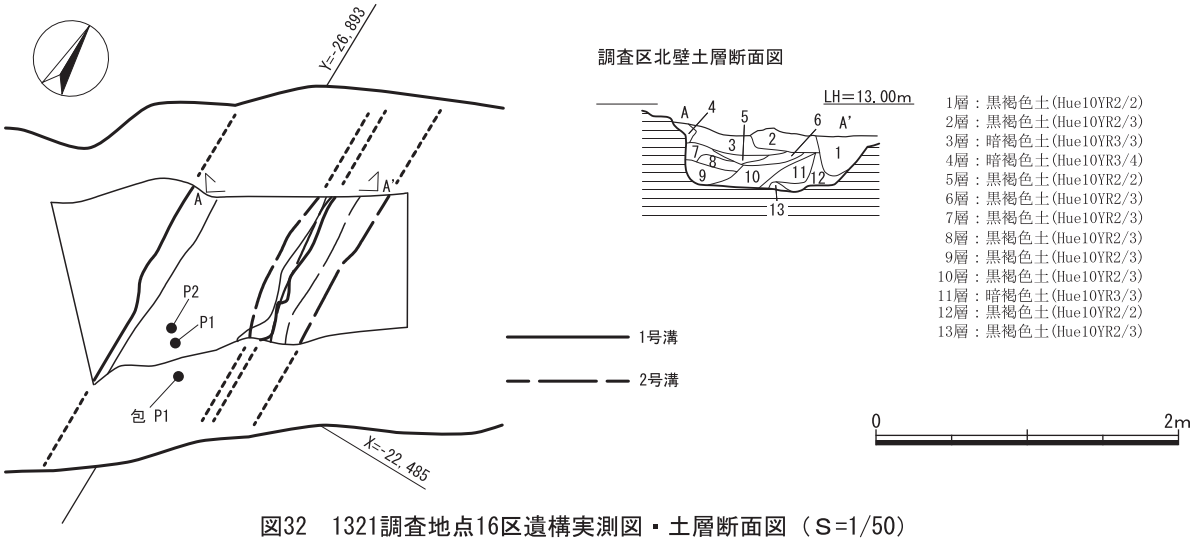

図32　1321調査地点16区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

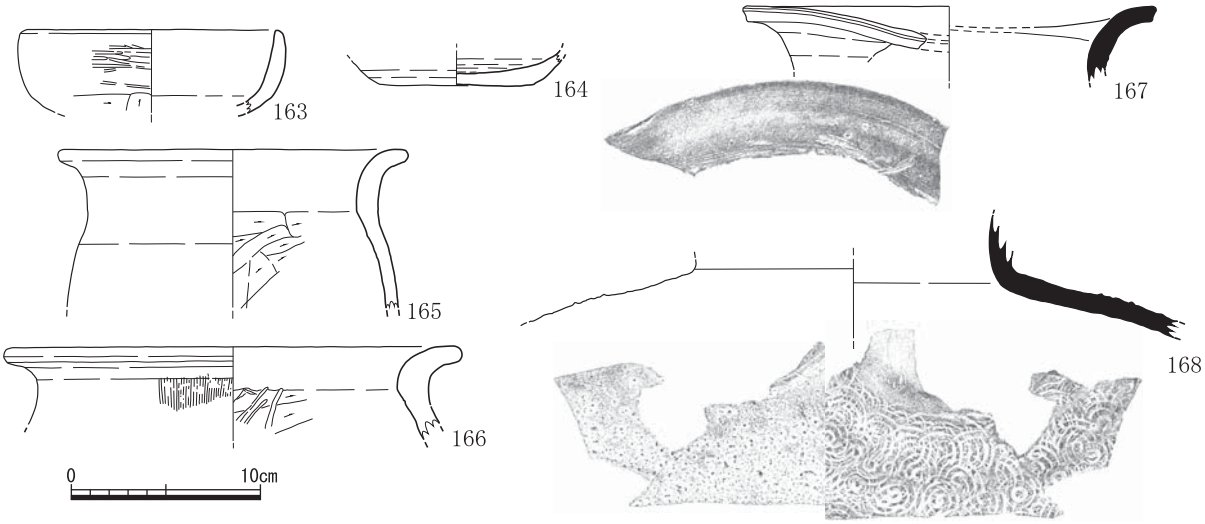

図33　1321調査地点16区出土遺物実測図（S=1/4）

１号溝・２号溝（図32）

１号溝と２号溝が一部重複して検出された。いずれも発掘調査範囲の中央を南北に走る。地形から、南に流れていたと考えられる。二つの溝の前後関係は、12区の13・16号溝を検出した際と同様に考えた。すなわち、２号溝（２号右岸－１号左岸の幅）が掘削され、その後１号溝（１号溝右岸－同左岸）が再掘削されたと考えた。１号溝を想定どおり１号溝右岸-同左岸の幅で掘削した。右岸と底は鉱物の沈着が顕著であったが、左岸の立ち上がりはやや曖昧であった。図32の土層断面図Ａ－Ａ’の２～13層を、１層下の一部である12層を残した状態で掘削した状態である。次に２号溝の掘削をおこなった。２号溝の左岸上部５cm程は、検出面においても地山と溝の埋土の境に明確に観察できるほど鉱物の沈着層が形成されていたが、以下には鉱物はみられなかった。完掘し12層の土を除去すると、一段高くなった幅約７cm程度のテラス状の部分までは、１号溝の底と同程度の鉱物の沈着があった。図32の土層断面図Ａ－Ａ’の観察とあわせ、２号が後に掘削されたと判断した。２号溝からは土師器の甕の破片が出土している。

＜出土遺物＞（図33）

図33の遺物は、16区の包含層から出土した。163～164は土師器の坏である。163は稜の名残があり

７世紀前半までさかのぼる可能性もあるか。164は平らな底部から立ち上がりにかけて三角形に厚みがあり、８世紀後葉～末葉と考えられる。165～166は土師器の甕で、165は厚手で直立気味の口頸部、166も厚手が外反する口縁部で古相を呈している。167～168は須恵器の甕の口縁部と頸・肩部である。このほか、多くの土器片が出土した。

⑫17・18区

17区・18区は、本事業の発掘調査範囲の東側に位置する。立体駐車場の西側前面、基礎医学研究棟の南側である。17区は浸透井戸の設置地である。18区は17区から南の19区に設置する浸透井戸を繋ぐ配管部であるとともに、電気の大型ハンドホール設置地とも重なる。このため18区は、二つの工事業者が設置物の調整をおこない、掘削範囲をまとめて縮小することになった。17区は5.5×５m、18区は４×3.75mである。

17区で先行して発掘調査を開始したが、規模の大きな遺構が18区に連続することが判明したため、二つの区を同時に完掘することにした。

＜基本土層＞（図34）

本調査区では、17区の北東側の壁を東壁として土層断面図を作成した。一部は、調査区の大半を占める１号溝の埋土である。図34の土層断面図Ｂ－Ｂ’の１層はアスファルト下にあったコンクリート、２層はバラス、３層は近現代の整地層である。４層は黄褐色の砂質土が混ざり、焼土粒や炭粒が混入している。小さな礫もわずかに混入する。職員もしくは入院患者が使用していたと考えられる「医大」の文字が連続して一周する磁器が出土しており、官立医科大学附属病院（1929年）以降のものと考えられる。このような状況から、戦後以降の大規模な整地層の一つと考えられる。１号溝は５～９層が１号溝の埋土である。

＜検出遺構＞

１号溝（図34・35）

１号溝は17区を北から南に縦断し、17区のほぼ全面が１号溝の範囲である。現状の規模は、幅は最大で4.7m、長さは20区までを合わせて約18m、深さは約1.2mである。主軸は北から15度西に傾く。地形から、南に向かって流れていたと考えられる。両岸の立ち上がりは緩やかであるが、右岸はやや傾斜が急である。18区では、右岸が調査区外となり、左岸のみ続きが検出された。18区で確認した溝の上端は、17区の東角で検出していた左岸の上端および南の20区で確認した上端の位置を考え合わせると、溝の中場で、18区における左岸の上端は削平されたと考えられる。下端は変化なく南に向かうが、上端はやや東に広がるようである。

土層断面図Ｃ－Ｃ’の１層上面では、土鈴や陶磁器片が出土しており、前述したように上面までは現代の埋土である。下から、13・12層が水平に堆積し、６・７・10・11層の上面で一つの平面をなしている。さらに、２～５層の上面でも一つの平面をなしている。いくつかの土壌が関わりながら、一つの平面を形成しており、非常に緩やかな水性堆積とは異なると考えられる。後に発掘調査をおこなった1708調査地点では、溝と考えられた遺構が道路跡と判明した。本溝も、その可能性がある。遺物は、土師器や須恵器の細片、布目瓦片等の古代の遺物が出土している。掘削した土量を考えると、遺物の出土量は極めて少ない。

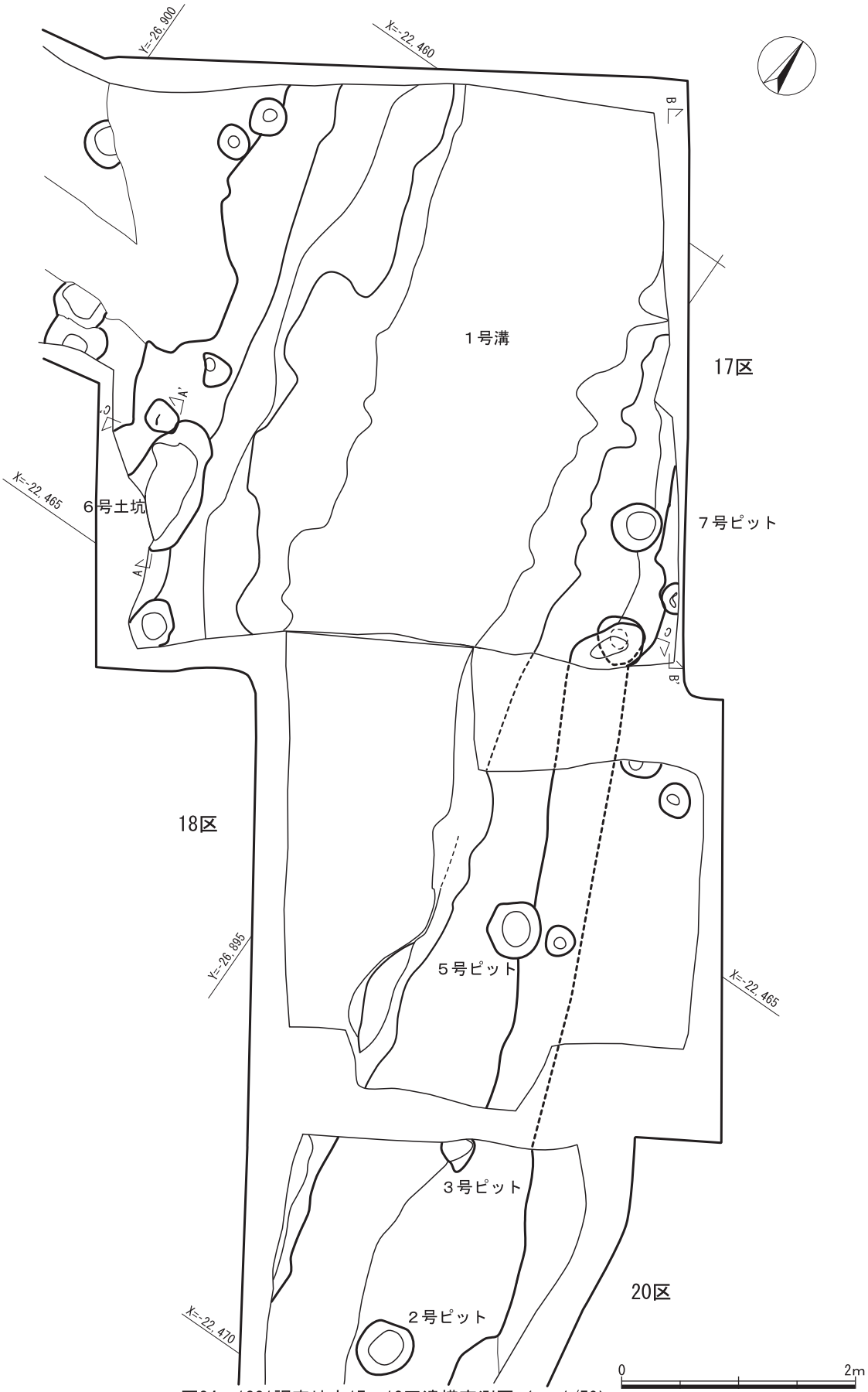

図34　1321調査地点17・18区遺構実測図（S=1/50）

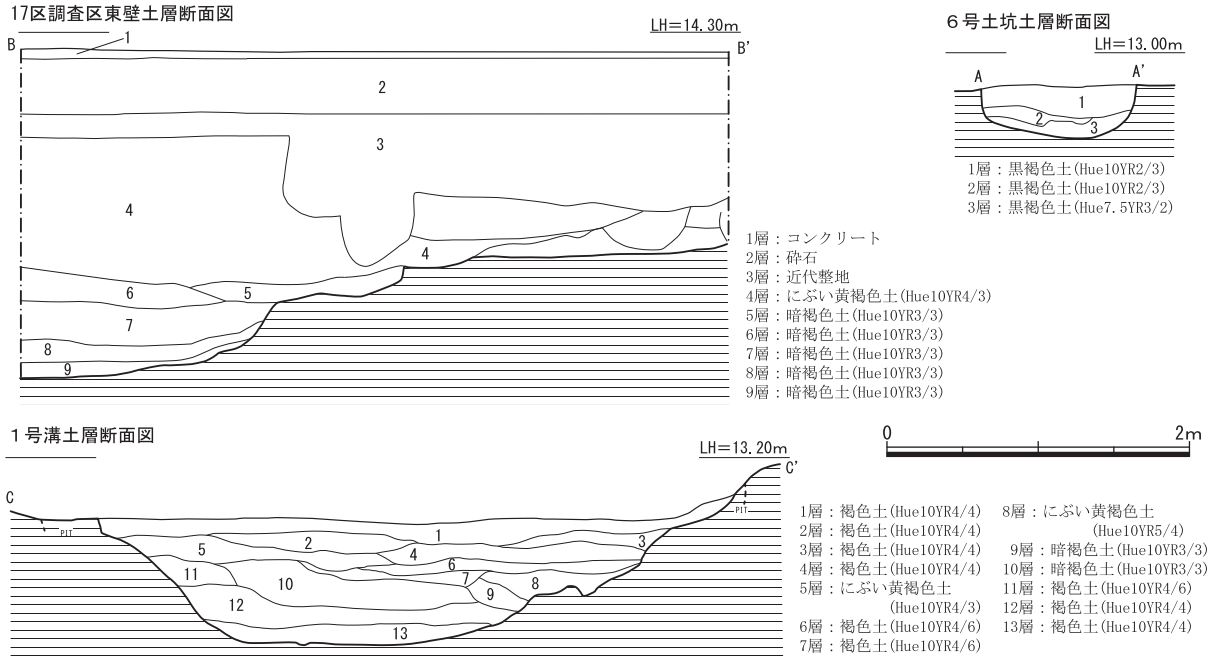

図35　1321調査地点17区調査区東壁・各遺構土層断面図（S=1/50）

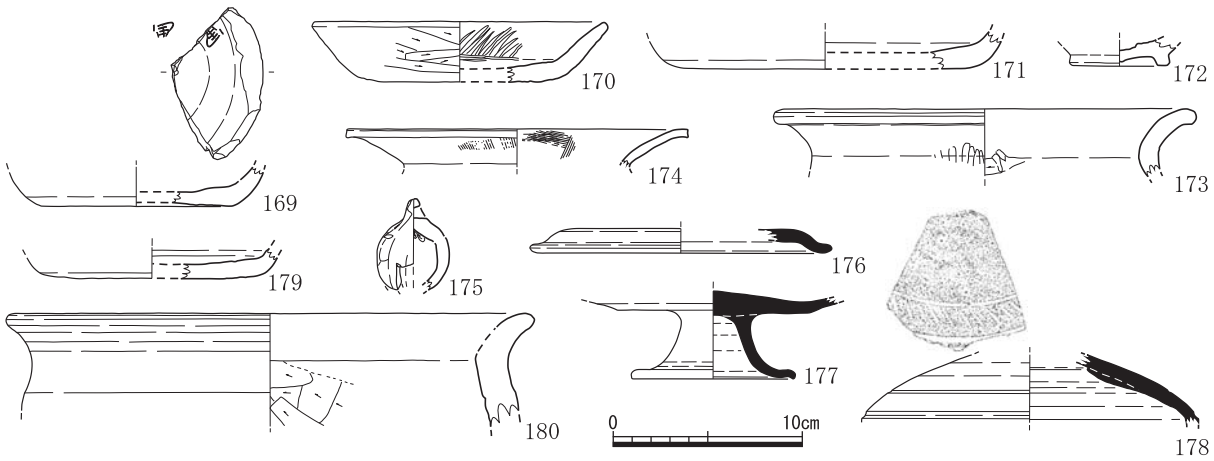

図36　1321調査地点17・18区出土遺物実測図（S=1/4）

６号土坑（図34・35）

６号土坑は、17区の南隅、１号溝の右岸の中位に位置する。南側の一部が調査区外にのびる。現状の規模は、長さ約1.2m、幅約0.65m、深さ0.35mである。墓坑の可能性も考えられるが、出土遺物は無い。

掘立柱建物？（図34）

18区の５号ピット、20区の３号ピット、同２号ピットは、１間を一つの単位とする間隔をもって南北に並ぶ。主軸は北から17度ほど西に傾く。５号ビットの北側、18区の未掘削部にもう一つピットがあると想定すると、４間の柱穴列となる。現場で確認できなかったためこれ以上の検証材料はないが、可能性として触れておく。なお、17区７号ピットからは磁器が出土しており、時期は近代以降のものである。

＜出土遺物＞（図36・55・56）

図36：169～178は１号溝から出土した。169～170は土師器の坏である。169には「軍」の文字のような刻書がある。171は底径が大きく、鉢の底部と考えられる。172は土師器の小型の碗である。丸味をもって立ち上がるようで、９世紀末葉～10世紀代と考えられる。173は土師器甕で、やや薄くなった口縁が外反しており、８世紀末～９世紀初頭のころのものと考えられる。174は古式土師器の甕の口縁である。内外の器面にハケ目が残る。175は土鈴である。胡桃のような体部に垂下用の突起が付く。176は須恵器の蓋で、端部は折り返しが消失している。177は須恵器の高坏の脚部である。かろうじて残る坏部は大きく横に広がる。７世紀後葉～８世紀初頭のころのものか。178は須恵器の長頸壷の肩部である。肩部端には斜線文が施され、肩はまだまるい。７世紀代前葉～中葉のものと考えられる。179～180は撹乱から出土した土師器の坏と甕である。

17区・18区の出土遺物は８世紀を主体に７世紀代のものや、９世紀以降のものがみられる。近・現代の遺物はほとんどないが、熊本医科大学医院（大正13年９月：熊本医科大学附属委医院に改称）時代のものと考えられる「医大」の文字を文様化した陶磁器が数点出土している。

このほか、布目瓦が３点（図55：274～276）と刀子と考えられる鉄製品１点（図56：283）が１号溝から、出土している。

⑬19区

19区は、本事業の発掘調査範囲の南東に位置する。立体駐車場西側で、浸透井戸の設置地で、７区からの配管と、14区からの配管が合流する。５×4.3mの範囲および、西側に隣接する16区との接続部を掘削した。後に、工事の都合により、北側に１m拡張した。

＜検出遺構＞

19区では、竪穴建物１軒、溝２条、そのほかピットを検出した。

23号竪穴建物（図37）

23号竪穴建物は19区の東側に位置する。竪穴建物の南西角および南壁と西壁の一部が確認でき、東側半分以上が調査区外にのびる。現状の規模では南北約1.8m、東西約1.7m、深さは約0.1mである。主軸は北から約15度東に傾く。図37の土層断面図Ａ－Ａ’のように、床面近くまで削平されていたが、硬化面は検出することができた。遺物は土師器の坏の口縁編片が１点出土している。

１号溝（図37）

１号溝は、19区の北西隅と、16区との接続部で検出された。北西隅の１号溝の現状の規模は、長さ約1.4m、幅約0.9m、深さは0.5mである。16区との接続部で検出した溝の現状の規模は、長さ約1.2m、幅約0.7m、深さは0.4mである。北西隅の溝の東側は地山が撹乱で削平されており、また小さなピットに切られるなどして、溝の南半の上端は不明である。遺物は土師器、須恵器、陶器の細片が出土している。

５号溝（図37）

５号溝は、19区の北東隅に位置する。大半は調査区外にのびる。北側の拡張範囲では、削平のため、続きは確認できなかった。現状の規模は、長さ約0.7m、幅約0.2m、深さ約0.15mである。主軸は東

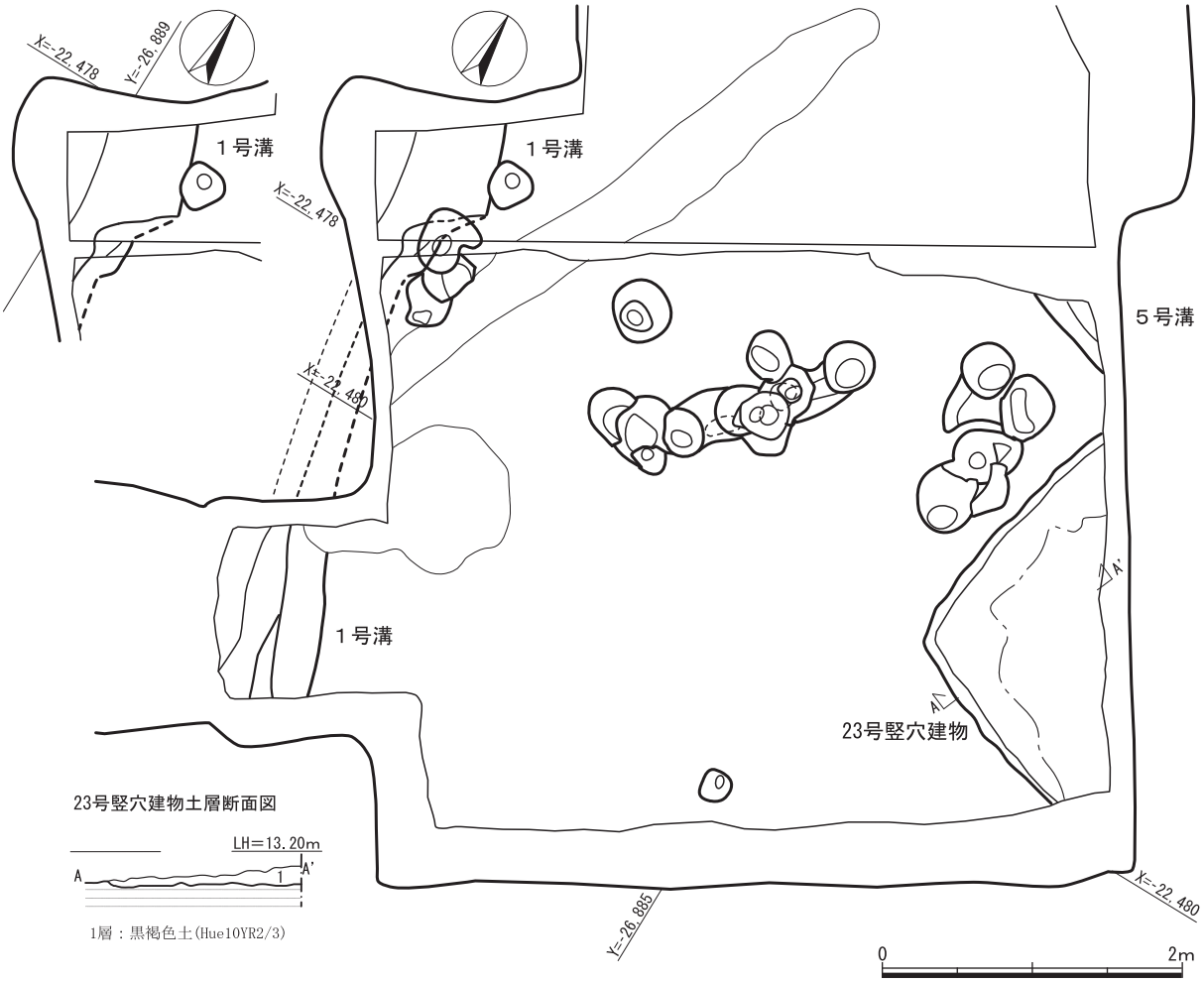

図37　1321調査地点19区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

図38　1321調査地点19区出土遺物実測図（S=1/4）

西を向いている。一部であるので、調査区外でさらに深くなるのか不明である。竪穴建物である可能性もある。

＜出土遺物＞（図38）

図38：181～182は１号溝から出土した。181は土師器の坏で、182は陶器の碗である。薄い褐色の釉薬が、削り出しの高台の外側までかけられている。釉薬の層は0.1㎜にも満たないほど薄い。近代以降と考えられる。183は遺物包含層から出土した土師器の坏である。外面が均一の黒いが、艶はなく黒色土器ではないと判断した。184は撹乱から出土した土師器の高坏の脚部である。このほか、遺物包含層からは土師器の丹塗の高坏の脚部、甕の破片、須恵器の甕の破片などが出土している。

⑭20区

20区は、本事業の発掘調査範囲の東側に位置する。浸透井戸の設置地の17区と19区の間の配管部であり、また18区の設置した電気大型ハンドホールからの配線部を兼ねる。また、電気の大型ハンドホール設置予定地であり、配管・配線部は7.5×２m、ハンドホール設置部は4×4.5mの範囲である。

南側のハンドホイール設置地は、近代の建物に特徴的な川原石と砂による基礎が検出された。これらによる削平の影響で、遺構はほとんど検出されなかった。

＜検出遺構＞

20区では、竪穴建物１軒、溝２条、そのほかピットを検出した。

８号竪穴建物（図39・40）

８号竪穴建物は、20区の配管部の南端に位置する。竪穴建物は、狭い配管部に位置し、北西角と南東角を結ぶ対角線より南西半分が調査区外にのびる。西側の上部は１号溝に切られていた。現状の規模は、2.8×2.3m、深さ約0.15mである。主軸は北を向く。北壁中央に竈が造り付けられている。袖石や支柱はなかったが、それぞれ掘方は確認できた。また、竪穴建物の中央付近では、硬化面が検出された。４本柱のうち、東側で２本分の柱穴を確認した。深さは0.13m程度である。土師器や須恵器が出土している。

１号溝（図39）

１号溝は、20区の配管部を南北に縦断している。17区・18区で検出した１号溝の続きである。右岸は調査区外で、左岸が８号竪穴建物付近までのびる。上述したように、８号竪穴建物を切る。現状の規模は、長さ約9.6m、幅は最大で２m、深さ約1.15mである。遺物は土師器や須恵器が主体をなすが、近世以降と考えられる陶磁器の破片も数点出土している。このほか、鉄製品（刀子）が１点（図58：276）出土している。

５号溝（図40）

５号溝は、20区の配管部の中央付近を横断する。北・南側が調査区外にのびる。現状の規模は、長さ約2.6m、幅約1.45m、深さ約0.8mである。図40の土層断面図Ａ－Ａ’の１層は近代である。土層断面図の南側の２・５層が立ち上がることがわかる。また、土層中央部の２’・３’と周辺の２・３層には、後述する獣骨の一部が含まれており、２層以下が本溝の埋土である。土層を確認した東壁では、右岸の上端に掘り込みがあり、右岸側の本来の堆積や立ち上がりを見極めることができなかった。土層断面図作成した東壁の前面で獣骨が出土した。馬の下顎骨と考えられる。下顎骨周囲で炭粒の出土を確認した。３・４・６層は、獣の遺体部分に相当する。３層は骨と土壌の混土層で、見た目は白く、ふかふかとして締まりがない。炭粒が入る。３′層は３層より骨の塊を多く含む。４層は３層より土の割合が増え、６層はより土の割合が増えている。目視では５層と６層は区別がつきにくく、６層の方が軟らかいことで区別できる。７～10・13層の上面が揃っており、溝が埋没したのちに再度掘削し、２層～５層が堆積、右岸の地山が0.2m低いのは、溝の再掘削によると考えられる。獣の遺体は、溝が再度掘削されて、間もなく置かれたと考えられる。溝と水に関する祭祀の犠牲獣の可能性がある。溝の底は、鉱物の沈着が顕著で、一定期間の流水があったと考えられる。８号竪穴建物と前後関係は、５号溝が切っている。土師器や須恵器が出土した。

＜出土遺物＞（図41・56・57）

図41：185～192は、８号竪穴建物から出土した。185～186は土師器の坏、187は碗である。186は垂直気味に立ち上がり、186は開き気味に立ち上がる。187は低く小さい高台が、底部の端に付く。188

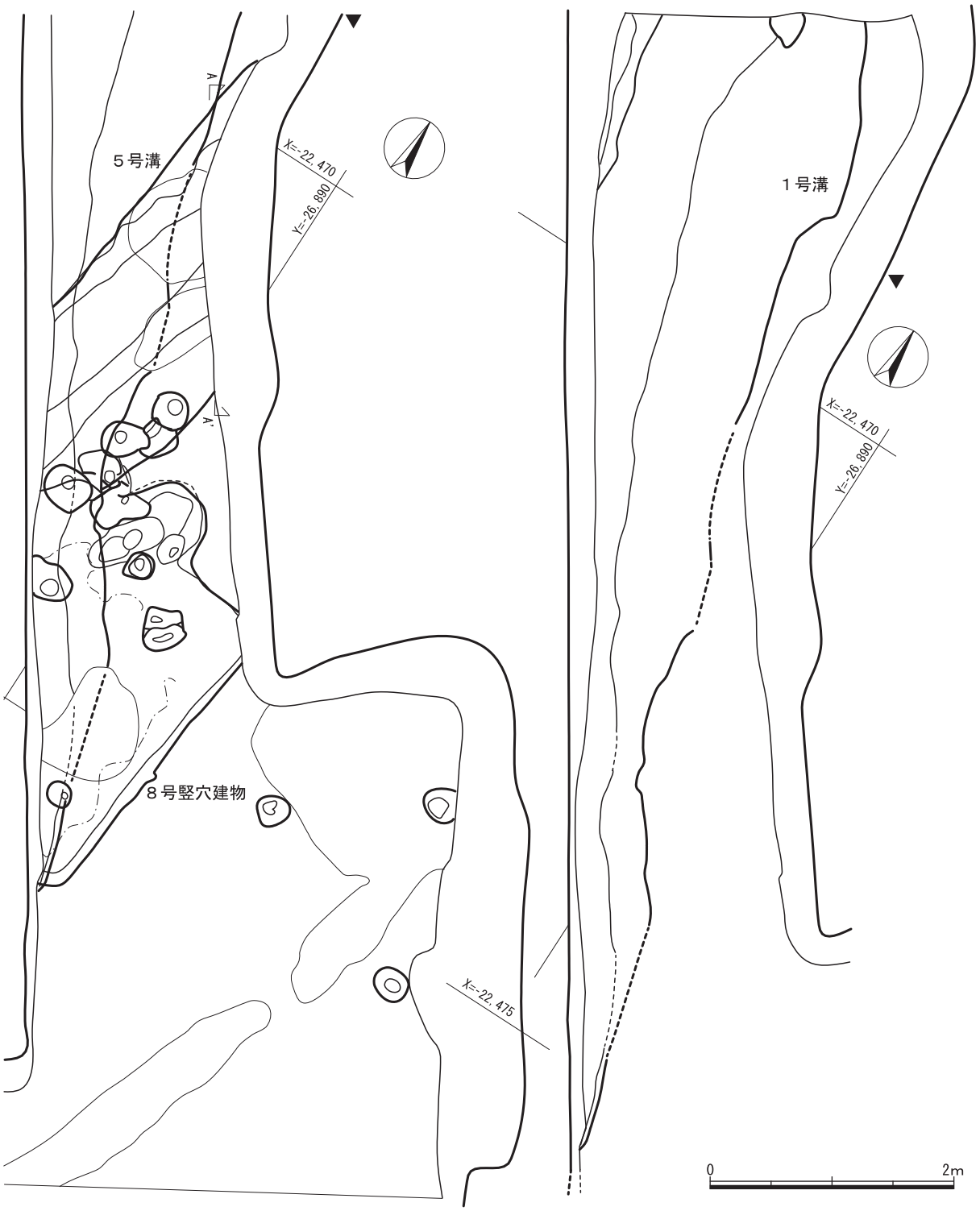

図39　1321調査地点20区遺構配置図・１号溝実測図（S=1/50）

は土師器の鉢、189は土師器の鍋である。190～191は須恵器の坏、192は碗である。190と192は器高が高く開く。191は、底部は丸味を帯び、低く小さな高台が付く。このほかにも、土師器や須恵器の坏や碗、甑の把手等が出土している。193～194は１号溝から出土した。土師器の碗と須恵器の碗である。１号溝からはこのほかにも、土師器や須恵器の細片が出土しており、近世以降と考えられる陶磁器の破片も数点含まれる。195～196は５号溝から出土した。195は土師器の甕、196は土師器の甑の把手である。195は肥厚した短い口縁は外反する。197～199は遺物包含層出土である。197は土師器の甕で、

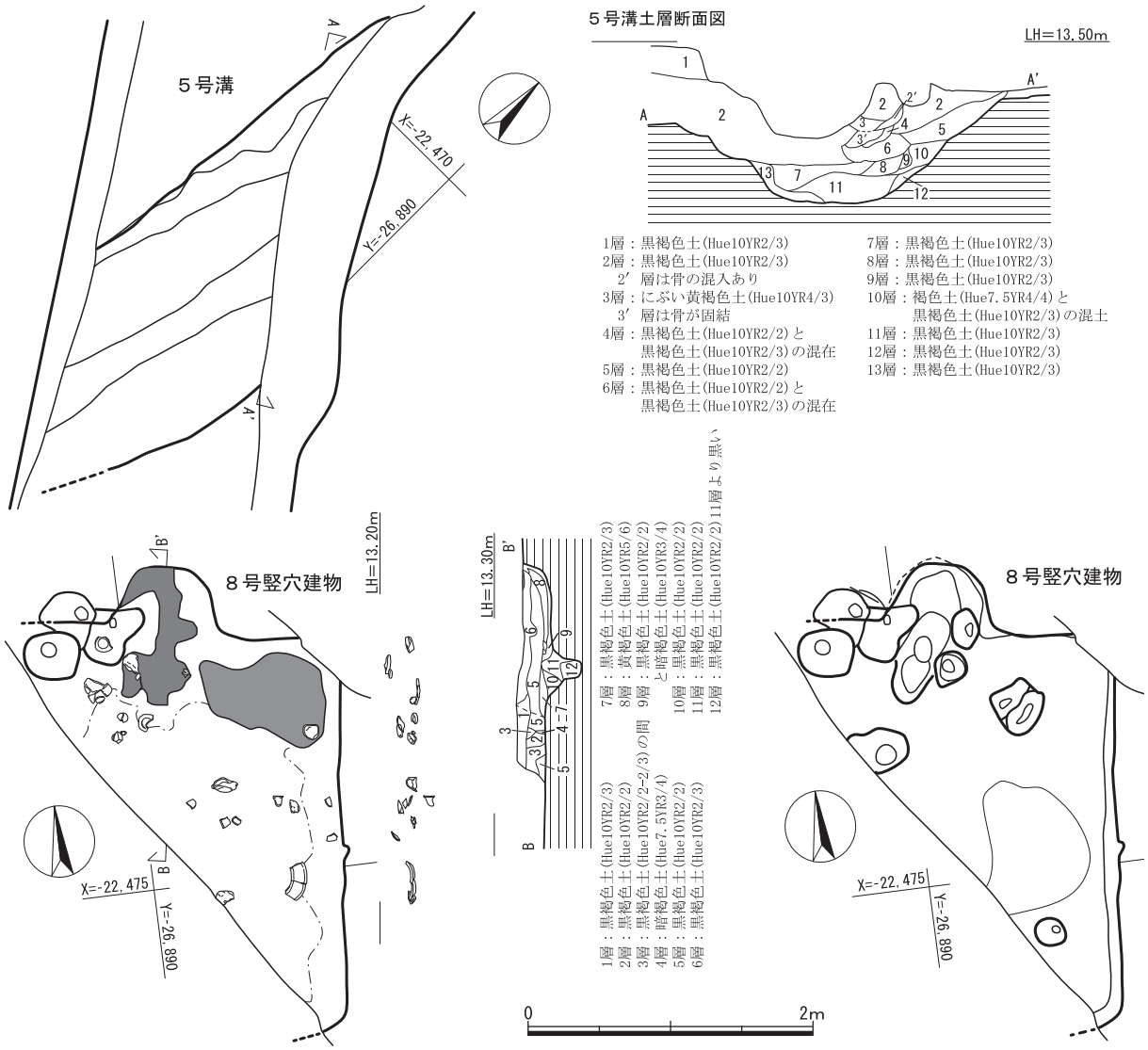

図40　1321調査地点20区５号溝・土層断面図・８号竪穴建物実測図（S=1/50）

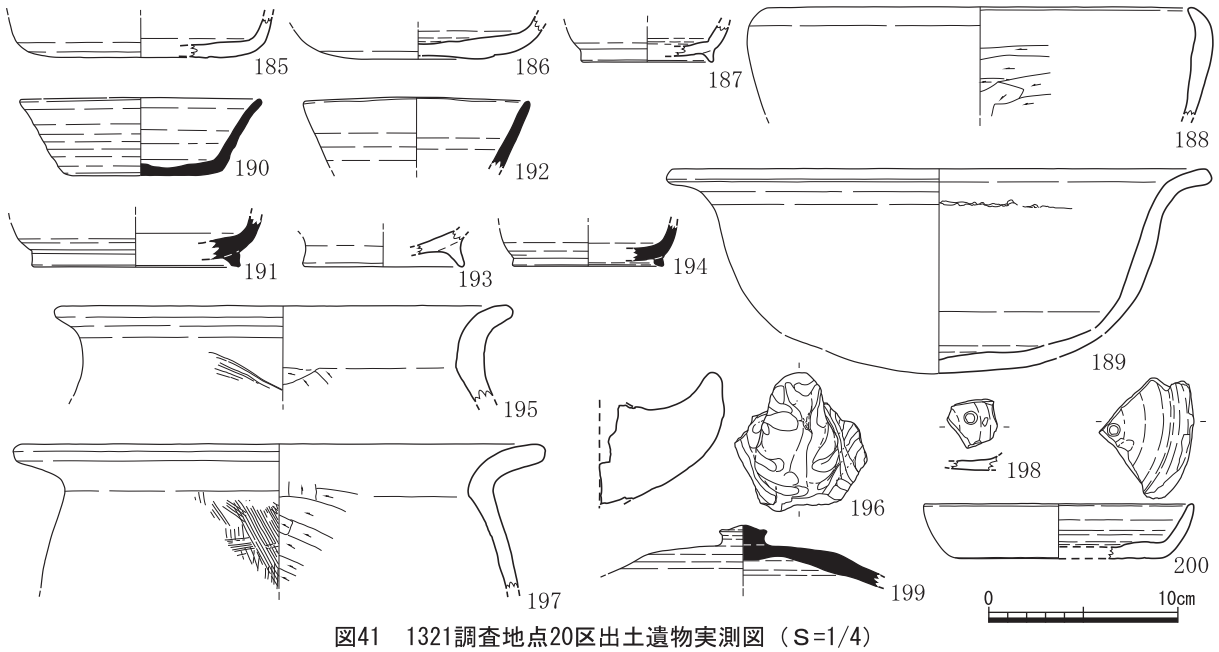

図41　1321調査地点20区出土遺物実測図（S=1/4）

やや薄手になった口縁が外反するタイプである。198は土師器の坏であるが、直径６ｍｍ程の竹管状のものを突いたような跡がある。199は須恵器の蓋である。200は撹乱から出土した土師器の坏で、198と同じ竹管状のものを突いたような跡がある。全体的には８世紀代を中心とした遺物である。このほかにも、遺物包含層からは土師器や須恵器の坏や碗、粗い削りを残した土師器の高坏、土製品（土錘）（図57：292）などが出土している。１号溝と８号溝から刀子と考えられる鉄製品（図56：284・285）が各１点出土している。

⑮30・43区

30区と43区は、水路（暗渠）の右岸に位置する。門型カルバートの工事範囲の一つで、１区の北側に隣接する。１区では既に遺構面を削平し、門型カルバート工事が進められていたが、30区での発掘調査の安全確保のため、間には空閑範囲を設けていた。30区で発掘調査を進めていくと、かなり深い位置から石垣が発見され、空閑範囲にのびることが確認された。このため、工事業者には空閑範囲においても、石垣の有無を確認させていただいた。それが拡張部である。30区の北端には、東側を並行して流れる水路（暗渠）にかかる橋があり、それを支える基礎部分が43区で、30区の発掘調査の終了後、この基礎を撤去して発掘調査を実施した。30区・43区を合わせて全体で南北約17m、幅約3.4～4.7mである。

＜基本土層＞

30区は、周囲がすべて撹乱のため、土層の観察に適切な箇所がなかった。このため、大半が近・現代の工事による撹乱と遺構埋土と重なるが、本調査区の西北側を西壁として、北部と南部で土層断面図を作成した。北部は図43の土層断面図Ａ－Ａ’である。１層は古代の遺物包含層である。綺麗な黒色土であるが、砂とオレンジ色の粒子が少し混入する。上位の砂質の撹乱土の影響であろう。境界も曖昧である。２層はやや赤味のある粘性のある土である。３層は、２層より赤味があり、溝の底に沈殿する褐色の鉱物が縞状に混入する。とても硬い砂質土である。４層は３層を基本的に同じで、色が少し黒い。５層は３・４層とほぼ同じで、黄色の地山土の混入が多く目立つ。６層は、黒色の綺麗な土で、粘性もなく混入物もない。古代の遺物包含層に類似する。７層は、目視では青灰色の粘土に褐色の鉱物の縞が入る土層である。上部はやや砂質で３層との漸移層になっている。３層以下が５号溝の埋土である。

南部の土層については、井手遺構のところで述べる。

＜検出遺構＞

本調査区では、３状の溝と近世石垣、そのほか土坑・ピットを検出した。

1号溝（図43）

30区の中央部に位置し、北東から南西に横断する。地形から南西に向かって流れていたと考えられる。北は調査区外にのびる。南側は１区に続いていき、やがて調査区外にのびたと考えられる。左岸は検出されなかった。このことについて、南に隣接する１区で検出した３号溝との関係を検討してみる。３号溝は１号溝とおおよそ直角に交わる位置関係なる。この二つの溝が、別の時期の所属する遺構とする。もし、１号溝が３号溝を切っている場合には、１区で検出した３号溝の右岸は消失していることになるが、現在確認できるので、切り合いは逆となる。しかし、３号溝が１号溝を切る場合、

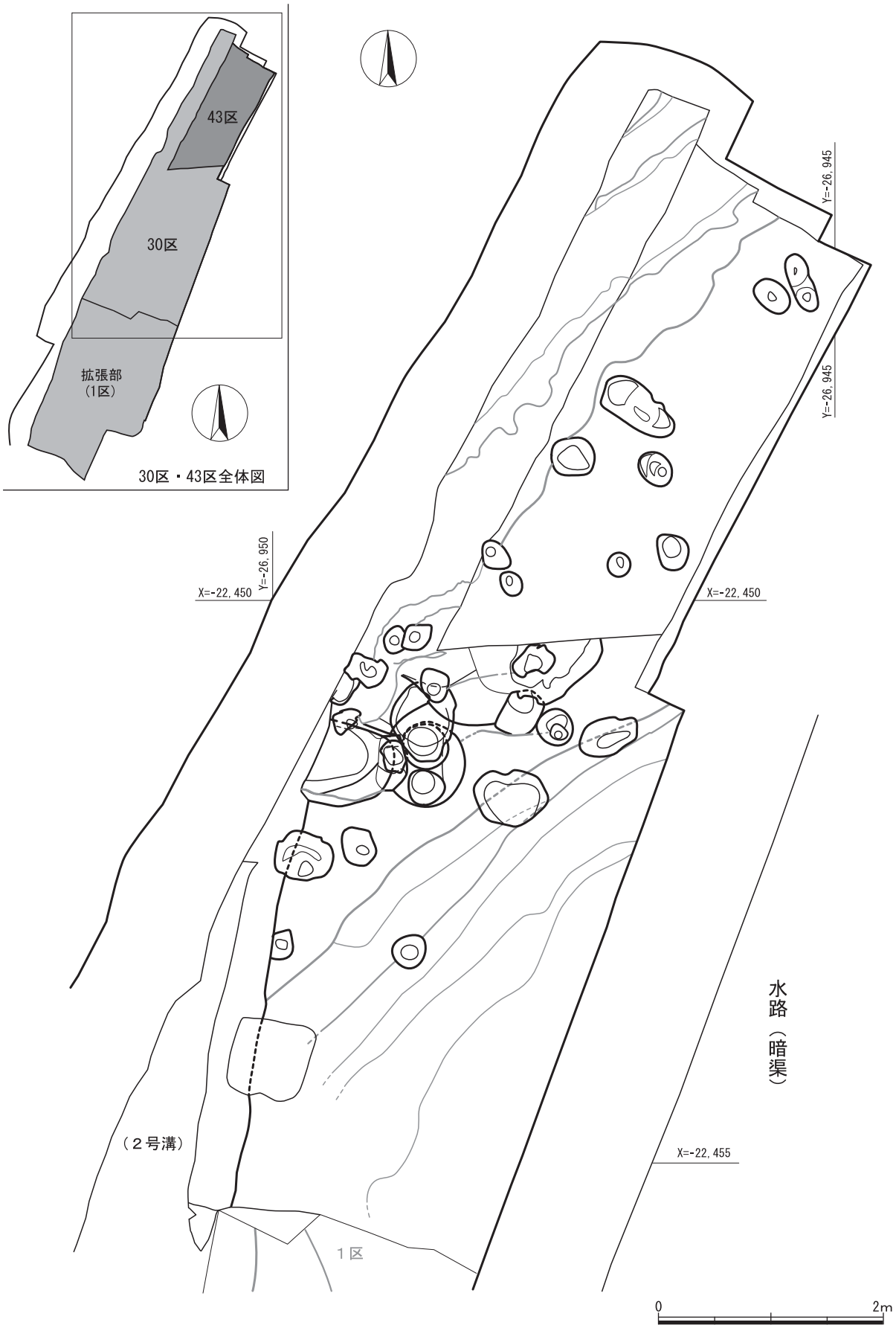

図42　1321調査地点30・43区遺構実測図（S=1/50）

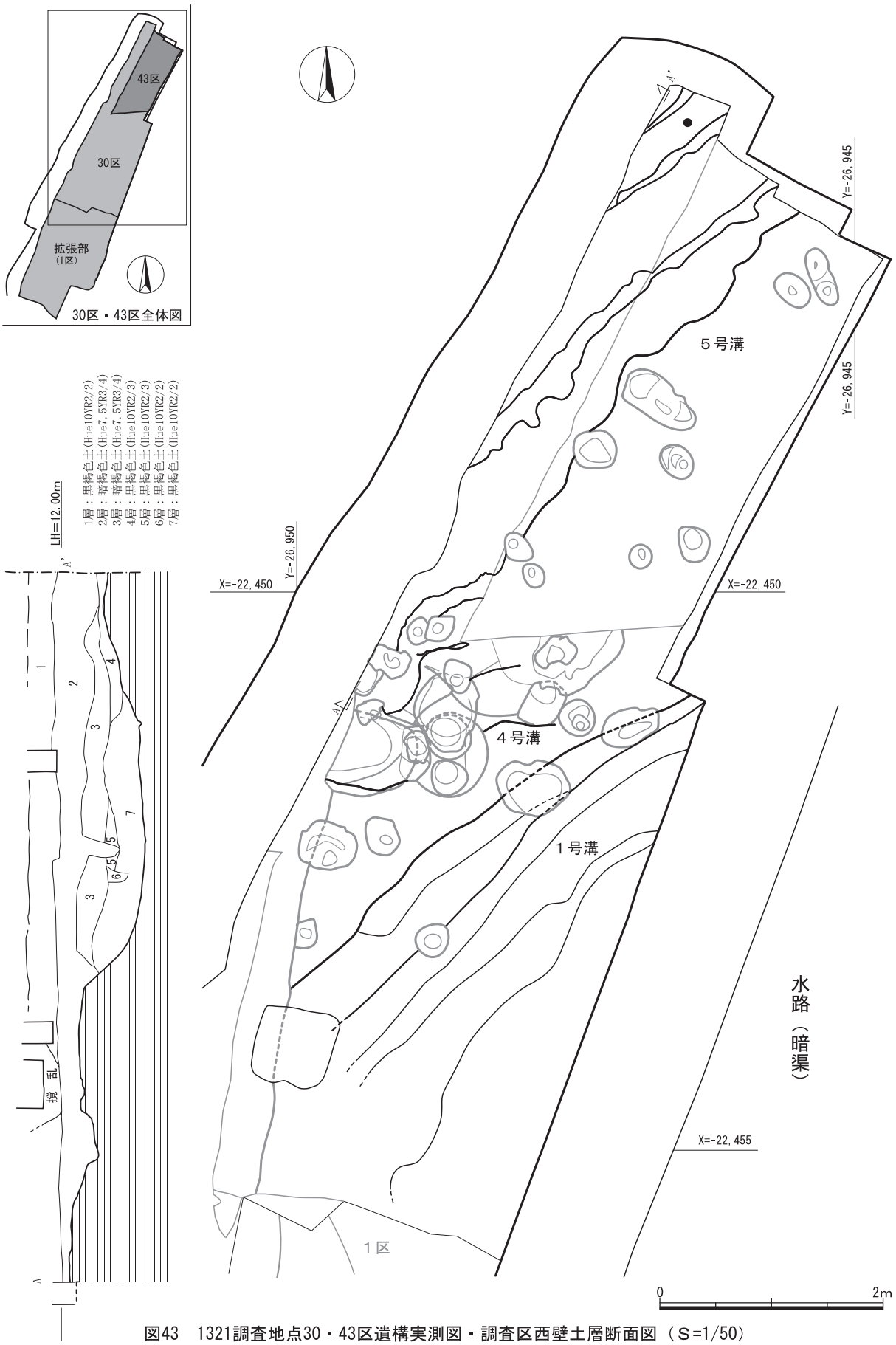

図43　1321調査地点30・43区遺構実測図・調査区西壁土層断面図（S=1/50）

３号溝の幅を考慮すると、１号溝の右岸やその上にあるピット群、それが掘り込まれている地山は消失していなければならない。切り合うと仮定すると、いずれの場合にも齟齬が生じるため、この二つの溝は同時代のものである可能性が高い。遺物は土師器片と須恵器片が30点程度出土している。９世紀代と考えられる。ほか、龍泉窯の青磁碗の細片が含まれていた。12世紀中葉～13世紀のものである。

４号溝（図43）

30区の中央、１号溝の右岸に位置し、１号溝とほぼ並行に走る。東北東から西南西に流れていたと考えられる。両端は撹乱により不明であるが、いずれにしても調査区外にのびる。北に向かって段々と落ちていくため、溝とした。現状の規模は、長さ約２ｍ、幅約1.3m、深さ約0.5mである。多数のピットに切られ、実態は不明な点が多い。出土遺物は、土師器や須恵器の細片である。

５号溝（図43）

30区・43区の北側に位置し、北東から南東に流れる溝である。先行して30区で検出した際には、４号溝の下部が検出されたものと考えていた。42区でコンクリートが撤去され、続きが検出された際に、４号溝とは別に５号溝とした。現状の規模は、長さ約5.7m、幅約1.6、深さ約0.6mである。コンクリートによる削平が著しく、本来の掘り込みは上位にあったと考えられる。右岸は調査区外である。30区の二つの段の間、●印の部分がちょうど溝の最も深い底になる。左岸の上端は、底までにある２段の中端と並行であるが、43区の２号ピットの付近から少し東側に開く。これは、調査区の西壁にある配管（ヒューム管）を施工した際の影響とみられる。４号溝とは主軸が異なるため二つの溝は別の溝と考えるが、互いの切り合い等の関係は不明である。遺物は、埋土の上部0.3m程度の範囲で、土師器片や須恵器片が出土している。

井手遺構（２号溝）（図44・45）

30区の西壁に沿って、中央付近から、南の拡張部にかけて位置する。調査区西壁沿いにはヒューム管が平行して埋設してあったが、その下に溝状の遺構があることを確認した。そこで、２号溝として北端部から掘削を進めると、円礫が多数出土した。北端から１ｍ付近より南側では、幅約0.3mで円礫は地山に張りついた状態で続いており、壁沿いでは約0.6m低い地点から検出された。残りの良いところでは約１ｍ積み上げられていた。円礫を取り除くと、調査区西壁下沿いで成形された石が列状に出土した。石がいわゆる間知石の形態であったため石列は石垣で、円礫は裏込めと判断した。石垣が１区へと続くことを確認し、掘削範囲を１区の未着工部まで拡張して調査を実施した。石垣の南端は、既に施工されたカルバートの壁体付近まで確認できた。のちに、石垣の範囲は１区の調査時では撹乱と判断されていたことがわかった。工事業者に聞き取りをしたところ、カルバート施工時に石塊には気付かなかったという。カルバートの下に、石垣が残されている可能性はある。

確認できた石垣は、全長約7.6m、間知石20個である。調査区の東側を流れる水路（暗渠）は、加藤清正が開削したと言われる水路の一つ「三の井手」として知られている。本石垣は、現在の三の井手（以下「現三の井手」）と若干方向が異なるものの位置が近く、石材の形態が古いことから、現三の井手の前身の三の井手（以下「旧三の井手」）の石垣であると判断した。石垣の面の方向から、本石垣は旧三の井手の左岸となり、それより西側が井手の水路内、右岸は調査区外となる。

石垣の下部に、ピンポールを刺し込んでみたが、石が存在するような手ごたえはなかった。さらに、現在の三の井手の底のレベルと比較したところ、ほぼ差はなかったため、これが石垣の最下段と考え

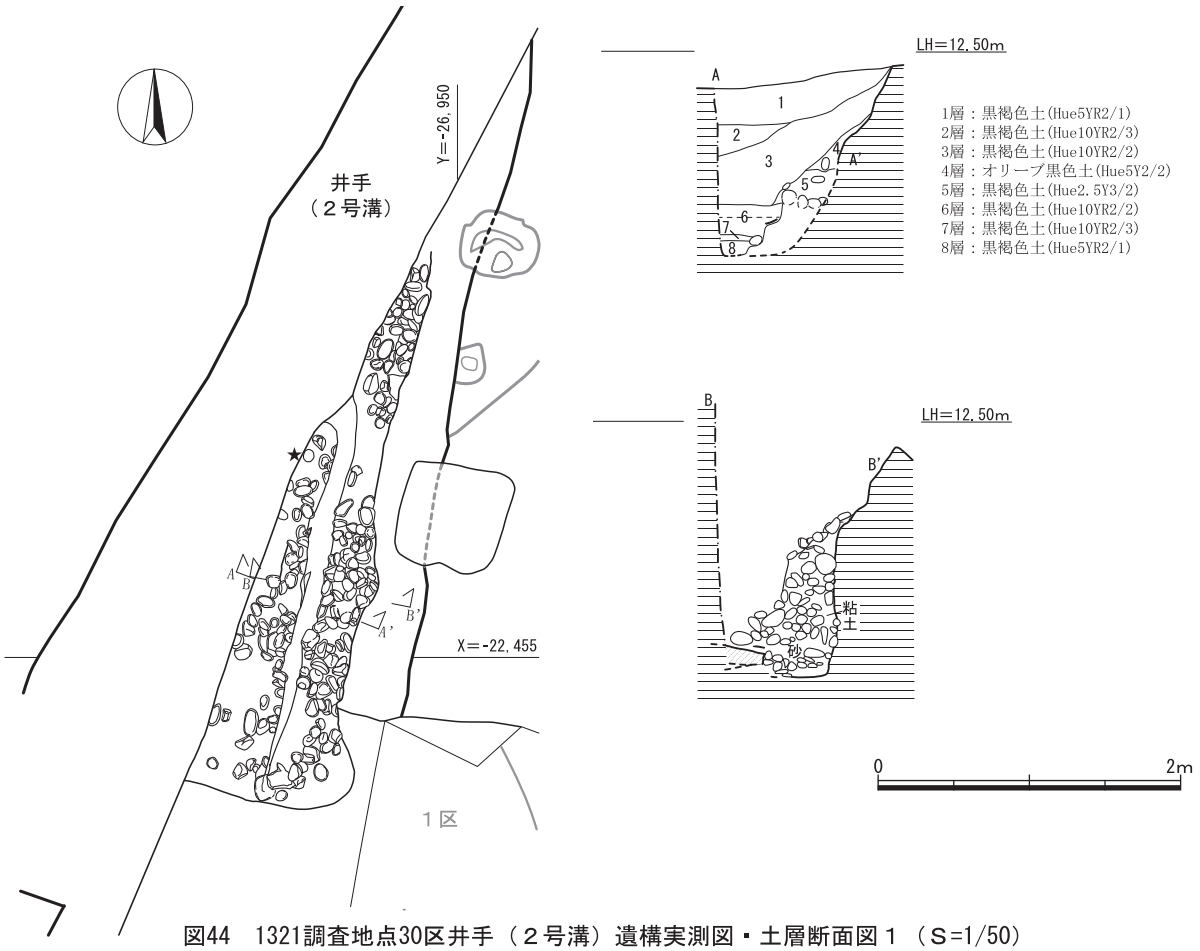

図44　1321調査地点30区井手（２号溝）遺構実測図・土層断面図１（S=1/50）

られる。また、水辺の石垣築造には「土台木」あるいは「算盤木」を下敷きにすると言われるが、今回ピンポールの差し込みでは確認されなかった。

裏込めの円礫群うち、東側の幅約0.3mは上部に破壊を受けているものの、以下は地山にしっかりとはまっており、築造時の状態を残していると考えられる。地山の掘方も、石垣の面と平行しており、大きな破壊は受けていないと考えられる。反対に、調査区壁沿いは、一直線に破壊されている。間知石が、周囲に散乱している様子はなかったため、雑に破壊したのではなく、丁寧にはずされ運び出された可能性がある。裏込めの円礫群の残存状況、石垣および地山の掘方の関係から、石垣の面から背後約1.3mが裏込めの範囲である。

石垣は、施工業者と協議をおこない現地保存することとした。今後の崩壊を極力避けるため、水路内の掘削は、南側1.5mの範囲とし、土層および石垣の面の確認をおこなった。図44の土層断面図Ａ－Ａ’は、１・２層が後述する調査区西壁８層に対応する。３層は、粒子が細かい砂で、堅緻に堆積している。４層は、３層より僅かに粒子が大きく、乾燥すれば表面がぽろぽろと崩れる軟らかい層である。４層はまだ下部に続くと考えられるが、掘削はここまでとした。残された水路の深さは、0.3～0.4mである。石垣に使用された間知石の面（正面）は、厚さは0.27m前後、幅は0.34～0.47mで、形は不整形の横長の長方形である。

土層を確認する。調査区西壁の図45の土層断面図Ａ－Ａ’は、１～６層までは、３・５層の土（１～５㎝大の炭を多量に含む）と２・４・６層の砂礫の互層となっており、工事と整地の繰り返しによるものと考えられる。７層は砂質土、８層は砂が主体の層でガラスの破片が含まれていた。２号溝として土層断面図を採図した■印付近の調査区西壁北部の土層柱（図45）では、１層が工事等による現

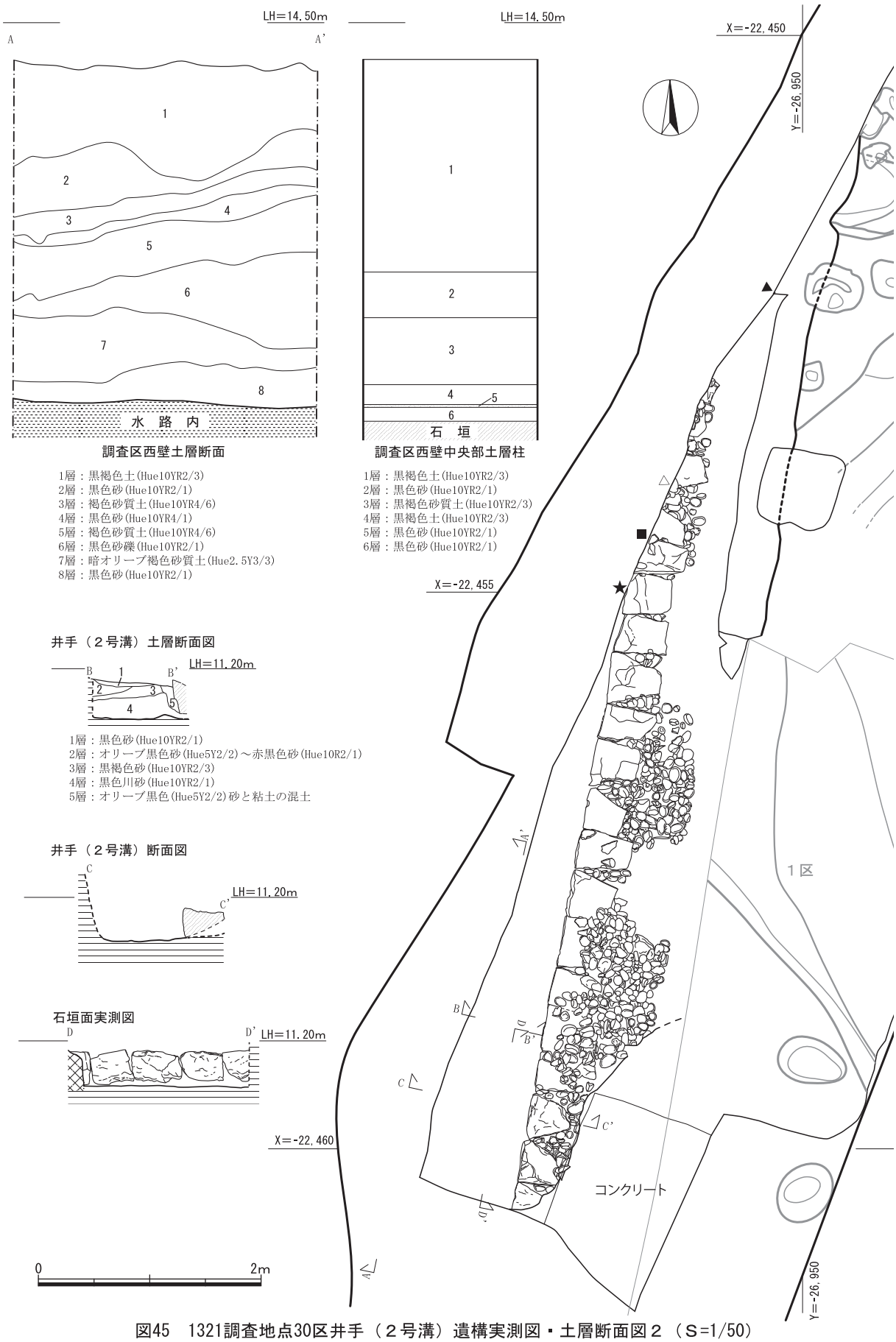

図45　1321調査地点30区井手（２号溝）遺構実測図・土層断面図２（S=1/50）

代埋土、２層が調査区西壁の２・４層に該当する。１～５㎝大の小石が多量に入り、粗い砂の層である。３層は多量の炭が入る調査区西壁の３・５層に該当する。下部の１/３程度がやや砂質である。４層は調査区西壁土層断面図と北部の土層柱の採図箇所の間で、調査区西壁の土層断面図の７層と８層の間に形成される。明るいオレンジ色の砂質土層で、15㎝前後の厚みがあるが、北へ行くほど薄くなり消滅する。調査区西壁の７層は、撹乱により続きが不明である。土層柱の３層下部の砂質部分は、７層の混土である可能性がある。６層が調査区西壁の８層に該当する。５層は４層と６層の間に部分的に認められる、若干粒子が粗い砂の層である。調査区西壁北部の土層柱と２号溝として採図した土層を比較すると、図45の土層断面図Ａ－Ａ’の１層は土層柱の２層に対応し、２層・３層が土層柱の３層に対応する。２層は、土層柱を採図した付近の調査区西壁の２層と３層に間に部分的にみられる土層に対応する。図45の土層断面図Ａ－Ａ’の４・５層は粘性のある土で、円礫を地山に固定するためのものと考えられる。図45の土層断面図Ａ－Ａ’の６層上部は調査区西壁北部の土層柱３層下部、６層下部は４層、７層の砂層は５層、８層が６層に相当する。

土層と石垣の関係は、次のようになる。調査区西壁は、土層柱の１層以下が図45の▼－▽（▽が下端）の箇所で大きく斜めに掘り込まれており、南側には先述した２～６層（調査区西壁の１～８層）が堆積している。▼－▽より北側では２層に接する高さ約１ｍまで裏込めの円礫が積まれた状態であり、より北側の調査区外では、裏込めや石垣がある程度残されている可能性がある。２～６層は、少なくとも★から▼－▽の間で石垣の上に乗っており、各層はいずれも石垣が解体された後に堆積したものである。調査区西壁の８層は、標準土色帖では黒色（Hue10YR2/1）であるが見た目は青灰色の砂に橙色の砂質土が筋状、あるいは斑状に入る砂層である。この特徴を有する砂層は、本学の黒髪南地区で、2014年に縄文時代後期後葉の人骨を発見した1310調査地点Ⅴ11区においても確認している。ちょうどⅤ11区を調査していたころ、降雨により黒髪南地区の眼前を流れる白川の流水が、河川敷上まで増水した。この時河川敷に堆積した砂層が、全く同じ特徴を有していたことから、この砂層は白川の洪水に由来するものであると確認した経緯がある。調査区西壁の８層も、その特徴から白川から井手に運ばれた砂と考えられる。井手の石垣が解体された経緯は、後述するが、先述したように石垣は丁寧に解体されたとみられるため、残された石垣の上に堆積物が乗っているのは、石垣を解体・埋め戻し後に堆積物が押されたものと考えられる。

その他の遺構（図42）

30・43区では、溝のほかにピットや土坑が検出された。ピットはいずれも、大きさや深さは多様で、掘立柱建物の柱穴になるようなものはなかった。土坑も不正形で、出土遺物も特筆するものはない。

＜出土遺物＞（図46）

図46：201は、１号溝から出土した。龍泉窯の青磁碗の破片である。胎土は灰白で厚い青緑色の釉がかかる。体部外面に鎬蓮

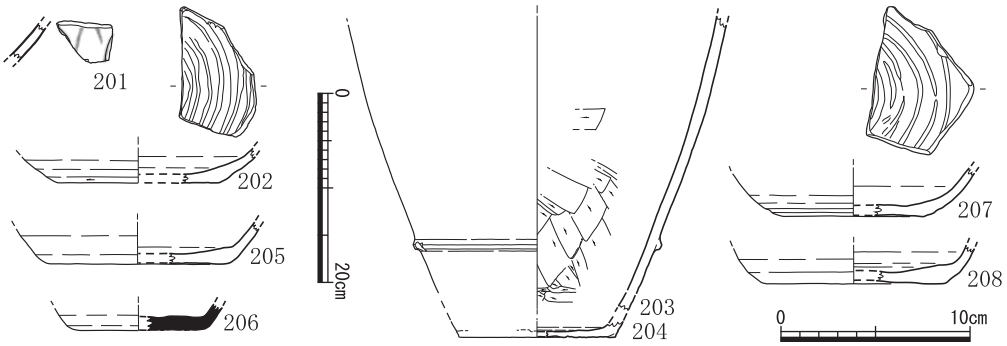

図46　1321調査地点30区出土遺物実測図（Ｓ=1/4・1/8）

弁文がある。12世紀中頃～13世紀前半か。202～204は、井手遺構の石垣と裏込めを壊し、再度埋めた土から出土した。202は土師器の坏である。203・204は下方にタガが一周する甕である。胎土は弥生時代の甕棺に類似するが、タガの形態と位置、広い平底に違和感がある。205は４号溝から出土した土師器の坏である。206は須恵器の坏である。43区の撤去前のコンクリートと調査区東壁との0.6mの範囲で、そのうちコンクリートの掘方を除くと0.3m程度の幅の範囲の掘削で出土した。完掘して初めて溝であることが判明したため、取り上げた際には地山上の遺物包含層（茶層）としている。精査の結果、５号溝の上部の埋土（図43の２～３層）から出土したものと判断される。他にも、土師器片や須恵器片が30点程出土している。207・208の土師器の坏は、撹乱から出土したものである。

このほか、近現代の埋土から緑色の文字で「大學」とかかれた磁器や、井手遺構内サンプリング土からは、ガラス片や瓦片が出土した。そのほかピットなどからは、８～９世紀代と考えられる土師器の細片が数点出土している。１号溝からは、馬の仙骨・中手（足？）骨などが出土している。

⑯32区

32区は、２区のところで記述したように、２区の北部に隣接する。門型カルバートの水路（暗渠）左岸の工事範囲としては北端部に位置する。水路（暗渠）を渡る橋の左岸のたもとに接する。南北3.5m、東西2.5m程度の範囲である。

＜検出遺構＞

32区は、狭い範囲ながら溝や土坑などの遺構が重複して検出された。32区の３号溝および４号溝は、それぞれ18号溝と10号溝として２区のところでも記述している。

12号竪穴建物（図47－③）

12号竪穴建物は、調査区の北東隅、７号溝の外側に位置する。大半を周囲の溝（３・６・７号溝）に削平されている。現状の規模は長さ約1.2m、幅約0.6m、深さ約0.3mで、竪穴建物の南東角の部分がわずかに残存状況している状況である。東壁下で、建物の南東角に相当すると考えられる屈曲が検出されたことから竪穴建物と判断したが、全容は不明である。

２号溝（図47－②）

２号溝は、調査区の西半部に位置し、北北東 - 南南西に走る。本調査区の調査開始時には、２区側は既に工事に着手し深く掘削されていたため、図９の土層断面図Ａ－Ａ’のように断面の状況を確認することができた。２号溝は、同図の９・10・11層である。北側は撹乱により破壊され、調査区外へ伸びる。西側も調査区外である南側の続きは、２区の調査時に18号溝（32区３号溝）と一体で掘削しており、２区では独立した溝としては捉えられていない。。現状の規模は長さ約1.9m、幅約1.34m、深さ約0.5mである。溝の底部には、流水により沈殿した鉱物の被膜がある。２区18号溝には東側に段差が一段あり、２号溝の東側（左岸）の肩である可能性も考えられる。

３号溝（図47－②）

３号溝は、調査区の中央に位置する。２区の18号溝に続く溝である。当初は、本調査区の西半弱が２号溝、東半強が３号溝と把握していた。２号溝を掘削したのち、３号溝と想定する範囲を掘削すると、0.1m程度堀下げたところで、調査区北東部で地山が検出され、３号溝の主軸は北東ではなく北

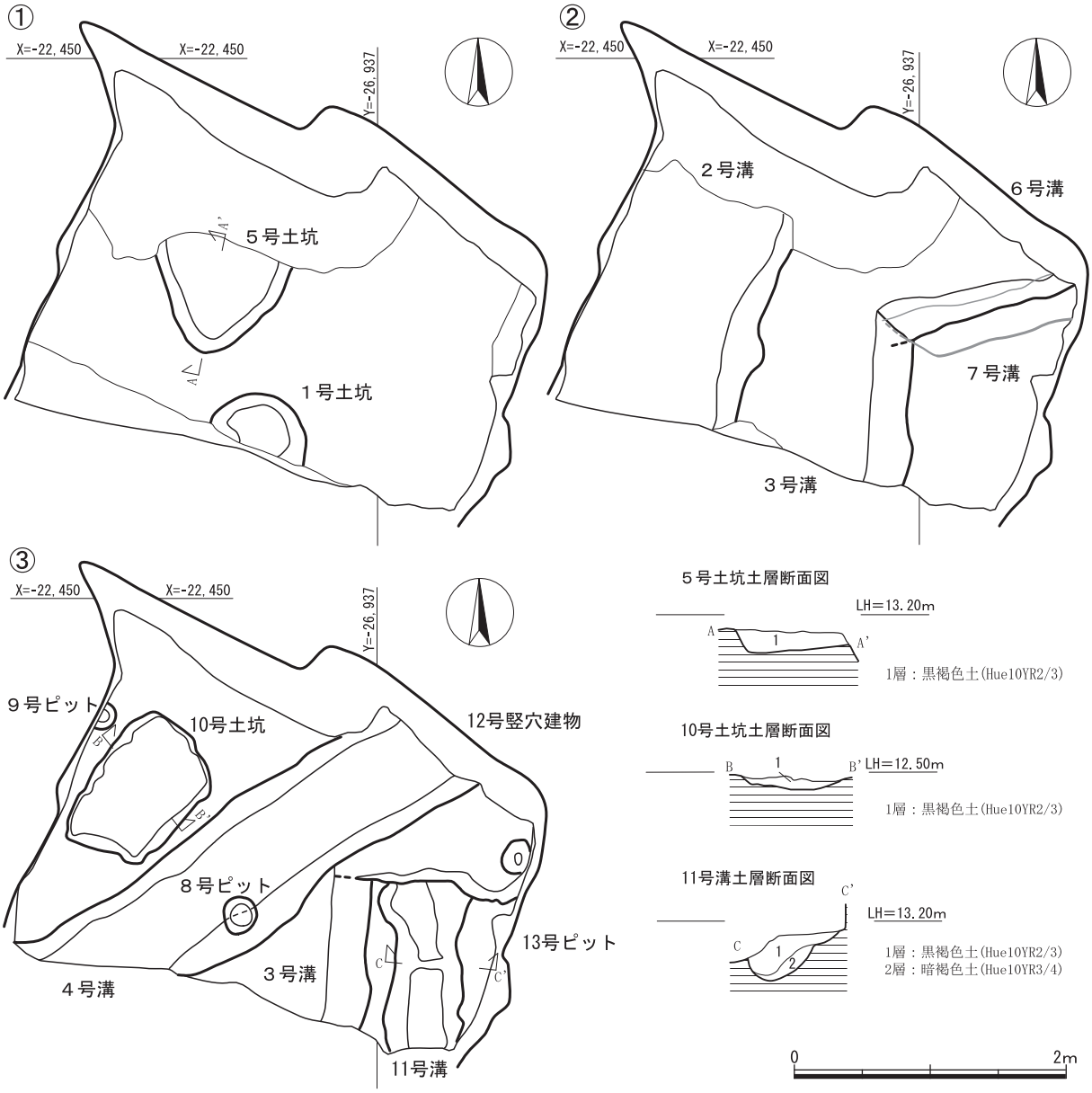

図47　1321調査地点32区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

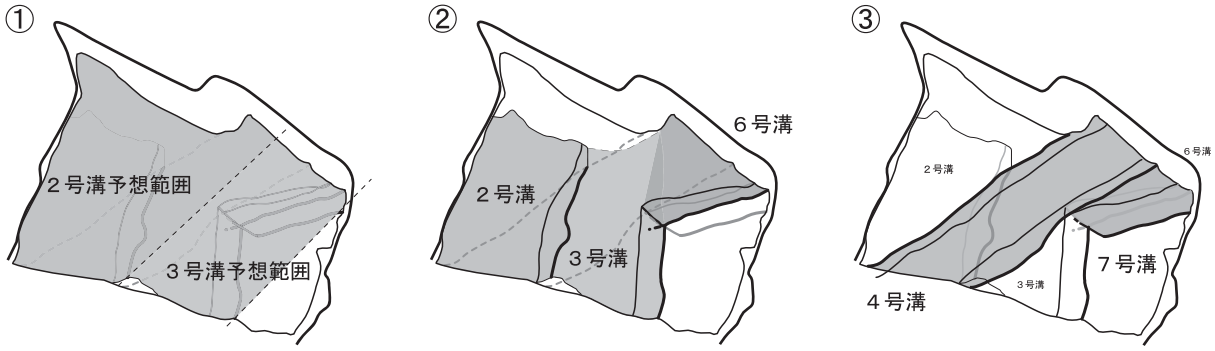

図48　1321調査地点32区各溝の掘削過程・範囲模式図

であること、また北側部分は別の遺構（６号溝）と切り合うことを確認した。

３号溝と６号溝は、先述のように３号溝が切ったものと判断して掘削した。３号溝の東南部では地山が検出された。溝の底はほぼ平坦で、緩やかに西に向かって傾斜している。図９の土層断面図Ａ

－A’の６～８層に相当する。２号溝に切られているため、西側（右岸）は不明である。北西部では、４号溝の掘方が検出された。現状の規模は長さ約1.26m、幅約1.1m、深さ約0.3mである。

４号溝（図47－③）

４号溝は、調査区の中央を北東－南西に縦断する溝で、２区の10号溝に続く溝である。図９の土層断面図Ａ－A’の12～15層、同Ｂ－B’の４・８～18層に相当する。現状の規模は長さ約3.2m、２区まで含めると4.8mである。幅約0.75m、深さは約0.6mである。２・３・６・７号溝の掘削後に検出し、掘削をおこなった。これらの溝との関係は、後述する。溝の稼働時期は８世紀後葉～９世紀前・中葉と推定される。

６号溝（図47－②）

６号溝は、調査区の北東隅に位置し、東北東 - 西南西に走る。東側は調査区外へ伸び、北側（右岸）は撹乱のため破壊されたか、調査区外か不明である。南側は３号溝との切り合いとなるが、３号溝の掘削中に存在に気付いたため、前後関係を確認できる箇所が限られ、明確に前後の判断はできなかった。３号溝が切ったものとして掘削した。現状の規模は長さ約1.3m、深さ約0.2mである。図９の土層断面図Ｂ－B’のおおむね５・６層に相当するが、他の溝との関係も含め、詳細は後述する。

７号溝（図47－②）

７号溝は、調査区の北東隅に位置し、６号溝の南側に拡大する形である。本溝が埋没したのちに６号溝が掘削されたと考えられる。現状の規模は長さ約1.3m、深さ約0.25mである。図９の土層断面図Ｂ－B’の７層に相当する。

11号溝（図47－③）

11号溝は、調査区の東に位置し、南北に走る溝である。北は、12号竪穴建物に切られている。南は２区に続くが、２区では撹乱のために確認されず、そのまま調査区外となっている。図47の土層断面図Ｃ－C’でわかるように、西側は削平されている。現状の規模は長さ約1.24m、幅約0.6m、深さ0.35mである。

１号土坑（図47－①）

32区と２区との境で検出した円形の土坑である。３号溝の上に形成されている。２区の調査終了後の掘削で、南半は削平された。図９の土層断面図Ａ－A’の２～５層に相当する。現状の規模は長さ約0.75m、幅約0.42m、深さ約0.4mである。

５号土坑（図47－①）

調査区の中央付近で検出した。２・３号溝の上に形成されている。北半は撹乱で失われており現状は三角形で、規模は長さ約0.83m、幅約1.0m、深さ0.17mである。

10号土坑（図47－③）

調査区の西側で検出した。２号溝を掘削後、４号溝の西側で検出した。やや歪んだ長方形で、現状の規模は長さ約1.15m、幅約0.8m、深さ約0.1mである。削平のため浅く皿状の掘方になっている。

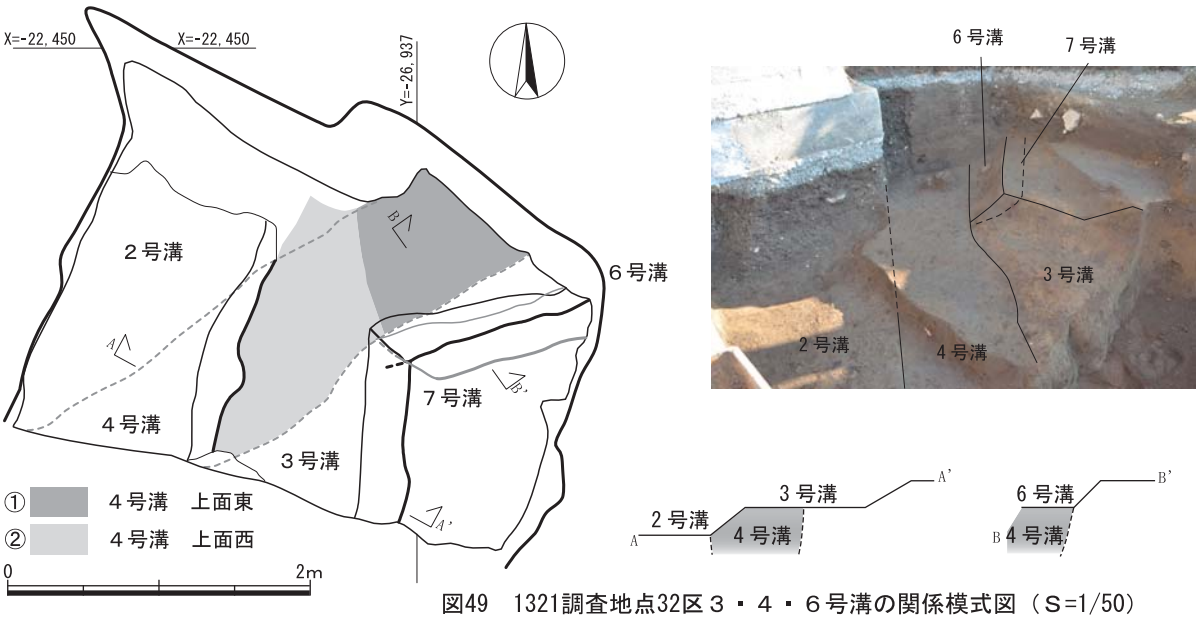

図49　1321調査地点32区３・４・６号溝の関係模式図（S=1/50）

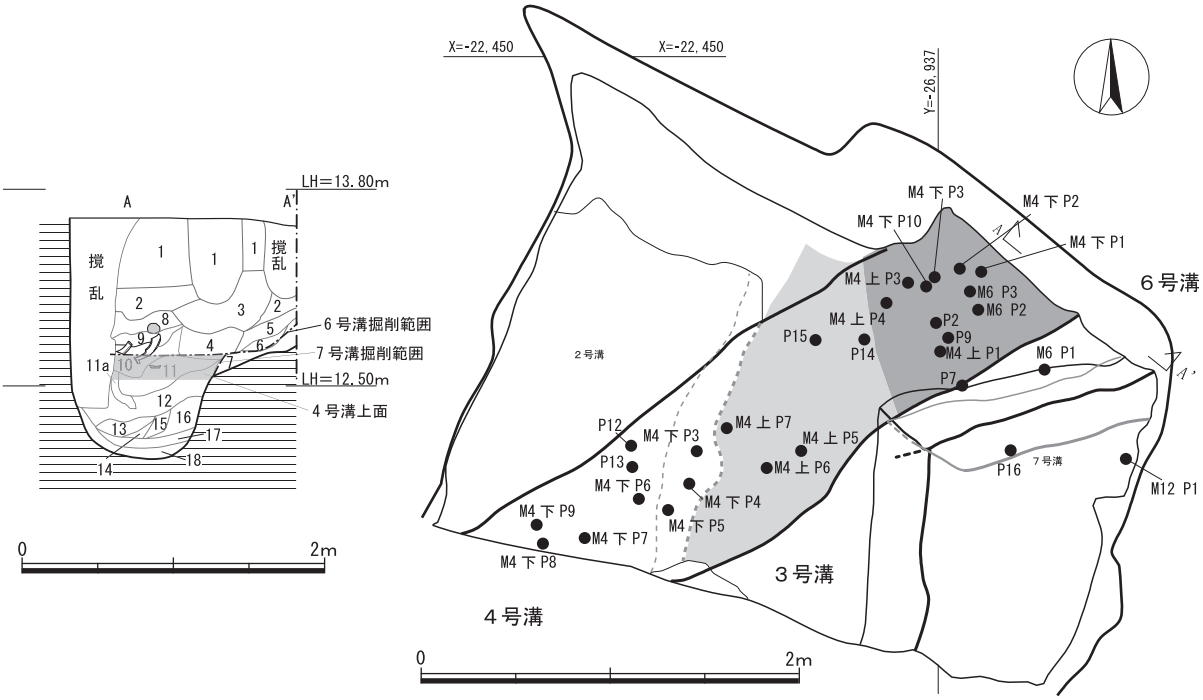

図50　1321調査地点32区４・６号溝土層断面図・遺物出土位置図（S=1/50・S=1/40）

溝の関係（図48・49・50）

32区では、５条の溝が検出された。狭い範囲内で撹乱もあり、前後関係は複雑である。以下、掘削過程と出土遺物から、前後関係を検証する。

まず、掘削過程と状況である。最初に調査区南端の断面観察を参考に、調査区西半を２号溝、東半を３号溝が検出されると想定し、２号・３号溝の主軸は北東と考えていた（図48－①）。２号・３号溝の境が出るまでは一括して掘り下げ（遺物は、西半は「２号溝上面」、３号溝側は「南半」として分けた）、その後は図９の土層断面図Ａ－Ａ’で見るように２号溝が３号溝を切っているので、先に２号を掘削した。予想に反し、２号の主軸は北であった。次に、３号溝側を東側（左岸）の立ち上がりを追いながら南側から掘削したところ、３号溝の主軸も北東ではなく北であると判明し、また、北側部分は東北東に向きが変わるため、６号溝として分離した（図48－②）。較差する３号溝と６号溝は、

６号溝の項で先述したように、３号溝が切っていると判断して掘削した。６号溝としての掘削範囲は、図50の土層断面図Ａ－Ａ’の４・５・６・８・９・10（上半）層である。６号溝の掘削・記録の後に、外側（東側）へ広げるかたちで７号溝を掘削し（図50の土層断面図Ａ－Ａ’の７層）、この時点で４号溝の東側（左岸）はほぼ検出した状態になった。最後に４号溝を掘削した（図48－③）。

３号溝と６号溝は、底のレベルはほぼ同じで、12.7m前後である。一方で、３号溝の南西側は２号溝に切られている。このため、４号溝の埋土は、図49の写真のとおり３号溝と６号溝の範囲内は0.2m程度一段高く、２号溝の掘削範囲内は低くなっている。図49のアミ①②範囲が高い部分である。４号溝の西側（右岸）は、２号溝により削平され、本来は東側（左岸）の高さであったと考えられる。そのため、４号溝の埋土を一段高い部分と、西側（右岸）の肩以下の掘り込み部分に分け、上部を４号溝上面とし、さらに３号溝と６号溝が交差する付近でアミ①②の範囲のように分けて掘削した。

６号溝は、４・５・６・９・10（上部）層が掘削範囲（図50：Ａ－Ａ’）で、レベルは12.7m程度までの掘削で、３号溝の底も傾斜によるが12.6～12.7m前後である。４号溝の肩のレベルは北端で12.54m（南端で12.4m）である。４号溝の一段高い埋土（アミ①②の範囲）の厚さは約0.2mで、図50の土層断面図Ａ－Ａ’の10層下部・11層・12層一部上部に相当する。

各溝出土の遺物を検討する。図52：228～241は４号溝出土の土器である。このうち、228・230・234は、４号溝上面（アミ①の範囲）と下位の４号溝内の土器が接合している。243は、６号溝内土器、４号溝上面（アミ①の範囲）、４号溝（レベルは12.45m、12層相当）と、４号溝・６号溝の２つの遺構をまたいで接合している。244は、６号溝出土土器、11層中の土器、４号溝上面（アミ①の範囲）出土土器が接合している。247は、図50の土層断面図Ａ－Ａ’中にある10層の土器と４号溝上面（アミ①の範囲）出土土器が接合している。また、４号溝出土の図51：231・232と６号溝出土の図52：250・252は同時期のものと考えられる。

以上をまとめると、６号溝出土土器と４号溝出土土器は、６号溝の掘削範囲を超えて上下で接合している。出土レベルからすると、図50の土層断面図Ａ－Ａ’の10・11層、特に４号溝上面の範囲の遺物がよく接合している。また、４号溝上面の遺物は下位の遺物とも接合しており、同一遺構内の遺物の可能性が高い。土器の接合状況と土層から、４・８～18層が４号溝、５・６層が６号溝の範囲で、４号溝が６号溝を切っていると考えられる。これにより、図52：250・251は、６号溝の遺物として取り上げたが平面位置とレベル（ともに12.8m）から４号溝内のものと考えられる。

次に３号溝出土土器について検討する。図51：221～227は３号溝内出土の土器、218～220は上面出土の遺物である。８世紀代から９世紀代までの時期幅があり、４号溝や６号溝の出土遺物より新相のものを含む。６号溝の範囲はほぼ４号溝であるから、３号溝との切り合いも４号溝との切り合い関係になる。掘削レベルを確認すると、３号溝は８・９・10（上部）層相当部分まで掘削したことになる。６号溝（４号溝）の埋土を掘削した場合、６号溝（４号溝）として取り上げた土器およびアミ①②の範囲の土器、４号溝内の土器との接合がみられるはずである。掘削時からその場合を想定し、注記にもその注意を払ったが、そうした事例は確認されなかった。このため、３号溝が６号溝（４号溝）を切っている可能性が高いと考えられる。

２号溝は、図９の土層断面図Ａ－Ａ’のとおり３号溝を切る最も新しい溝である。出土遺物は図51：209～217で、４号溝とおおむね同時期の土器が出土している。同：211・212は、２号溝・３号溝を検出する際、６号溝上部付近で出土した土器と接合している。広範囲に散在する土器の接合状況から、２号溝の掘削時に下位の４号溝の土器を破損し、土器片は掘削土と供に溝周囲に置かれた、あるいは掘削時に周囲に置かれた土器片が後に、溝内に入り埋没したような状況が想定される。

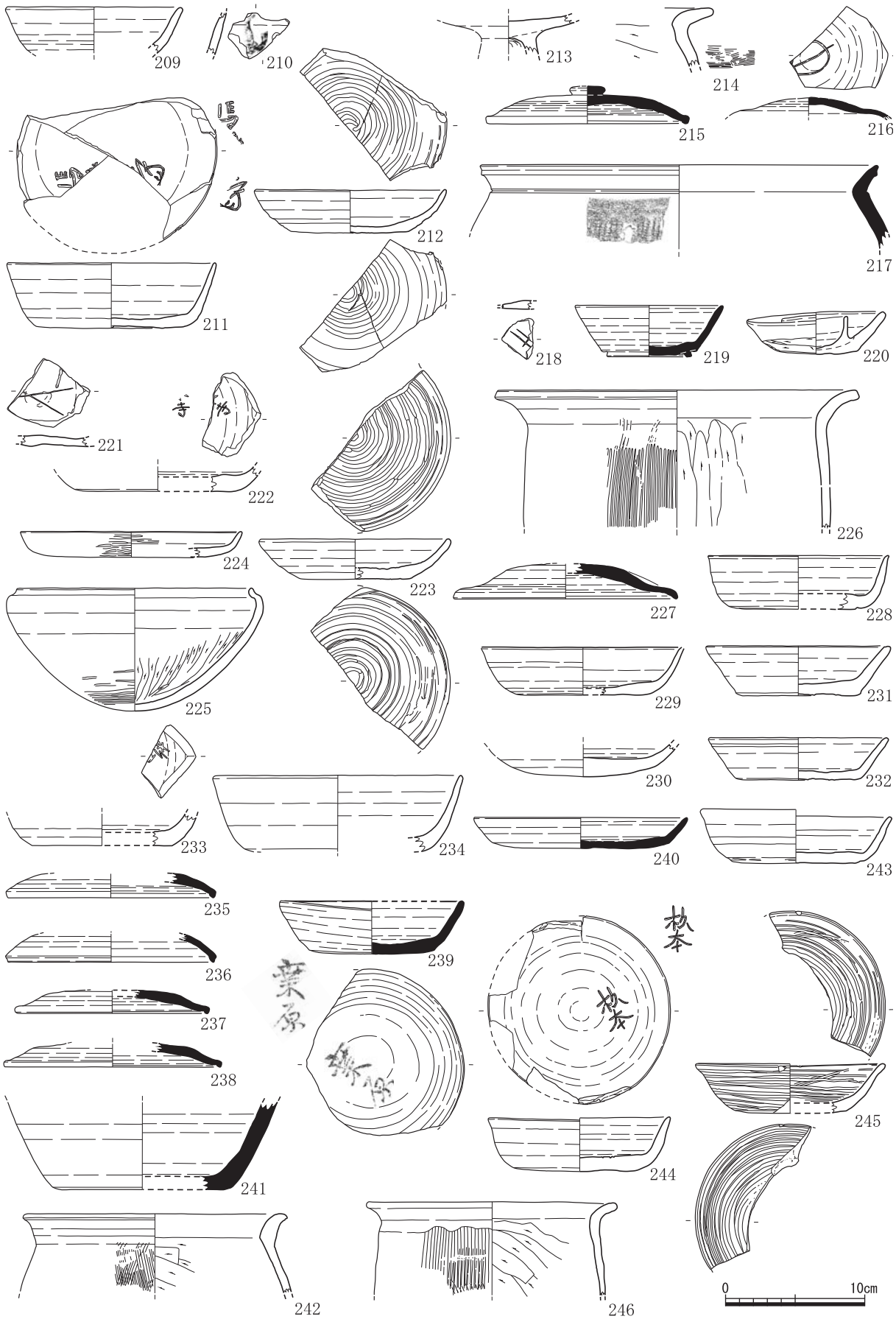

図51　1321調査地点32区出土遺物実測図１（S=1/4）

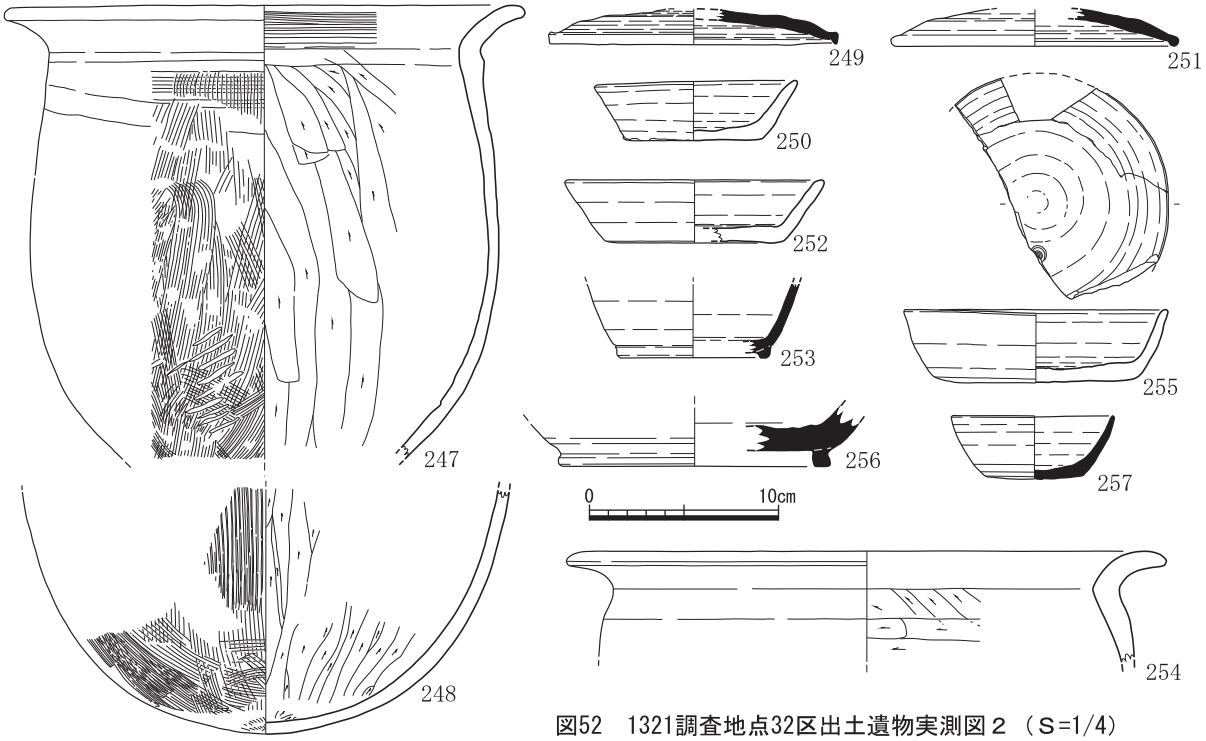

図52　1321調査地点32区出土遺物実測図２（S=1/4）

＜出土遺物＞（図51・52・55）

図51：209～217は、２号溝から出土した。同：209～212は土師器の坏で、209の坏には、「馬」のような文字と不明の文字が刻まれ、二つの文字の間にも、文字の一部と考えられる刻みがある。212の坏には、墨書があるが文字は不明である。213は土師器の高坏の坏と脚の接続部である。214は土師器の甕の口縁部で、口縁部から頸部はやや厚手で、ほぼ水平に屈曲する。215・216は須恵器の蓋である。215は扁平化した摘まみが付き、端部は丸くなっている。216は摘みがなく、ヘラ記号が付けられている。217は須恵器甕の口縁部である。短い口縁が直線的に開く。概ね８世紀後半～９世紀前葉のころと考えられる。218～220は、３号溝の上面で出土した。218はヘラ記号が付けられた土師器の坏と考えられる。219は須恵器の坏である。直線的に開き、小さく低い高台がやや内側に付く。８世紀後葉か。220は灯明皿で、灯明皿と受皿が一体化した新しいものである。221～227は３号溝から出土した。221～223は土師器の坏である。221の底部にはヘラ記号が付けられている。222の見込み端には「寺」の字が刻まれている。その上部にも文字の一部がある。1321調査地点や周辺で実施された既往の調査で「枚本寺」の刻書がたびたび出土しており、222の刻書も「枚本寺」である可能性が高い。223は湾曲しながら開き気味に立ち上がる。内外面ともに回転ヘラ磨きを施す。224は土師器の皿で、225は土師器の鉢である。226は土師器の甕である。口縁部が薄く、上に向かって外反しながら広がる。頸部はすぼまらず、真っ直ぐ胴部となる。227は須恵器の蓋である。215と同様に摘まみはない。概ね９世紀前葉を中心としている。図51：228～246、図52：247～251は、４号溝と考えられる範囲から出土した。このうち228～241は、先述したように４号溝のうち幅0.75mの掘方内からの出土である。228～234は土師器の坏である。228・229は直線的に立ち上がり、あまり開かない。231・232・233は若干浅くなり外に開く。前者は8世紀前半から中葉、後者は8世紀後半のころと考えられる。230は丸味を帯びた坏の底部である。233は坏の見込みの端に、「枚」と考えられる文字が刻まれている。235～238は須恵器の蓋である。239は須恵器の坏で、底部に墨書がある。「桒原」のようである。240は須恵器の皿、241は須恵器の鉢または壷の底部と考えられる。これらは概ね８世紀代～９世紀初頭のころと考

えられる。242は、４号溝の上位の埋土から出土した土師器甕の口縁部である。厚手で古相を示す。７世紀末～８世紀前半か。243～250は先述のように６号溝出土ではなく４号溝出土と考えられるものである。243～245は土師器の坏で、244の見込みには「枚本」の字が刻まれている。245は開き気味に立ち上がり、口縁端がさらに如意状に開く。内外面ともに回転ヘラ磨きを施す。246～248は土師器の甕である。246は薄い口縁が上に向きながら開き、以下はくびれずに胴部になる。247は薄い口縁が大きく外反しながら開く。９世紀初頭～前葉である。249は須恵器の蓋である。250・251は出土地点から４号溝と考えられるものである。250は土師器の坏で、231・232と類似した形態である。251は須恵器の蓋である。252・253は、４号溝との切り合いには関わらない６号溝の範囲から出土した。252は土師器の坏で231や250に類似する。253は須恵器の碗である。低く小さい高台が、底部の端に付く。８世紀末葉～９世紀前葉の頃と考えられる。254は12号竪穴建物出土の土師器甕である。厚い口縁が大きく外反して開く。８世紀後葉か。255～257は包含層から出土した。255は土師器の坏で、20区出土の図41：198・200の竹管状のものを突いたような跡がある。256・57は須恵器の坏である。

このほか、布目瓦が1点（図55：277）３号溝から出土している。また、２号溝からは馬の右の上顎歯・下顎歯、３号溝上面からは牛の歯、４号溝底部では牛の左下顎の歯が出土している。

⑰35・38区

35・38区は、14区の東側に隣接する。14区に埋設した雨水桝に接続する配管部である。35区は北半が撹乱によって失われていた。当初は幅2.1mで南北に掘削していたが、工事都合により南端部を南

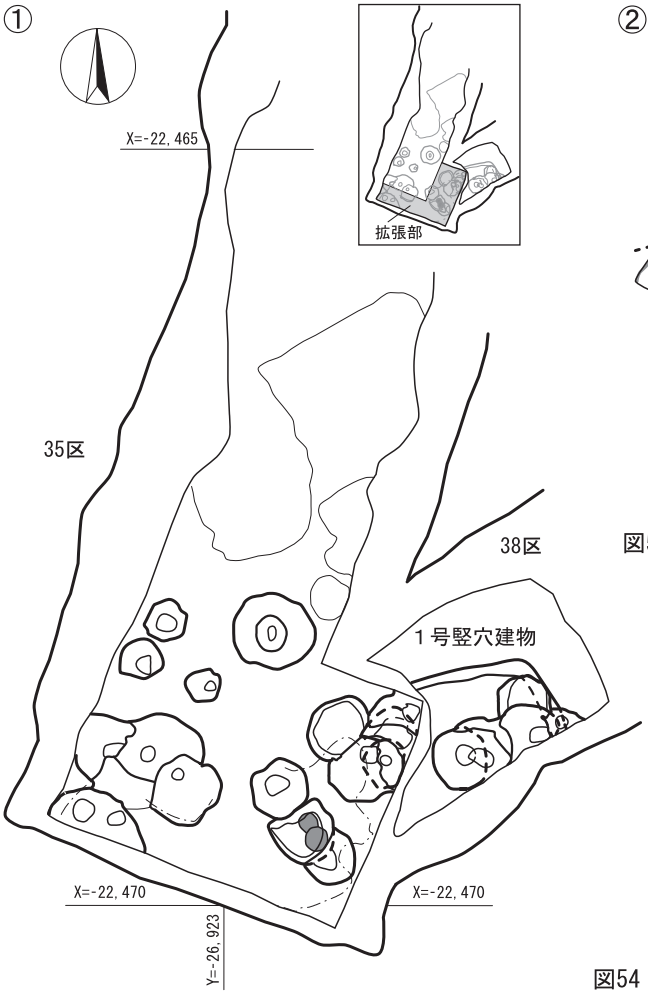

図53　1321調査地点35・38区遺構実測図（S=1/50）

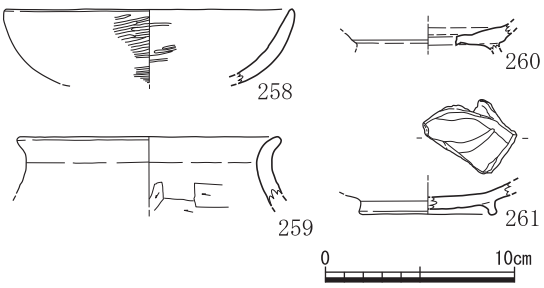

図54　1321調査地点35区出土遺物実測図（S=1/4）

側へ0.6m、東側へ1.0m拡張した。遺構を確認できたのは約2.05×2.0mの範囲である。35区と14区の間の僅かな間が38区で、1.1×1.7mの範囲である。ピットと、両区にまたがると考えられる竪穴建物が検出された。

＜検出遺構＞

１号竪穴建物（図53）

35区と38区の南半に位置する。先に発掘調査を実施した35区では、包含層中で硬化面を確認した。包含層中では、竪穴建物のプランを把握できなかった。竪穴建物の掘方は地山に達していなかったようで、包含層を除去したのち、地山でも建物の掘方は確認することできなかった。隣接する38区では、かろうじて竪穴建物の北東角の部分を確認することができた。現状の規模は長さ約0.5m、幅0.75m、深さ約0.25mである。硬化面の範囲と把握したプランから、図53－②のように復元すると、竪穴建物の主軸は北北西である。全容は不明である。

そのほか、多くのピットを検出したが、掘立柱建物になるような柱列は確認されなかった。

＜出土遺物＞（図54）

図54：258は11号ピットから出土した土師器の坏である。屈曲部とないが肥厚部の名残をとどめ、緩やかな湾曲とヘラ磨きの特徴を残す。６世紀末から７世紀前半か。259～261は遺物包含層から出土した。259は土師器の甕の口縁部である。６世紀後半か。260は土師器の坏の底部である。中央が半円形に欠損し一見穿孔したように見えるが、粘土紐が外れた痕跡と考えられる。261は土師器の碗の底である。全体が黒色だが、いわゆる黒色土器ではなく、土師器が火を受けたものと考えられる。これらは10世紀代と考えられる。

⑱その他の遺物（図55・56・57・58・59）

1321調査地点の各調査区から出土した遺物や少数の遺物を、ここでまとめて記述する。

図55：262～265は、これまでに記述した区以外の区から出土した参考遺物である。262は33区から出土した土師器の甕の口縁部である。263・264は1321調査地点の廃土出土の土師器の坏で、刻書がある。他の刻書土器については、各調査区で記述しているので、注意されたい。263は３文字の刻みがある。ほとんどが失われているが、特徴から「枚本寺」である可能性が高い。264も、２文字のきざみがあり、下の文字は「本」である。これも「枚本」である可能性がある。265は磁器の皿である。若草色の絵具で「大学」の文字が書かれている。266～277は、布目瓦である。277は縄目が付いている。全体的に破片であるため、屈曲の具合等で平瓦・丸瓦の判断をした。

図56：278～285は、1321調査地点各区から出土した鉄製品である。278は釘か？刀子のようだが刃がなく、茎にしては少し長い。279～282・284は刀子と考えられる。279・282は区があり、刃も観察できる。283・285は、細く釘のようにも見えるが、劣化が著しく不明品である。

図57：286～293は、1321調査地点各区から出土した石製品・土製品・磁器製品である。286～288は紡錘車である。286・288は土製で、286は10区の遺物包含層、288は11区の遺物包含層から出土した。287は石製で、15区東の遺物包含層から出土した。直径は復元すると286・288のそれぞれの５㎝を越え、厚さも１㎝近く大型である。287は直径４㎝、厚さ５㎜である。289は泥面子で10区西の遺物包含層から出土したものである。シダ植物のような葉が、柄から放射状に広がる団扇のようなデザインで、

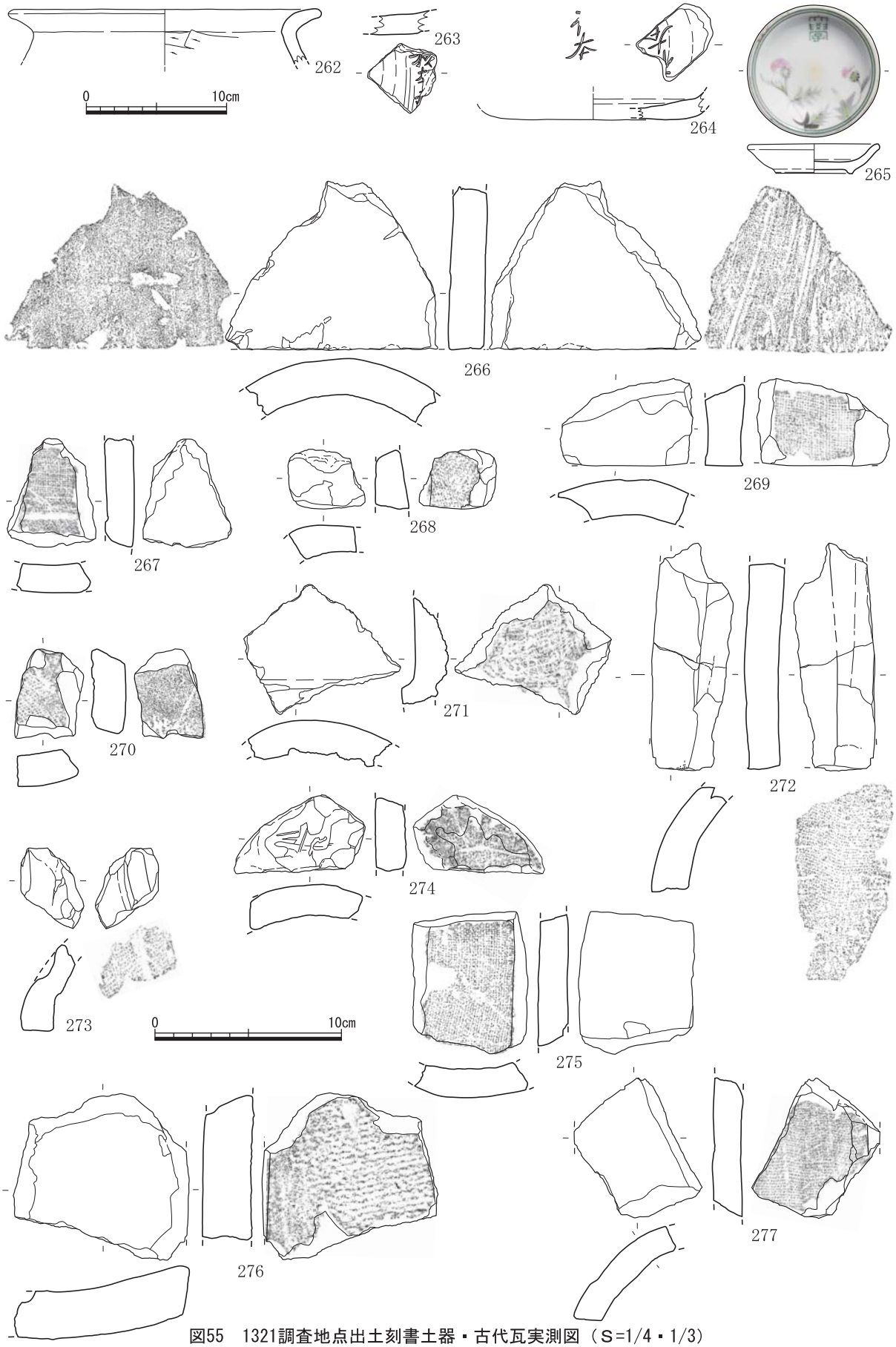

図55　1321調査地点出土刻書土器・古代瓦実測図（S=1/4・1/3）

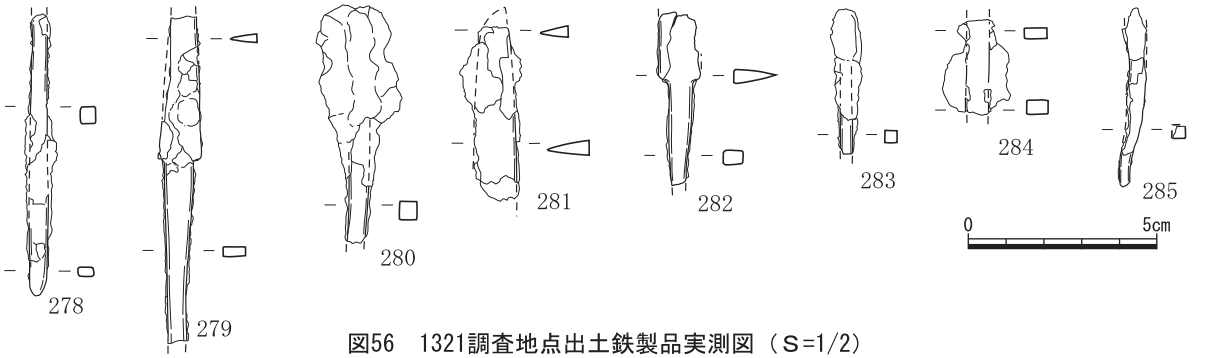

図56　1321調査地点出土鉄製品実測図（S=1/2）

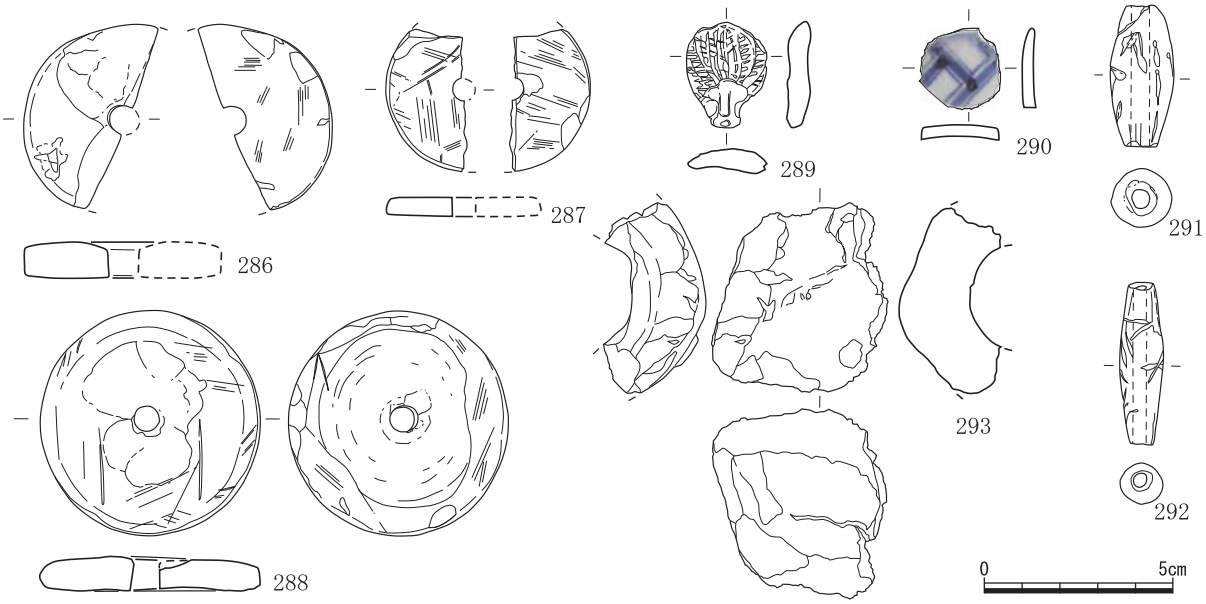

図57　1321調査地点出土土製品・磁器製品実測図（S=1/2）

細工が細かい。290は、12区の包含層から出土した、磁器の破片を円形に加工した破片面子である。291・292は、土錘である。それぞれ12区と20区の遺物包含層で出土した。293は鞴の羽口の破片である。11区の２（27）号竪穴建物から出土した。

図58：294～306は1321調査地点の各区から出土した主な縄文土器である。本荘北地区は、既往の調査でも縄文土器が遺物包含層から出しているが、縄文時代の遺構は未確認である。縄文時代後期後葉から晩期のものである。294は御領式、298・299・305は天城式、300は古閑式、296は刻目突帯文の土器である。302は、粘土帯を貼り付けて口縁部を肥厚させている。張り付けた粘土帯の端部を凹ませ、その直下を細い隆帯のようにしているが、口縁部全体に回ってはいない。隆帯の下部は指で押さえている。張り付けた粘土帯の内側、頸部から立ち上げた器壁の端部には、内側から外側に向かって斜めに工具を刺突した刻み目文様が付けらえている。それらは等間隔で整然としており、丁寧に施文されている。波頂部は、それらに直行する方向に施文具によって押さえ、無文にしている。類例は不明である。297・303・304・306は、有文土器から判断して後期末葉から晩期初頭、刻目突帯文に属するものと考えられる。

図59：307～314は1321調査地点各区から出土した主な石器である。308・310は磨り石で、トーンを張っている部分は、顕著な擦れがある。311・314は砥石で、トーンを張っている部分は、やはり顕著な擦れがある。314は全面が研ぎ面である。312は敲き石である。309は、周囲を剥離しており石斧のようにやや長い台形を呈するが、不明品である。

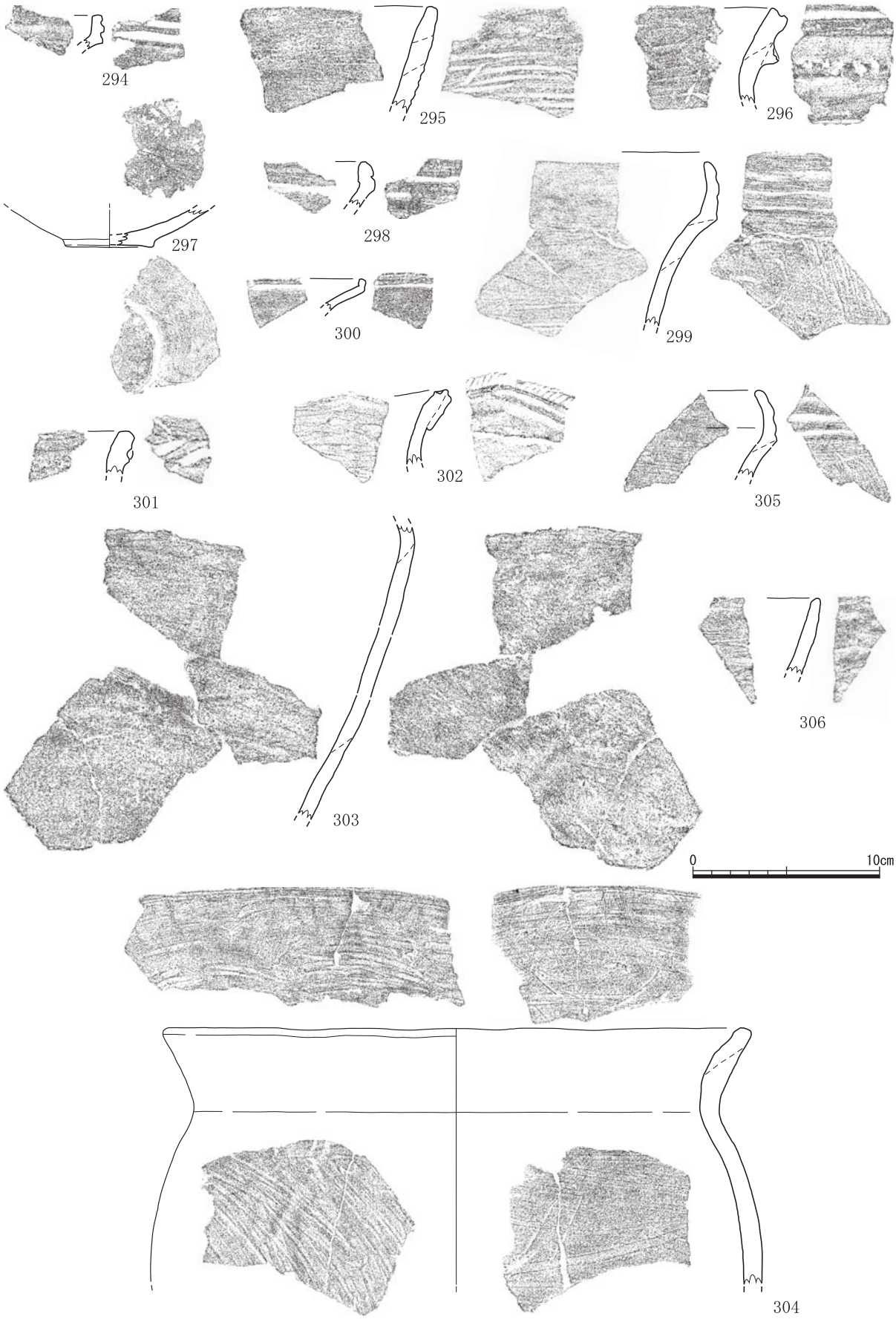

図 58　1321 調査地点各区出土縄文土器実測図（S=1/3）

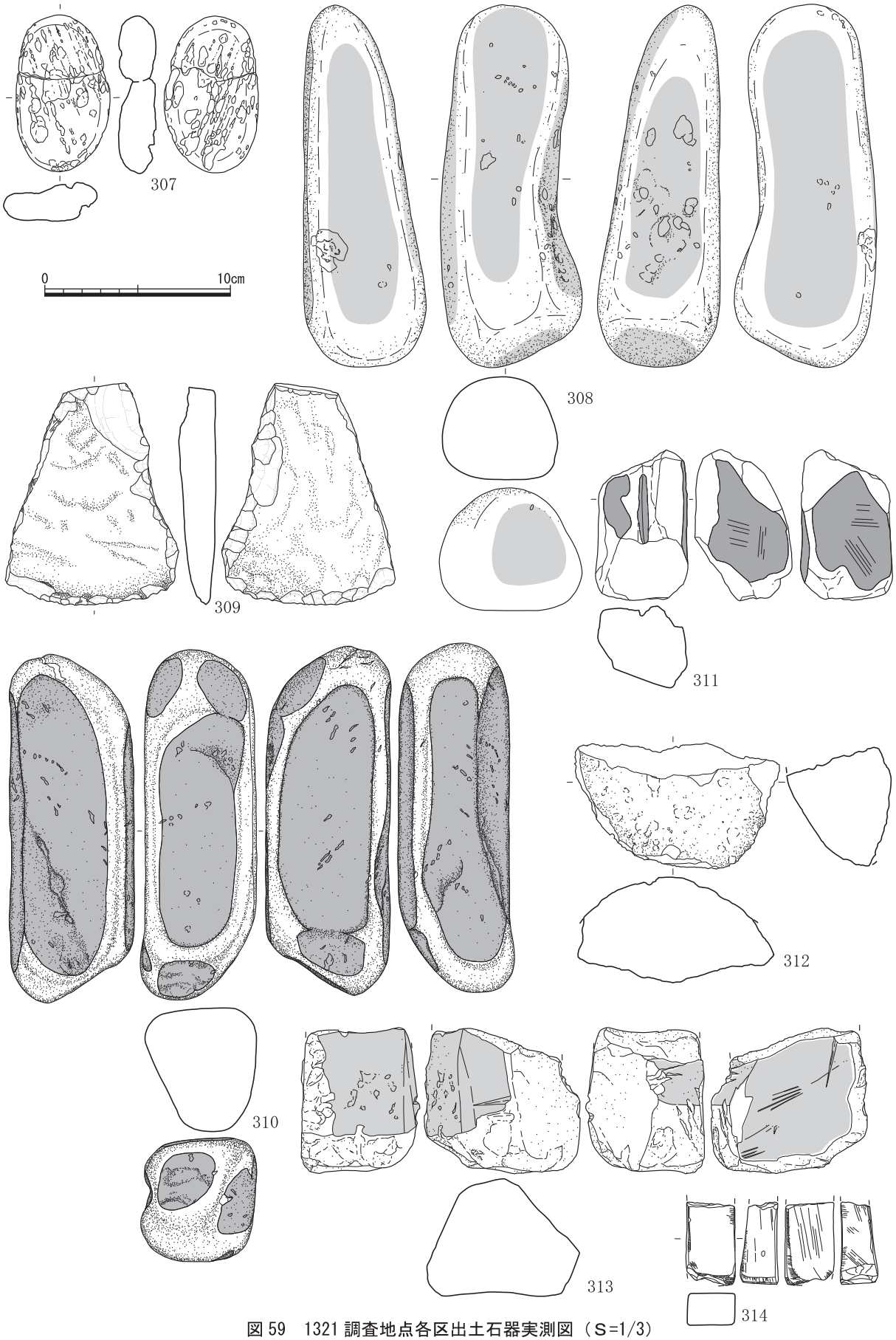

図 59　1321 調査地点各区出土石器実測図（S=1/3）

（3）1322調査地点における検出遺構と出土遺物

本調査区は、樹木移植事業に伴う掘削に起因するもので、1322調査地点である。旧入退院棟の玄関前（東側）にあった広場に植栽されていた約10本の樹木について、一部移植や除根をおこなった。ほとんどの掘削において、埋蔵文化財への影響はなかったが、36・37区においてのみ抜き取りの際に遺構の検出があった。この36・37区については、本来は1322調査地点としての区番号を付するところであるが、発掘調査時に1321調査地点の連続番号を付与し、遺物の注記等もそれに準じて整理を行った。このため、混乱を避けるために区の番号はそのまま36・37区として報告する。

①36・37区

36・37区は、1321・1322・1325調査地点の全範囲の中で北西、４区の北約10mに位置する。

本地点は、樹木の移植元で抜根と根鉢を作るために、樹木の周囲を幅約1.2～1.5mでドーナツ状に掘削して発掘調査を実施した。中央に約２×２mの樹木と根を残し、調査区は５角形になっている。調査区の北西側で１号溝を、そのほかの範囲ではピット数個を検出した。

＜検出遺構＞

１号溝（図60）

１号溝は、調査区の北西に位置し、北西から南西に走る。両端はそれぞれ調査区外に続く。現状の規模は、長さ約4.2m、幅約1.1、深さ約0.5mである。溝の底は幅約0.5mの範囲が一段低くなっている。このため、調査区の外に北西側（右岸）の肩がある可能性がある。遺物は小さな土師器片が２点出土したのみである。

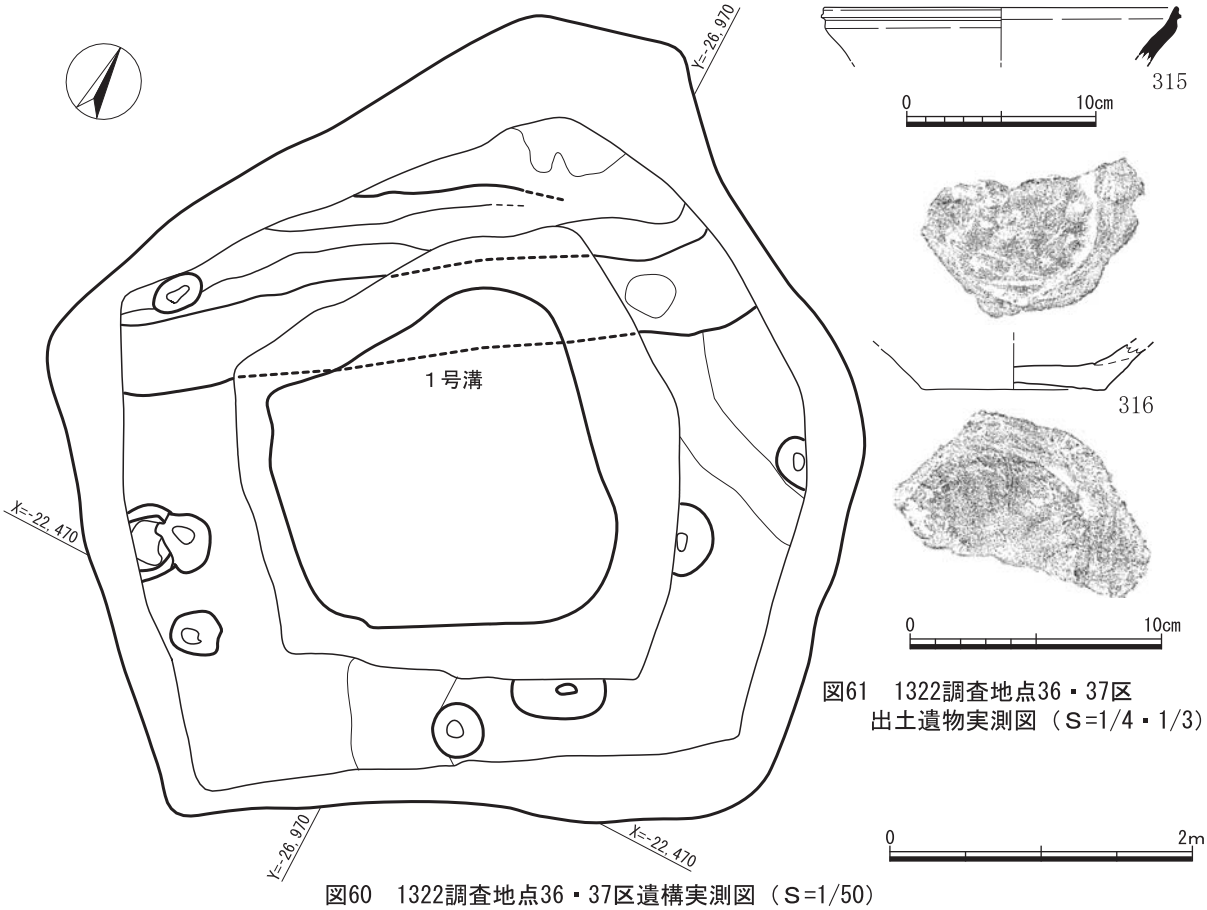

図61　1322調査地点36・37区
出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

図60　1322調査地点36・37区遺構実測図（S=1/50）

このほか、数個のピットを検出したが、掘立柱建物の柱穴になるような配列等は確認されなかった。

＜出土遺物＞（図61）

図61：315は須恵器の甕の口縁部である。このほか、土師器や須恵器の細片が、ピット内や包含層から出土した。316は、縄文土器で、後期後葉～晩期初頭のものと考えられる。

（４）1325調査地点における検出遺構と出土遺物

①６・７・14区

６・７・14区は、1321・1322・1325調査地点の全範囲の中で、中央のやや南よりに位置する。電気配線工事の1325調査地点の中でも中心に位置し、ここから東西と北に各配線がのびている。西端の１区から２・４区の配管部を経て、ハンドホールを設置するために4.2×4.2mの範囲を掘削したのが６区である。東にのびる配管部が７区である。その一部、約2.5×2.1mの範囲で遺構が確認された。また、６区から北へのびる配管部が14区で、遺構面（地山）が確認された範囲までを提示しておく。

なお、土層は６区東壁の土層柱を提示した。１層は現代の表土層で、２層も近現代の土層、３層が、古代の遺物包含層である。

＜検出遺構＞

６区は、中央部に大きな撹乱があり、検出した遺構はピット３個のみである。７区には、幅0.6mの撹乱が縦断するように２カ所あり、遺構面（地山）が残された範囲と撹乱が相互に縞状になっている。残された遺構面（地山）範囲で、竪穴建物のようなプランを確認した。14区は、東壁沿いの幅0.2m以外は、撹乱により破壊されていた。破壊がなかった部分では、地表下1.1mで包含層を検出した。

６区（図62）

６区で検出した遺構はピットが３個である。このうち、１号ピットの上端にかかる形で、土師器の坏（図63：317）が出土した。

７区

２号竪穴建物（図62）

７区の中央に位置する。撹乱により大半が失われている。南側は調査区外にのびる。現状の規模は長さ約0.8m、幅約0.6m、深さ約0.1mである。竪穴建物とすれば、３号竪穴建物付近までプランがのびると考えられるが、確認できなかった。しかし、墓坑のような要素も観察されなかった。

３号竪穴建物（図62）

７区の南西隅に位置する。現状の規模は長さ約0.7m、幅約0.35m、深さ約0.05mである。東側は、撹乱のため不明である。２号竪穴建物との切り合いも不明である。２号竪穴建物とともに、竪穴建物としてはかなり小規模であるが、例えば墓坑のようなほかの遺構と考える要素も観察されなかったため、竪穴建物としておく。

14区（図62）

14区では、撹乱により半分失われたピットが一つ、検出されたのみである。

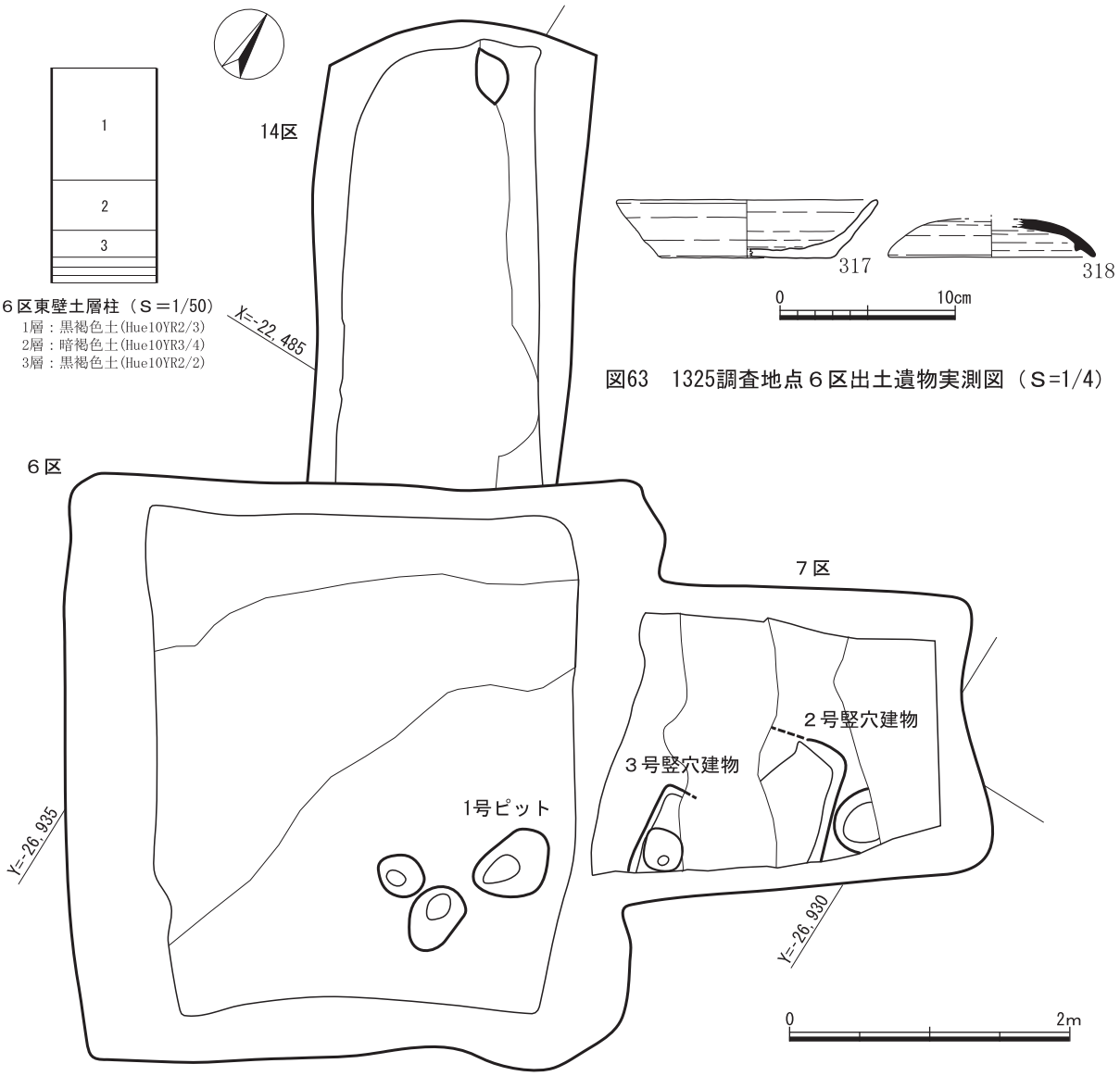

図63　1325調査地点６区出土遺物実測図（Ｓ=1/4）

図62　1325調査地点６・７・14区遺構実測図（Ｓ=1/50）

＜出土遺物＞（図63）

図63：317と318は、６区１号ピットから出土した。土師器の坏と須恵器の蓋である。蓋は、やや丸味と器高の高さを残し、退化した小さなかえりが付いている。

②17区

17区は、1321・1322・1325調査地点の全範囲の中で、東部に位置する。1321調査地点13区から東にのび、同18区に繋がる。途中、ゆるやかに「く」の字に曲がる長さ15m、幅2.2mの範囲である。その中で、東側８mの区間で遺構面および遺構を確認した。

＜検出遺構＞

17区では、溝１条と数個のピットが検出された。ピットを検出した地点は、周辺が撹乱により削平されて島状に残された状況である。これらの状況から、失われた遺構があった可能性が考えられるとともに、１号溝の上部も削平されたものと考えられる。

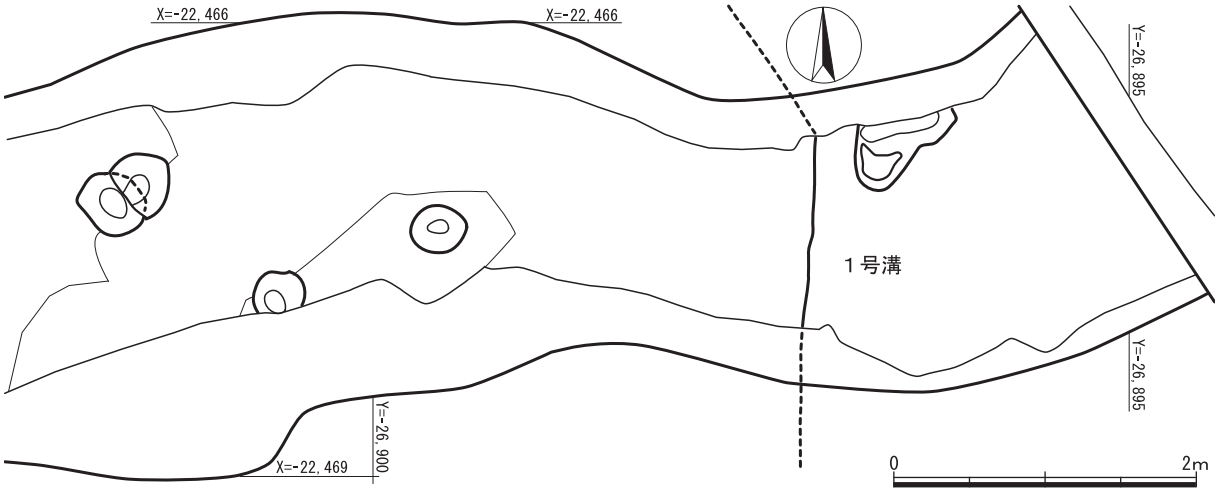

図64　1325調査地点17区遺構実測図（S=1/50）

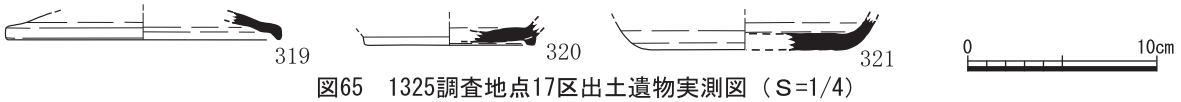

図65　1325調査地点17区出土遺物実測図（S=1/4）

１号溝（図64）

１号溝は、17区の東端で検出した。北から南に調査区を縦断する。現状の規模は、長さ約2.1m、約幅2.6mである。本溝は、1321調査地点17・18区で検出した１号溝の右岸部に相当する。配管のために必要な掘削深度は0.8m程度であったため、１号溝はプランを確認して現状保存とした。

この他、17区では数個のピットが検出されたが、掘立柱建物になるような柱列は確認されなかった。そのほかの遺構もない。

＜出土遺物＞（図65）

図65：319～321は、17区の包含層から出土した。319は須恵器の蓋、320は須恵器の坏の底部である。321は、直径が大きく須恵器の鉢の底部と考えられる。

③23区

23区は、1321・1322・1325調査地点の全範囲のなかで中央やや北に位置する。1325調査地点の６区から、北に位置する９・11区にのびる配管部の中間地点に位置し、23区は24区から北にのびる配管部で、1.8×2.8mの範囲である。図示した23区より北側では、撹乱と掘削深度の関係により、遺構面（地山）は検出されなかった。

＜基本土層＞（図66）

23区の土層は、調査区東壁の南半部で土層柱を作成した。１層は、調査時に敷かれたバラスである。２層は近・現代の土層、３層は古代の遺物包含層である。

＜検出遺構＞

23区では、２条の溝状遺構とピット数個を検出した。

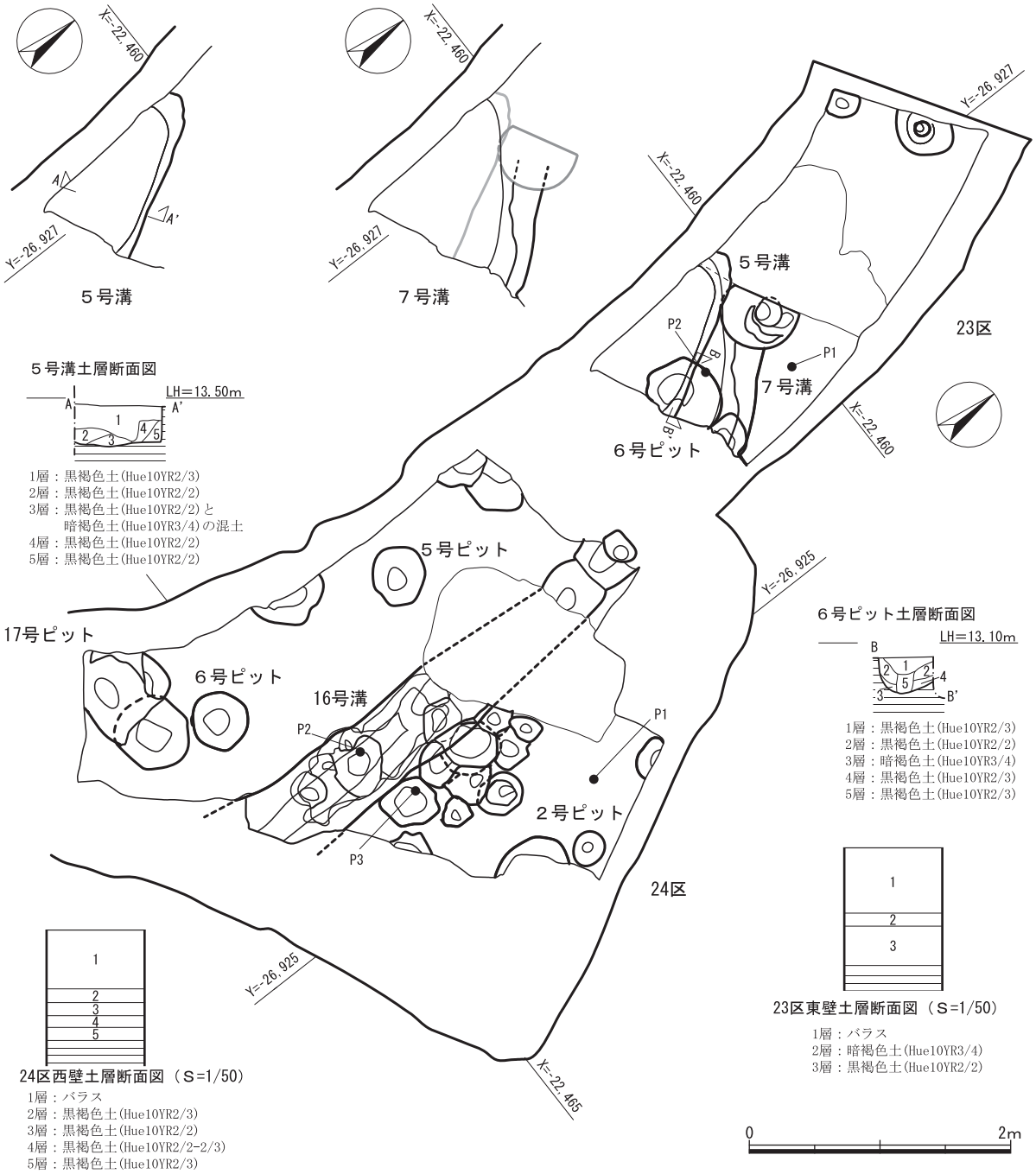

図66　1325調査地点23・24区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

５号溝（図66）

５号溝は、23区の南西隅に位置する。北・南側は撹乱により削平され、西側は調査区外にのびる。現状の規模は、長さ約1.3m、幅約0.75m、深さ約0.3mである。底部は平らで、竪穴建物のようでもある。直線状に北西－南東にのびるプランを検出した際は溝と判断したが、後に掘削した24区には続かなかった。本荘北地区における既往の発掘調査で、2.3×2.8mの小型の古代の竪穴建物を検出した例もあるが、長軸・短軸が方位とはずれており、相違もある。

７号溝（図66）

７号溝は、５号溝の東側に位置する。北側は２号ピットが切っており、それより北は撹乱による削

平不明ある。西側は５号溝が切っており、南側も撹乱のため不明ある。現状の規模は、長さ約0.8m、幅約0.6m、深さ約0.3mである。５号溝より、主軸は西に傾く。５号溝と同様に、検出時は溝と考えたが、24区には続かない。

そのほかピットを５個検出した。６号ピットは５・７号溝の掘削後に底で検出した。いずれも、掘立柱建物の柱穴なるような柱列にはならなかった。

＜出土遺物＞（図68）

図68：322～324が、23区の出土遺物である。322は５号溝から出土した土師器の坏、323と324は遺物包含層から出土した、土師器の高坏と坏の脚部である。８世紀代中頃～後半のものと考えられる。

④24区

24区は、1321・1322・1325調査地点の全範囲の概ね中央やや北に位置する。1325調査地点６区から北の９・11区にのびる配管部の中間地点に位置する。ハンドホール設置とその分岐のために、24区は台形を呈している。その中で、遺構面（地山）が残されていた範囲では、遺構を検出した。

＜基本土層＞

24区の土層は、調査区西壁の一部で土層柱を作成した。１層は、調査時に敷かれたバラスである。２層は近・現代の土層、３層は古代の遺物包含層である。４層も古代の遺物包含層で、３層と比較するとやや明るい茶色で、耕作土のようにオレンジ色や白色の細粒を含みザラザラした土である。５層は、地山と４層の漸移層である。

＜検出遺構＞

24区では、１条の溝とピット多数を検出した。

16号溝（図66・67）

16号溝は、24区の中央を南北に走る溝である。途中、１/３程度を撹乱により失っている。断面はＵ字に掘削されている。撹乱を挟んだ北側は、ピット状になっており南部とはかなり様子が異なるため、南北は繋がらず16号溝は撹乱のどこかまでであったと考えられる。現状の規模は、長さ約2.1m、幅約0.6m、深さ約0.3mである。溝の上面には、見た目はピンク色（Hue7.5YR3/3暗褐色）の粘土質土が不定の形・深さで堆積し、その下には古代の新旧２つの遺物包含層が堆積していた。粘土質土は、人骨が腐食し土壌化したもののようでもあった。16号溝が、途中で途切れる不自然さもある反面、粘土質土は16号溝の底からは0.3m上位にあり、16号溝を墓坑とするにも疑問点である。

そのほか、多数のピットを検出した。５・６号ピットは、大きさが同等で南北に並び、距離も掘立柱建物の柱列としては適当で、可能性は考えられる。

＜出土遺物＞（図68）

図68：325～326が、24区の遺物包含層出土遺物である。325は土師器の碗で、低く小さい高台が端に付き、高台から一体で立ち上がる。326は16号溝付近から出土した、須恵器の坏である。

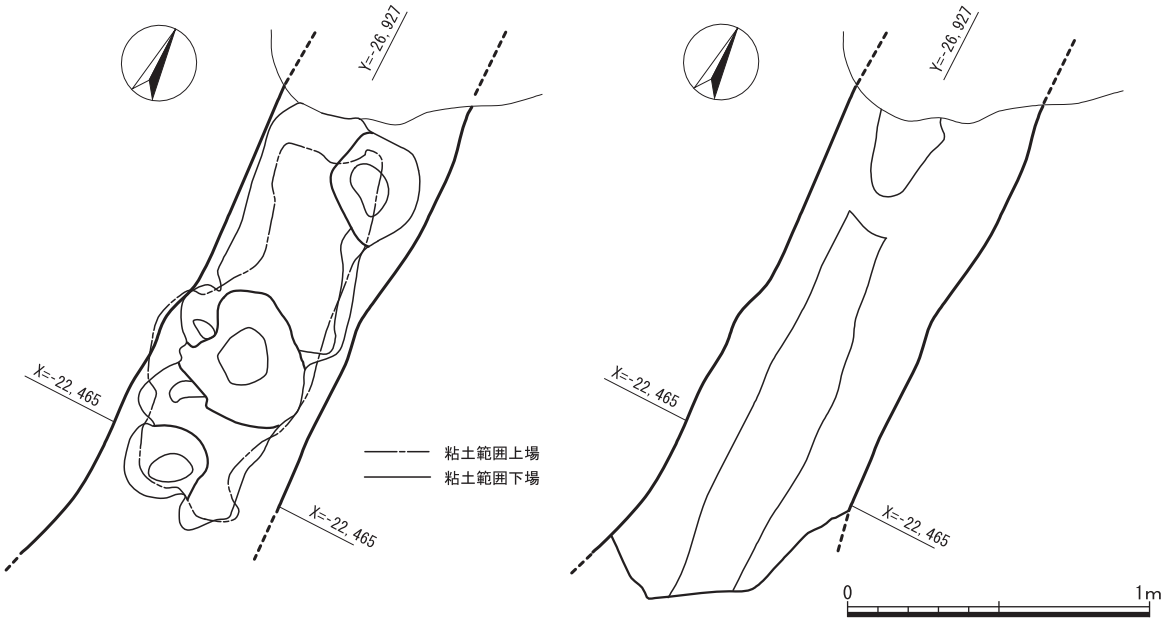

図67　1325調査地点24区14号粘土範囲および16号溝実測図（S=1/25）

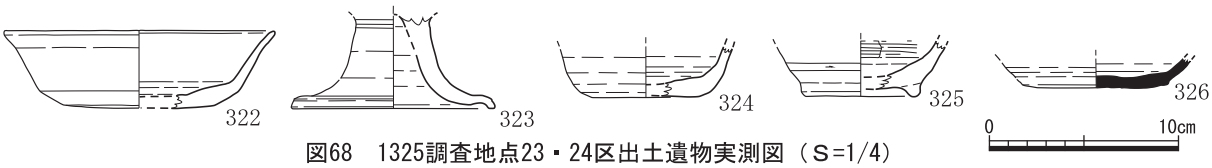

図68　1325調査地点23・24区出土遺物実測図（S=1/4）

⑤25区

25区は、1325調査地点24区の南、1321調査地点35区の西に位置する。24区のハンドホールと、1325調査地点６区のハンドホールを繋ぐ配管部で、25区は北部１/３強の範囲である。25区の中心部、長さ約2.9m、幅1.4～0.6mの範囲で遺構面（地山）を確認した。そのほかは撹乱部である。

＜検出遺構＞

25区では、土坑とピットの各１個を検出した。また、竈の残滓が出土した。

１号土坑・竈の残滓（図69）

遺構面（地山）を確認した範囲内に小配管による浅い撹乱があり、これを挟んで調査範囲を南北に分けた。北側では、図69－②のように焼土と竈の粘土片、土器片が出土した。これらを記録・撤去して精査をおこなったが、通常確認できる硬化面と呼んでいる床は検出されなかった。

西壁際および西壁中にもっとも土器片と竈部材・焼土が集中しており、西壁下で検出した１号土坑は竈の燃焼部に相当する可能性がある。現状を確認すると、図69（B－B’）図中の７層部分を支柱の掘方、平面においては東側にやや突き出た部分が袖石の掘方と見立てる場合、竪穴建物の本体は北側になり図69－②のA－A’の印付近で竪穴建物の立ち上がり（この場合南壁）が検出されると予想されるが、今回は検出されなかった。いずれにしても、調査範囲は、竪穴建物の外と考えられる。

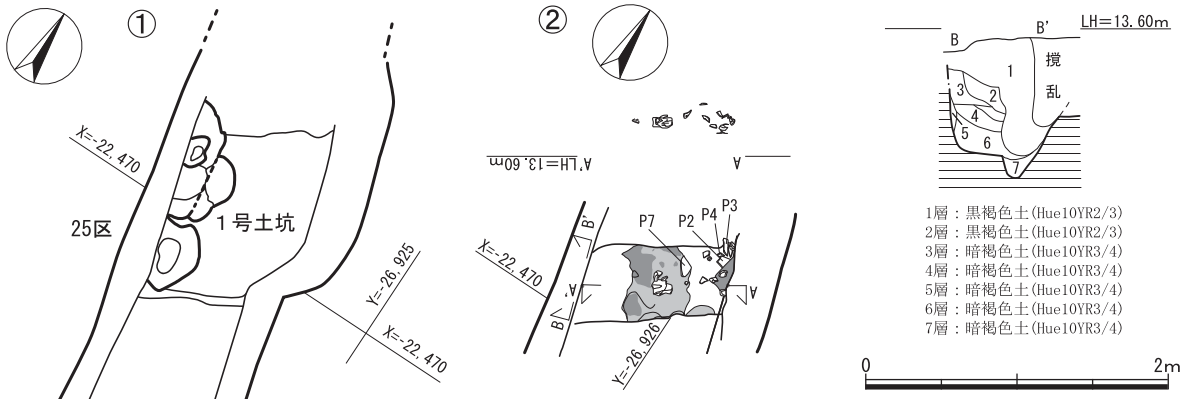

図69　1325調査地点25区遺構実測図・土層断面図（S=1/50）

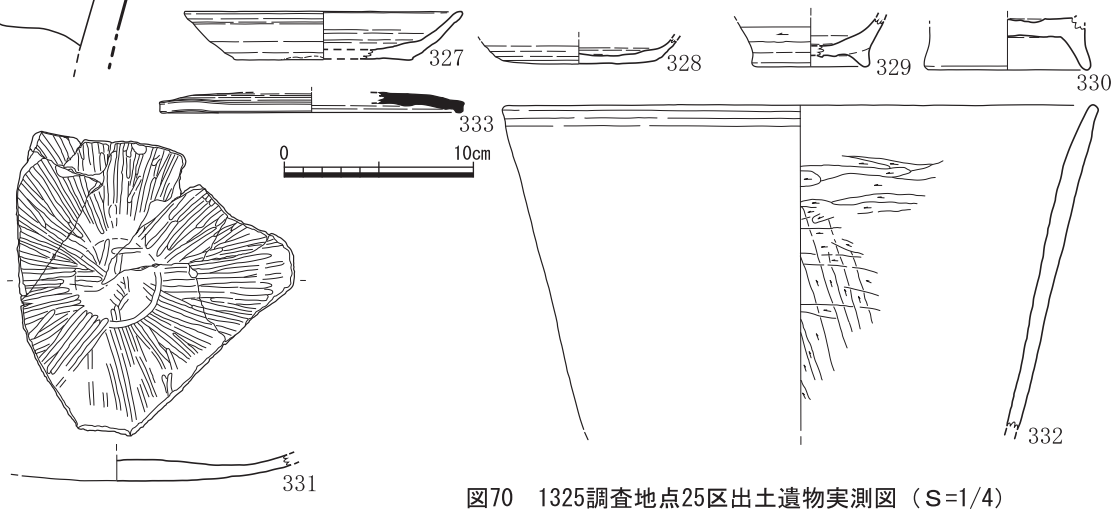

図70　1325調査地点25区出土遺物実測図（S=1/4）

＜出土遺物＞（図70・71）

図70：327～333が、25区の出土遺物である。327は１号土坑から出土した土師器の坏である。328～330は遺物包含層から出土した土師器の坏と碗である。328は327のように大きく開く。９世紀前葉の頃か。329～330は、高台からの立ち上がりが一体となっており、高台の形態の特徴と合わせ９世紀後半の頃と考えられる。331と332は、調査区西壁下の焼土中および壁中から出土した。331はヘラ磨きによる暗文が放射状に施された土師器の皿である。332は土師器の甑と考えられる。333は須恵器の蓋である。かなり扁平化し、端部は丸くなっている。

図71は、上述した調査区以外の区出土遺物および特殊遺物である。334は23区の北側に隣接する21区から出土した。土師器の坏である。335は14区の近世～近代の土層から出土した泥面子である。残存部から、観音菩薩のような仏像の頭部がデザインされている。336・337は17区の１号溝から出土した。336は青銅製の輪、337は大型の角釘である。338～342は各区出土の縄文土器である。338・340は口縁部に多条の沈線が施された古閑式の鉢、341は無沈線の古閑式の鉢である。339は後期末葉から晩期初頭にかけてみられる鉢の底部である。342は古閑式の浅鉢の口縁部である。344は23区から出土した。３面に摩耗して光沢がある部分があり、台石と考えられる。345は25区出土の敲石である。半分欠損しているが、両面の中央と側面に敲打の痕がある。

図71　1325調査地点各区出土土器・土製品・金属製品・縄文土器・石器実測図（S=1/2・1/3・1/4）

表３　1321調査地点出土遺物一覧表

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
8	1	土師器	坏	口径 12.4 底径 8.0 器高 2.9	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR5/8 外：Hue 5YR6/6	1区3号溝Ⅲ層	内外面に赤色化粧土
	2	土師器	甕	口径 27.5 底径 器高	口縁部	内：回転ナデ, ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 10YR7/4	1区3号溝Ⅰ層	内外面にスス付着
	3	土師器	坏	口径 底径 9.8 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ヘラ切り	内：Hue 7.5YR8/4 外：Hue 10YR8/2	1区7号溝最下層	刻書「枚本寺」 底部一部にスス付着
	4	土師器	坏	口径 13.2 底径 8.7 器高 3.5	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	1区7号溝上層・攪乱	
	5	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 5YR7/6	1区7号溝上層	刻書 外面に赤色化粧土 内面一部にスス付着
	6	土師器	甕	口径 22.2 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR7/4	1区7号溝下層№2	内外面にスス付着
	7	須恵器	坏	口径 底径 6.8 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5Y6/1 外：Hue 7.5Y6/1	1区7号溝上層	外面一部に自然釉
	8	須恵器	坏	口径 12.8 底径 9.2 器高 4.0	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y6/0	1区7号溝最下層・撹乱	
	9	須恵器	坏	口径 底径 9.2 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5Y6/1 外：Hue 7.5Y6/1	1区7号溝最下層№4	
	10	須恵器	鉢	口径 22.4 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, タタキ	内：Hue 2.5GY5/1 外：Hue 2.5GY4/0	1区7号溝最下層	胴部に凹線を施す
	11	弥生土器	脚付甕	口径 底径 9.3 器高	脚部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	1区7号溝下層№1	
	12	須恵器	坏	口径 16.2 底径 10.6 器高 6.3	約1/3	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 5Y7/2 外：Hue 5Y6/2	1区黒包含層	
	13	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	1区撹乱	刻書
	14	土師器	坏	口径 14.6 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	1区撹乱	内外面に赤色化粧土
	15	土師器	甕	口径 24.4 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR5/8	1区撹乱	内外面に赤色化粧土
11	16	土師器	坏	口径 底径 11.6 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ削り	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/3	2区10号溝東 32区2号溝	
	17	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR7/3 外：Hue 10YR7/3	2区10号溝西	刻書
	18	土師器	坏？	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 7.5YR7/4	2区10号溝 32区4号溝下	刻書
	19	土師器	甕	口径 24.6 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/4	2区10号溝 32区4号溝下 P8	内面一部にスス付着
	20	土師器	甕	口径 23.9 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 7.5YR6/6	2区10号溝 P1・15号ピット南東隅・18号溝東隅・包含層東・清掃	内外面にスス付着 №0036と同一個体
	21	土師器	甕	胴部径 24.8 底径 器高	胴部片	内：ナデ, 削り 外：ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR7/3 外：Hue 10YR6/3	2区10号溝 P1・15号ピット南東隅・18号溝東隅・包含層東	内外面にスス付着 №0037と同一個体
	22	須恵器	蓋	口径 15.0 底径 器高	1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y4/2 外：Hue 2.5Y3/1 2.5Y7/2	2区10号溝 32区2号溝	外面に自然釉
	23	須恵器	蓋	口径 9.4 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 10Y5/1 外：Hue 10Y5/1	2区10号溝西	内外面一部に自然釉
	24	須恵器	甕	口径 底径 器高	胴部片	内：ナデ, タタキ 外：ナデ, タタキ	内：Hue 7.5YR5/3 外：Hue N6/0	2区10号溝 P2	内外面に自然釉
	25	土師器	坏	口径 底径 10.1 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	2区18号溝	
	26	土師器	坏	口径 13.0 底径 9.8 器高 3.9	口縁～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/4	2区包含層（溝？）	底部内面に刻書 底部外面に粘土切り離し痕
	27	土師器	鉢？	口径 底径 18.0 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ, 削り	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 10YR7/4	2区清掃	底部内面に刻書
	28	須恵器	蓋	口径 16.3 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 2.5Y6/1	2区包含層東	
	29	須恵器	坏	口径 13.5 底径 10.8 器高 3.0	口縁～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue N5/0 外：Hue 7.5Y5/1	2区清掃	
	30	須恵器	碗	口径 10.0 底径 6.1 器高 3.6	口縁～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y5/1 外：Hue 2.5Y4/1	2区包含層東	貼付高台
	31	須恵器	壺	口径 底径 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 10Y4/1	2区包含層（東側）	

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
11	32	須恵器	甕	口径 底径 31.8 器高	口縁部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 5Y4/2	2区包含層（東端）	
	33	土師器	甕	口径 28.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	2区撹乱	内面一部にスス付着
	34	土師器	甕	口径 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 磨き 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR7/4	2区撹乱	
	35	土師器	甕	口径 24.0 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 磨き 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	2区包含層（東側）・撹乱	口縁部に穿孔を施す
	36	土師器	高坏	口径 底径 器高	坏部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	2区撹乱	底部内面に刻書（文字不明） 内外面に赤色化粧土
	37	須恵器	鉢	口径 20.0 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	2区撹乱	内面一部にスス付着
15	38	土師器	坏	口径 12.4 底径 9.5 器高 3.3	約1/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/4 外：Hue 5YR6/4	4区4号溝№10・№20・№26	内外面にスス付着
	39	土師器	坏	口径 14.6 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5Y2/1 外：Hue 5Y2/1	4区4号溝№7	内外面、割れ口にスス付着
	40	土師器	坏	口径 底径 13.0 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	4区4号溝ベルトの南西側	底部外面の作りが粗い
	41	土師器	坏	口径 16.9 底径 器高	口縁～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR7/6	4区4号溝北側（中央～北）下層・ベルトの北東側	口縁部に少しの歪み
	42	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/4	4区4号溝№16	底部内面に刻書
	43	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	4区4号溝ベルト	底部内面に刻書
	44	土師器	鉢	口径 底径 器高	胴部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 10YR7/2 外：Hue 10YR7/2	4区4号溝ベルトの南西側	外面に刻書
	45	土師器	鉢	口径 19.2 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR8/4	4区4号溝ベルトの南西側	内外面一部にスス付着
	46	土師器	長頸壺	口径 底径 器高	頸部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR5/8	4区4号溝ベルト・包含層③・④東部・清掃（撹乱）	内外面に赤色化粧土 外面一部にスス付着
	47	土師器	甑	口径 底径 13.2 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ, 削り	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	4区4号溝ベルトの南西側・32号ピット	底部に内外面両方向から18個の穿孔
	48	須恵器	蓋	口径 16.2 底径 器高	1/8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR7/2 外：Hue 7.5YR6/2	4区4号溝ベルトの南西側	
	49	須恵器	碗	口径 15.4 底径 10.0 器高 5.9	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 2.5Y7/1 外：Hue 2.5Y7/1	4区4号溝ベルトの北東側・ベルトの南西側・包含層④東部	内外面にスス付着
	50	須恵器	皿	口径 18.4 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y5/2 外：Hue 5Y5/2	4区4号溝ベルトの北東側	
	51	須恵器	高坏	基部径 4.0 底径 器高	脚部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 4/0 外：Hue 3/0	4区4号溝ベルトの北東側	
	52	須恵器	壺	胴部径 12.4 底径 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 10YR6/2 外：Hue 10YR3/2	4区4号溝ベルトの南西側・包含層④	外面に自然釉
	53	須恵器	蓋	口径 15.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5Y6/4 外：Hue 2.5Y6/3	4区1号土坑	
	54	須恵器	蓋	つまみ径 2.15 底径 器高	破片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y7/1 外：Hue 5Y7/1	4区21号ピット	
	55	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	4区包含層③	底部内面に刻書
	56	土師器	坏	口径 底径 9.0 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	4区包含層④	底部内面に刻書
	57	土師器	甑	口径 底径 器高	把手	内：ヘラ削り 外：ヘラ削り後ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/3	4区包含層撹乱	手づくね
	58	須恵器	蓋	口径 10.0 底径 器高	口縁部1/4	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 5/0 外：Hue 7.5Y5/1	4区包含層④	
	59	須恵器	碗	口径 13.5 底径 10.2 器高 3.95	約1/5	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5Y6/3 外：Hue 5Y5/2	4区包含層④	
	60	須恵器	碗	口径 11.2 底径 7.4 器高 4.4	約1/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y5/1	4区包含層②・③・④	外面一部に自然釉
	61	須恵器	碗	口径 14.0 底径 10.0 器高 5.5	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5Y6/1 外：Hue 5Y6/2	4区包含層 P1	
	62	須恵器	大型鉢？	口径 15.3 底径 器高	底部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 2.5Y6/2 外：Hue 2.5Y6/1	4区包含層	
17	63	土師器	坏	口径 12.4 底径 7.7 器高 2.9	1/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5YR6/6 外：Hue 2.5YR6/6	5区1号溝西・包含層（東側）	内外面に赤色化粧土

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
17	64	土師器	甕	口径 27.2 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り, ハケ目 外：工具による回転ナデ	内：Hue 10YR7/3 外：Hue 7.5YR7/4	5区3号溝西	内外面一部にスス付着
	65	須恵器	坏	口径 14.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 2.5Y6/1	5区3号溝西	
	66	須恵器	坏	口径 底径 10.3 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 10YR7/1 外：Hue 10YR7/1	5区3号溝ベルト2層	貼付高台
	67	須恵器	坏	口径 底径 9.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR7/4 外：Hue 5YR7/4	5区5号溝	底部内面に刻書「○井」
	68	古式土師器	甕	口径 16.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	5区5号溝	外面一部にスス付着
	69	古式土師器	高坏	口径 底径 器高	脚部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	5区5号溝	
	70	土師器	碗	口径 底径 12.0 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 2.5YR5/6 外：Hue 2.5YR5/6	5区清掃	内外面に赤色化粧土
	71	古式土師器	高坏	口径 底径 14.3 器高	脚部片	内：回転ナデ, ハケ目 外：回転ナデ, ナデ, 磨き	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 10YR7/4	5区包含層（西側）	
19	72	土師器	坏	口径 底径 10.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	10区3号竪穴建物床直 P3	
	73	土師器	小型甕	口径 14.5 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 7.5YR5/4 外：Hue 7.5YR5/4	10区3号竪穴建物 P1	
	74	土師器	坏	口径 12.9 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/6	10区西2号土坑	
	75	土師器	坏	口径 15.3 底径 12.0 器高 3.7	約4/5	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ削り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	10区2号土坑上層 P2	
	76	土師器	坏	口径 14.5 底径 9.4 器高 3.55	1/3	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	10区西2号土坑	
	77	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	10区西2号土坑	底部内面に刻書
	78	土師器	碗	口径 底径 8.7 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	10区西2号土坑	
	79	土師器	甕	口径 32.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/3 外：Hue 7.5YR7/4	10区西2号土坑	内外面一部にスス付着
	80	土師器	甕	口径 28.2 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/4	10区2号土坑底直 P1・底直 P3・南西壁・西2号土坑	
	81	須恵器	坏	口径 15.8 底径 12.5 器高 4.5	2/3	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ヘラ切り	内：Hue 5Y7/1 外：Hue 5Y7/1	10区西2号土坑	
	82	土師器	壺	口径 22.5 底径 器高	口縁～頸部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 5YR6/4 5YR7/6	2区撹乱（東側） 10区西2号土坑	頸部外面に刻書
	83	土製品	移動式竈	長さ 幅　5.5 厚さ 2.5	庇	内：指ナデ 外：指オサエ	内：Hue 7.5YR5/3 外：Hue 7.5YR5/2	10区2号土坑南西壁・西2号土坑	両面にスス付着
	84	土師器	坏	口径 14.2 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ハケ目, 磨き 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	10区西7号ピット	
	85	須恵器	坏	口径 11.3 底径 7.0 器高 2.85	約1/5	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5Y7/1 外：Hue 5Y7/1	10区西7号ピット	
	86	土師器	坏	口径 13.2 底径 9.0 器高 3.6	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR5/8 外：Hue 5YR5/6	10区 P2	内外面に赤色化粧土
	87	土師器	坏	口径 底径 8.8 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ヘラ切り	内：Hue 5YR7/6 外：Hue 5YR7/7	10区西包含層②	外面に赤色化粧土
	88	土師器	碗	口径 底径 7.8 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	10区西包含層②	
	89	土師器	坏？	口径 底径 器高	底部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	10区東包含層(調査区西側)	底部内面に刻書「枕○」
	90	土師器	甕	口径 底径 器高	頸部片	内：回転ナデ, 削り, 細い磨き 外：回転ナデ, 磨き	内：Hue 2.5YR5/4 外：Hue 2.5YR5/4	10区西包含層①	内外面に赤色化粧土 内面一部に剥離
	91	土師器	甕	口径 36.8 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	10区西包含層②	
	92	土師器	甕	口径 27.2 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR5/3 外：Hue 10YR4/2	10区包含層 P1	内外面大部分にスス付着
	93	須恵器	蓋	つまみ径　5.4 底径 器高	約2/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	10区東包含層壁	赤焼け
	94	須恵器	蓋	口径 16.2 底径 器高	約1/4	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5Y5/1 外：Hue 5Y5/1	10区西包含層②	

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
19	95	須恵器	蓋	口径 16.4 底径 器高	約1/6	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ削り	内：Hue 7.5Y6/1 外：Hue 7.5Y6/1	10区東包含層(調査区西側)	
22	96	土師器	坏	口径 13.0 底径 10.2 器高 3.8	約1/4	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/8 外：Hue 5YR6/8	11区2（27）号竪穴建物（包含層下）P13・包含層	内外面に赤色化粧土
	97	土師器	甕	口径 31.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	11区2（27）号竪穴建物（包含層下）P1	
	98	土師器	甕	口径 底径 器高	胴部片	内：削り 外：ハケ目, 磨き	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	11区2（27）号竪穴建物（包含層下）P10・清掃	外面一部にスス付着
	99	須恵器	蓋	口径 14.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue N6/0 外：Hue N6/0	11区2（27）号竪穴建物（包含層下）P11	外面に自然釉
	100	土師器	甑	口径 底径 器高	把手	内：ナデ, 指オサエ 外：ナデ, 削り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/4	11区8号ピット	
	101	土師器	碗	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	11区包含層上部	
	102	土師器	坏	口径 底径 8.8 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	11区包含層	底部外面に線刻 内外面に赤色化粧土
	103	土師器	甕	口径 26.0 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	11区包含層	
	104	土師器	甕	口径 29.0 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/3 外：Hue 7.5YR7/3	11区包含層	内外面一部にスス付着
	105	須恵器	蓋	口径 11.2 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y5/1 外：Hue 5Y4/1	11区包含層	
	106	須恵器	蓋	口径 底径 器高	つまみ部 ～天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y8/2 外：Hue 5Y8/1	11区包含層上部	
	107	須恵器	蓋	口径 16.0 底径 器高	1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y7/2 外：Hue 2.5Y7/1	11区包含層	
25	108	土師器	坏	口径 13.5 底径 9.0 器高 3.9	約1/6	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	12区2号硬化面床出し（2号硬化面周辺も含む）	
	109	須恵器	坏	口径 底径 9.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 2.5Y6/2	12区2号硬化面	
	110	土師器	碗	口径 高台径 9.6 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	12区2号硬化面 P1 A	
	111	土師器	碗	口径 14.2 底径 9.3 器高 6.0	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	12区2号硬化面 P1 B	
	112	須恵器	台付壺	口径 底径 器高	胴部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y6/1 外：Hue 5Y6/1	12区2号硬化面 P3	
	113	土師器	坏	口径 14.2 底径 10.2 器高 3.2	約1/6	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	12区3号土坑	
	114	土師器	坏	口径 底径 8.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 2.5YR6/8 外：Hue 2.5YR5/6	12区南壁4層（図中）（3号土坑）	内面に赤色化粧土 外面一部に黒変
	115	土師器	甕	胴部径 24.2 底径 器高	胴部片	内：ヘラ削り 外：工具による磨き	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/4	12区3号土坑・包含層・西半	外面にスス付着
	116	土師器	甕	口径 22.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	12区拡張区105号ピット	
	117	土師器	甕	口径 27.4 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR6/3 外：Hue 10YR5/3	12区包含層下部 P3	内外面一部にスス付着
	118	土師器	甕	口径 26.4 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	12区包含層下部 P2・下部 P5・西半	内外面一部にスス付着
	119	須恵器	坏	口径 12.8 底径 8.3 器高 3.5	ほぼ完形	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 2.5Y7/2 外：Hue 2.5Y7/2	12区包含層・下部 P7・西半	内外面一部にスス付着
	120	土師器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/4 外：Hue 5YR6/4	12区包含層	外面に線刻
	121	土師器	碗	口径 底径 10.2 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 5YR6/4	12区包含層（西半）	
	122	土師器	甕	口径 16.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	12区拡張区地山しみ	
	123	土師器	甑	口径 32.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/4	12区拡張区地山しみ	
	124	土師器	甕	口径 22.4 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	12区包含層	内外面に赤色化粧土
	125	土師器	移動式竈	口径 底径 器高	脚部片	内：ナデ, 削り 外：ナデ	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/6	12区包含層	脚底に調整痕
	126	須恵器	蓋	口径 14.0 底径 器高	約1/5	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR5/2 外：Hue 7.5YR5/2	12区黄色土（東半）	口縁部一部に自然釉

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
25	127	須恵器	坏	口径 12.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5Y6/1 外：Hue 7.5Y7/1	12区包含層	
	128	須恵器	坏	口径 底径 11.6 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y5/1	12区南壁（黄色土の下10～15cmピット9の上）	
	129	須恵器	鉢	口径 27.0 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR7/6	12区包含層	外面に3本の凹線
	130	須恵器	坏	口径 底径 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	12区撹乱	底部外面に刻書（文字不明）
27	131	土師器	坏	口径 底径 11.4 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	13区包含層（南）・包含層	底部内面に刻書「て」
	132	土師器	鉢	口径 底径 11.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ヘラ切りの上ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 5YR6/6	13区包含層 P1	外面に赤色化粧土
	133	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 10YR6/2 外：Hue 7.5YR7/4 10YR7/3	13区包含層	底部内面に刻書（文字不明）
	134	土師器	高坏？	口径 底径 7.8 器高	脚部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	13区撹乱	内外面一部にスス付着
	135	須恵器	蓋	口径 16.0 底径 器高	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 10YR8/4 外：Hue 10YR8/4	13区水銀	内面にスス付着
	136	須恵器	碗	口径 底径 11.8 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 2.5Y5/2 外：Hue 2.5Y6/2	13区包含層（南）	
31	137	須恵器	蓋	口径 13.8 底径 器高	約1/3	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y5/1	14区29号ピット・包含層	
	138	須恵器	鉢	口径 19.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y5/1	14区30号ピット・77号ピット	
	139	土師器	坏	口径 12.8 底径 8.0 器高 3.25	約2/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	14区91号ピット	内外面に赤色化粧土 内外面にスス付着
	140	土師器	坏	口径 10.2 底径 5.8 器高 3.65	約2/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ, 削り	内：Hue 7.5YR5/8 外：Hue 7.5YR5/8	14区包含層 P6・P7	内外面一部にスス付着
	141	土師器	坏蓋	口径 底径 器高	胴部片	内：回転ナデ 外：ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 2.5YR4/1	14区包含層	内面に刻書「寺」
	142	土師器	坏	口径 底径 10.6 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR6/3 外：Hue 10YR4/2	14区包含層	底部内面に刻書（文字不明）
	143	土師器	坏	口径 底径 9.0 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	14区包含層	底部外面に墨書（文字不明） 内外面に赤色化粧土
	144	須恵器	蓋	口径 天井径 7.8 器高	天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y5/1 外：Hue 2.5Y5/1	14区包含層	天井部にヘラ記号
	145	須恵器	坏	口径 底径 8.4 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y5/1	14区包含層	
	146	須恵器	碗	口径 底径 7.7 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR3/1 外：Hue N6/0	14区包含層	内外面に自然釉
	147	須恵器	甕	口径 29.1 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10Y4/1 外：Hue 10Y3/1	14区包含層 P2	内外面一部に自然釉
	148	土師器	甕	口径 20.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR6/3 外：Hue 5YR6/4	15区西26号竪穴建物 P2 34区焼土	内外面にスス付着
	149	古式土師器	甕	口径 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 10YR5/1 外：Hue 10YR6/4	15区1号ピット（南）	
	150	土師器	甑	口径 30.0 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	15区25号竪穴建物 P2・P3・P4・P5・西包含層・東側	外面一部にスス付着
	151	土師器	坏	口径 13.3 底径 9.0 器高 2.4	口縁～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	15区42号土器集中部 P1・山くずし	底部外面に回転糸切り離し痕
	152	須恵器	坏	口径 底径 10.4 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5Y6/2 外：Hue 5Y6/1	15区東6号ピット	貼付高台
	153	須恵器	坏	口径 底径 9.9 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5Y6/1 外：Hue 5Y5/1	15区東7号ピット	外面一部に自然釉 貼付高台
	154	土師器	坏	口径 15.5 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 磨き 外：回転ナデ, 削り, 磨き	内：Hue 2.5YR4/8 外：Hue 2.5YR4/8	15区包含層	赤色化粧土
	155	土師器	碗	口径 底径 11.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	15区西包含層	赤色化粧土 貼付高台
	156	黒色土器	碗	口径 底径 6.6 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR4/1 外：Hue 7.5YR6/6	15区西包含層 P3	外面一部にスス付着
	157	須恵器	蓋	つまみ径　6.0 底径 器高	つまみ部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR6/2 外：Hue 7.5YR5/2	15区包含層	
	158	須恵器	碗	口径 底径 7.8 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5Y4/2 外：Hue N5/0	15区西包含層 P1	外面に自然釉 貼付高台

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
31	159	須恵器	坏	口径 底径 8.5 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue N5/0 外：Hue N5/0	15区山くずし	貼付高台
	160	須恵器	碗	口径 12.9 底径 7.0 器高 5.6	約1/5	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5Y6/2 外：Hue 5Y6/2	15区西包含層	貼付高台
	161	須恵器	坏	口径 底径 6.6 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 2.5Y6/2 外：Hue 2.5Y5/1	15区西包含層東側	底部にヘラ記号
	162	須恵器	高坏	口径 底径 9.1 器高	脚部	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue N6/0 外：Hue N6/0	15区西26号竪穴建物 P4・西包含層最下層・撹乱	内外面一部に自然釉
33	163	土師器	坏	口径 13.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 磨き 外：回転ナデ, 削り, 磨き	内：Hue 5Y5/6 外：Hue 2.5YR5/6	16区包含層	内外面一部にスス付着
	164	土師器	坏	口径 底径 8.2 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 5YR6/6	16区包含層	
	165	土師器	甕	口径 18.6 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 5YR5/4	16区包含層	内外面に赤色化粧土
	166	土師器	甕	口径 24.2 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	16区包含層	
	167	須恵器	甕	口径 21.9 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, タタキ	内：Hue 10Y3/1 外：Hue 10Y3/1	16区包含層 P1	口縁頸部に歪みあり
	168	須恵器	甕	口径 底径 器高	頸部～肩部片	内：回転ナデ, 当て具痕 外：回転ナデ, タタキ	内：Hue 5Y4/1 外：Hue 5Y4/1	16区 P1・P2	外面に灰釉付着
36	169	土師器	坏	口径 底径 10.1 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/3 外：Hue 7.5YR7/3	17区1号溝	底部内面に刻書「軍○」
	170	土師器	坏	口径 15.7 底径 10.0 器高 3.2	約1/6	内：回転ナデ, 暗文 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 5YR5/6 外：Hue 7.5YR6/6	17区1号溝	内面一部にスス付着
	171	土師器	鉢？	口径 底径 15.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	18区1号溝	
	172	土師器	碗	口径 底径 5.3 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ削り	内：Hue 5YR3/2 外：Hue 7.5YR6/4	18区1号溝	削り出し高台
	173	土師器	甕	口径 22.3 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	17区1号溝	
	174	古式土師器	甕	口径 18.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ハケ目 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR6/3 外：Hue 10YR5/2	17区1号溝南半	
	175	ミニチュア土器	土鈴	胴部径 4.0 底径 器高	破片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	17区1号溝上面	内面に絞り痕
	176	須恵器	蓋	口径 16.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y7/1 外：Hue 2.5Y7/1	18区1号溝	
	177	須恵器	高坏	口径 底径 8.7 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	18区1号溝	
	178	須恵器	長頸壺	口径 17.8 底径 器高	肩部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/3 外：Hue 2.5Y6/1	17区1号溝	外面に自然釉とヘラ描き
	179	土師器	坏	口径 底径 9.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 5YR6/6	17区包含層撹乱	内外面に赤色化粧土
	180	土師器	甕	口径 28.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/3 外：Hue 7.5YR6/4	17区包含層撹乱	
38	181	土師器	坏	口径 底径 7.6 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	19区1号溝広	赤色化粧土
	182	陶器	碗	口径 底径 5.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/2 外：Hue 2.5Y6/2	19区1号溝広	削り出し高台 施釉
	183	黒色土器	坏	口径 底径 10.3 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 2.5YR3/1	19区包含層	
	184	土師器	高坏	口径 底径 8.0 器高	脚部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 5YR7/6	19区撹乱	
41	185	土師器	坏	口径 底径 12.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	20区8号竪穴建物床下地山	
	186	土師器	坏	口径 底径 10.4 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	20区8号竪穴建物№8	
	187	土師器	碗	口径 底径 7.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR7/6 外：Hue 5YR7/6	20区8号竪穴建物	内外面に赤色化粧土 貼付高台
	188	土師器	鉢	口径 22.3 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 削り 外：ナデ	内：Hue 7.5YR7/3 外：Hue 7.5YR7/4	20区8号竪穴建物№5	
	189	土師器	鍋	口径 28.8 底径 12.0 器高 10.9	1/2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR6/4	20区1号溝・8号竪穴建物・№1・№6・竈・竈ベルト	内外面にスス付着
	190	須恵器	坏	口径 12.8 底径 8.4 器高 4.15	約3/4	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 2.5Y7/2 外：Hue 2.5Y7/2	20区8号竪穴建物№10	

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
41	191	須恵器	碗	口径 底径 11.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5Y7/1 外：Hue 7.5Y5/1	20区8号竪穴建物ベルト	貼付高台
	192	須恵器	碗	口径 6.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue N5/0 外：Hue N5/0	20区8号竪穴建物	口縁部いびつ
	193	土師器	碗	口径 底径 8.6 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	20区1号溝	内外面に赤色化粧土 貼付高台
	194	須恵器	碗	口径 底径 8.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5GY4/1 外：Hue N5/0	20区1号溝	貼付高台
	195	土師器	甕	口径 24.3 底径 器高	口縁部	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目？	内：Hue 5YR5/6 外：Hue 5YR5/7	20区5号溝	外面やや黒変
	196	土師器	甑	口径 底径 器高	把手	内：ナデ 外：ナデ, 削り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	20区5号溝	
	197	土師器	甕	口径 28.1 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	20区包含層(6号ピット上)	内外面一部にスス付着
	198	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：ナデ	内：Hue 5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	20区包含層（住付近）	底部内面に竹管？押印
	199	須恵器	蓋	つまみ径 2.55 底径 器高	つまみ部 ～天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/4	20区包含層（住付近）	赤焼け
	200	土師器	坏	口径 14.4 底径 11.0 器高 2.9	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/4	20区撹乱	底部内面に竹管？押印
46	201	青磁 （龍泉）	碗	口径 底径 器高	破片	内：施釉 外：施釉	内：Hue 2.5GY6/1 外：Hue 2.5GY6/1	30区1号溝	太宰府Ⅱ類12C 中～後半・13C 初 内外面に貫入 外面体部に蓮弁文
	202	土師器	坏	口径 底径 8.6 器高	底部片	内：回転ナデ, 暗文 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	30区井手遺構（2号溝）ベルト	内外面に赤色化粧土
	203	弥生土器？	甕棺？	口径 底径 器高	胴部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 5YR6/4	1区撹乱・砂・ 30区井手遺構（2号溝）・ベルト	コ字形凸帯を一条貼付する
	204	弥生土器？	甕棺？	口径 底径 16.6 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	30区井手遺構（2号溝）ベルト	A との同一個体
	205	土師器	坏	口径 底径 9.6 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 10YR6/3 外：Hue 7YR5/8	30区4号溝	内外面に赤色化粧土
	206	須恵器	坏	口径 底径 7.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5Y6/2 外：Hue 7.5Y6/2	30区東黄（茶）5	
	207	土師器	坏	口径 底径 7.4 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ, 暗文 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR6/8 外：Hue 7.5YR6/8	30区撹乱	内外面に赤色化粧土
	208	土師器	坏	口径 底径 9.8 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	30区撹乱	内外面に赤色化粧土
51	209	土師器	坏	口径 12.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	32区2号溝	
	210	土師器	坏	口径 底径 器高	胴部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 5YR6/6	32区2号溝	胴部外面に墨書
	211	土師器	坏	口径 15.0 底径 10.3 器高 4.7	口縁～底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	2区10号溝 32区2号溝・P2	内面底部に刻書「馬」？「子」？
	212	土師器	坏	口径 13.8 底径 8.4 器高 3.1	約1/4	内：回転ナデ, 暗文 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り, 暗文	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	32区2号溝壁中・P7	内外面に赤色化粧土
	213	土師器	高坏	基部径 4.0 底径 器高	坏底部～ 脚部片	内：ナデ, 削り 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 5YR5/6 外：Hue 5YR5/6	32区2号溝	
	214	土師器	甕	口径 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR5/3 外：Hue 10YR5/4	32区2号溝	内外面一部にスス付着
	215	須恵器	蓋	口径 14.4 底径 器高 2.7	1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5Y6/1 外：Hue 7.5Y5/1	32区2号溝	
	216	須恵器	蓋	口径 底径 器高	破片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y4/2 外：Hue 10YR5/1	32区2号溝底（4号溝上部）	外面に線刻
	217	須恵器	甕	口径 28.6 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, タタキ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	32区2号溝壁中	
	218	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR7/3 外：Hue 7.5YR7/3	32区3号溝上	底部外面に線刻
	219	須恵器	坏	口径 10.7 底径 6.2 器高 3.2	1/2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y6/1 外：Hue 5Y6/1	32区3号溝上面・上	外面に灰釉付着 貼付高台
	220	土師器	灯明皿	口径 10.0 底径 5.8 器高 3.0	4/5	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り	内：Hue 10YR7/2 外：Hue 10YR7/2	32区3号溝上面・東壁	作りが粗雑で傾きあり
	221	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 5YR6/4	32区3号溝一括	底部内面に線刻 底部外面に赤色化粧土
	222	土師器	坏	口径 底径 12.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR8/4 外：Hue 10YR8/2	32区3号溝一括	底部内面に刻書「○○寺」

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
51	223	土師器	坏	口径 13.8 底径 8.0 器高 2.9	約1/2	内：回転ナデ, 暗文 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り, 暗文	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	32区3号溝一括	内外面に赤色化粧土 底部内面にスス付着
	224	土師器	皿	口径 15.9 底径 10.6 器高 1.85	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 磨き 外：回転ナデ, 磨き	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	32区3号溝一括	
	225	土師器	鉢	口径 17.0 底径 器高 9.9	約1/6	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, 磨き	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	32区3号溝一括・5号土坑・P16	底部外面一部にスス付着
	226	土師器	甕	口径 26.1 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	32区3号溝一括	内外面にスス付着
	227	須恵器	蓋	口径 16.0 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue N5/0 外：Hue N5/0	32区3号溝一括	粘土内に気泡 歪みあり
	228	土師器	坏	口径 13.0 底径 10.0 器高 4.85	1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 5YR7/6	32区4号溝上 P1・下	外面のみ赤色化粧土 内外面にスス付着
	229	土師器	坏	口径 14.6 底径 9.6 器高 3.5	口縁部片 ～底部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	32区4号溝下	
	230	土師器	鉢	口径 底径 10.02 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR8/6 外：Hue 5YR7/6	32区4号溝上（西）・下	底部外面一部に赤色化粧土
	231	土師器	坏	口径 13.2 底径 9.0 器高 3.6	約2/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR5/6 外：Hue 7.5YR6/6	32区4号溝下 P7	内外面に赤色化粧土 内外面にスス付着
	232	土師器	坏	口径 13.0 底径 9.0 器高 3.05	約1/2	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	32区4号溝下 P9・下	内外面に赤色化粧土 内外面にスス付着 内外面一部に剥離痕
	233	土師器	坏	口径 底径 10.0 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	32区4号溝下	「枕」のヘラ書
	234	土師器	坏	口径 18.0 底径 器高	約1/6	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	32区4号溝上 P6・下	
	235	須恵器	蓋	口径 14.8 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 2.5Y6/1	32区4号溝下	
	236	須恵器	蓋	口径 14.8 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 2.5Y6/1	32区4号溝下	
	237	須恵器	蓋	口径 14.0 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5Y6/1 外：Hue 7.5Y6/1	32区4号溝下	
	238	須恵器	蓋	口径 15.5 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5Y5/1 外：Hue 7.5Y5/1	32区4号溝下	
	239	須恵器	坏	口径 13.3 底径 9.0 器高 2.8	1/2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	32区4号溝上 P4	底部外面に墨書「桑原」？ 内外面に赤色化粧土
	240	須恵器	皿	口径 15.4 底径 12.8 器高 2.2	1/2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y6/1 外：Hue 2.5Y6/1	32区4号溝上 P7・下	
	241	須恵器	鉢	口径 底径 11.7 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ削り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 5YR7/4	32区4号溝下 P10	
	242	土師器	甕	口径 19.0 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR7/3 外：Hue 10YR6/3	32区4号溝上東	
	243	土師器	坏	口径 13.8 底径 9.0 器高 4.9	完形	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	32区4号溝上東・下 P1・6号溝	内外面に赤色化粧土 底部外面全面にスス付着
	244	土師器	坏	口径 13.1 底径 8.9 器高 3.9	3/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	32区4号溝上 P3・6号溝・東壁	底部内面に刻書「枕本」
	245	土師器	坏	口径 13.6 底径 8.0 器高 3.55	口縁～底部片	内：回転ヘラ磨き 外：回転ヘラ磨き	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 2.5YR5/6	32区東壁	内外面に赤色化粧土
	246	土師器	甕	口径 17.9 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 10YR7/3 外：Hue 10YR7/3	32区東壁	
52	247	土師器	甕	口径 27.75 底径 器高	約2/3	内：回転ナデ, 削り, ハケ目 外：回転ナデ, ハケ目	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	32区4号溝上東・東壁	内外面一部にスス付着
	248	土師器	甕	口径 底径 器高	胴部～底部片	内：削り 外：ハケ目	内：Hue 10YR6/3 外：Hue 10YR4/1 10YR6/3	32区東壁	
	249	須恵器	蓋	口径 15.2 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y6/1 外：Hue 5Y6/1	32区東壁	
	250	土師器	坏	口径 10.8 底径 7.4 器高 3.2	3/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 2.5YR5/6 外：Hue 2.5YR5/6	32区6号溝 P2	赤色化粧土 内外面にスス付着
	251	須恵器	蓋	口径 14.8 底径 器高	口縁～ 天井部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y7/2 外：Hue 2.5Y7/2	32区6号溝 P3	
	252	土師器	坏	口径 13.7 底径 9.4 器高 3.4	約1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/4 外：Hue 5YR6/6	32区6号溝	内外面に赤色化粧土 内外面にスス付着
	253	須恵器	碗	口径 底径 8.0 器高	胴部～底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR6/1 外：Hue 5Y3/1 7.5YR6/1	32区6号溝	
	254	土師器	甕	口径 31.7 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	32区12号竪穴建物 P1	

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
52	255	土師器	坏	口径 14.0 底径 10.8 器高 3.85	口縁1/2～底部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR8/4 外：Hue 7.5YR8/4	32区 P14・P15	底部内面に竹管？押印
	256	須恵器	坏	口径 底径 10.8 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5Y5/1 外：Hue N4/0	32区黄色土	
	257	須恵器	坏	口径 8.6 底径 5.2 器高 3.4	約2/3	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 削り, 回転ヘラ切り	内：Hue 5Y6/1 外：Hue 5Y6/1	32区 P9・東壁	
54	258	土師器	坏	口径 15.3 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ, 磨き 外：回転ナデ, 磨き	内：Hue 5YR5/6 外：Hue 5YR5/6	35区11号ピット	内外面に赤色化粧土
	259	土師器	甕	口径 14.0 底径 器高	口縁～頸部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR5/3 外：Hue 7.5YR5/3	35区包含層（拡張部）	
	260	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR5/4 外：Hue 7.5YR3/1 7.5YR5/4	35区包含層（拡張部）	中心部に内面から外面方向への穿孔あり
	261	土師器	碗	口径 底径 7.3 器高	底部片	内：ナデ, 磨き 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 10Y2/1 外：Hue 10Y2/1	35区包含層（拡張部）	内面に磨き
55	262	土師器	甕	口径 22.3 底径 器高	口縁～頸部片	内：回転ナデ, 削り 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR5/4 外：Hue 7.5YR5/4	33区溝南半	
	263	土師器	坏	口径 底径 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	HJH1321廃土	底部外面に刻書「枕本寺」
	264	土師器	坏	口径 底径 10.0 器高	底部片	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, ナデ	内：Hue 7.5YR7/3 外：Hue 7.5YR7/3	HJH1321廃土	底部内面に刻書「〇本」
	265	磁器	皿	口径 9.45 底径 5.45 器高 2.1	完形	内：回転ナデ, 施釉 外：回転ナデ, 施釉	内：Hue 9/0 外：Hue 9/0	HJH1321・1325廃土	内面染付 削り出し高台
	266	瓦	丸瓦	長さ 9.0 幅　11.3 厚さ 1.9	破片	表：ナデ, タタキ 裏：布目	表：Hue 7.5YR6/4 裏：Hue 7.5YR6/4	1区3号溝Ⅱ－1層	布目瓦 桶巻造り
	267	瓦	平瓦	長さ 5.85 幅　4.75 厚さ 1.45	破片	表：布目 裏：ナデ, タタキ	表：Hue 7.5YR7/3 裏：Hue 10YR7/2	2区21号溝ベルト南側	布目瓦 桶巻き作り
	268	瓦	丸瓦	長さ 3.2 幅　3.9 厚さ 1.5	破片	表：ナデ, タタキ 裏：布目	表：Hue 10YR6/3 裏：Hue 7.5YR6/4	11区黄色土（古代上）	布目瓦 桶巻き作り
	269	瓦	丸瓦	長さ 4.6 幅　6.9 厚さ 2.1	破片	表：ナデ, タタキ 裏：布目	表：Hue 10YR6/1 裏：Hue 10YR6/3	12区包含層（西半）	布目瓦 桶巻き作り
	270	瓦	平瓦	長さ 4.5 幅　3.3 厚さ 1.75	破片	表：布目 裏：ナデ, 縄目	表：Hue 2.5Y7/1 裏：Hue 2.5Y7/2	12区包含層	
	271	瓦	丸瓦	長さ 7.0 幅　8.3 厚さ 1.8	破片	表：ナデ 裏：布目	表：Hue 2.5Y6/2 裏：Hue 2.5Y6/1	15区西包含層 P9	布目瓦
	272	瓦	丸瓦	長さ 12.15 幅　4.1 厚さ 19.5	破片	表：ナデ, タタキ 裏：布目	表：Hue 10YR6/3 裏：Hue 10YR6/2	15区西包含層 P3	布目瓦 桶巻き作り
	273	瓦	丸瓦	長さ 3.6 幅　3.0 厚さ 17.5	破片	表：ナデ, タタキ 裏：布目	表：Hue 7.5YR7/4 裏：Hue 7.5YR7/4	15区包含層	布目瓦
	274	瓦	丸瓦	長さ 4.0 幅　6.3 厚さ 1.6	破片	表：ナデ, タタキ 裏：布目	表：Hue 2.5Y6/3 裏：Hue 2.5Y7/2	17区1号溝	布目瓦
	275	瓦	平瓦	長さ 7.5 幅　6.1 厚さ 1.6	破片	表：布目 裏：ナデ, タタキ	表：Hue 7.5YR7/3 裏：Hue 7.5YR7/3	17区1号溝南半	布目瓦 桶巻き作り
	276	瓦	平瓦	長さ 7.75 幅　9.3 厚さ 2.6	破片	表：ナデ 裏：縄目	表：Hue 7.5YR6/4 裏：Hue 7.5YR6/4	18区1号溝	外面に縄目文
	277	瓦	丸瓦	長さ 6.5 幅　5.0 厚さ 1.5	破片	表：タタキ 裏：布目	表：Hue 2.5Y5/1 裏：Hue 2.5Y6/2	32区3号溝一括（6・7号溝混入の可能性）	布目瓦
56	278	鉄器	鉄釘？	長さ 7.4 幅　0.45 厚さ 0.45		内： 外：	内：Hue 外：Hue	4区鉄1	重量7.2g
	279	鉄器	刀子	長さ 8.7 幅　1.1 厚さ 0.25	先端と基部一部欠損	内： 外：	内：Hue 外：Hue	10区東側包含層調査区西側	重量8.5g
	280	鉄器	刀子	長さ 6.3 幅　0.5 厚さ 0.5		内： 外：	内：Hue 外：Hue	12区包含層	重量18.2g
	281	鉄器	刀子	長さ 4.6 幅　1.2 厚さ 0.4	刃部の一部	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西22号ピット	重量5.9g
	282	鉄器	刀子	長さ 4.6 幅　0.11 厚さ 0.35	1/3	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層Ⅰ－1	重量3.9g
	283	鉄器	不明	長さ 3.8 幅　0.3 厚さ 0.3	破片	内： 外：	内：Hue 外：Hue	17区1号溝肩鉄№1	重量2.5g 三分の二錆で器種不明
	284	鉄器	刀子	長さ 2.5 幅　0.6 厚さ 0.4	基部	内： 外：	内：Hue 外：Hue	20区1号溝	重量4.2g
	285	鉄器	不明	長さ 4.7 幅　0.4 厚さ 0.35		内： 外：	内：Hue 外：Hue	20区1号溝	重量2.6g 歪みあり
57	286	土製品	紡錘車	長さ 5.25 幅　2.7 厚さ 0.95	約1/2	内： 外：	内：Hue 5YR7/6 外：Hue 5YR7/6	10区西包含層②	重量12.8g

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
57	287	石製品	紡錘車	長さ 3.7 幅　2.05 厚さ 0.5	約1/2	内： 外：	内：Hue 2.5Y5/2 外：Hue 2.5Y5/2	11区包含層	重量4.2g
	288	土製品	紡錘車	長さ 6.0 幅　5.8 厚さ 0.9	完形	内： 外：	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR7/4	15区東包含層（16号ピット縁）	重量30.8g 土器片再利用
	289	土製品	泥面子	長さ 2.8 幅　2.1 厚さ 0.6	完形	内： 外：	内：Hue 5YR6/4 外：Hue 5YR6/4	10区西包含層①	重量2.1 g 裏面指紋
	290	磁器	破片面子	長径 2.15 短径 2.1 厚さ 0.3	完形	内： 外：	内：Hue N9/0 外：Hue 7.5Y8/0	12区包含層	重量2.1g 表裏面施釉 磁器破片転用
	291	土製品	土錘	長さ 3.75 幅　1.65 厚さ 1.55	完形	内： 外：ナデ	内：Hue 外：Hue 5YR6/6	12区黄色土（東半）	重量8.8g 外面に赤色化粧土
	292	土製品	土錘	長さ 4.3 幅　1.15 厚さ 1.1	完形	内： 外：ナデ	内：Hue 外：Hue 2.5YR6/2	20区包含層	重量4.3g 外面にスス付着
	293	土製品	ふいご羽口	長さ 4.7 幅　5.0 厚さ 1.9	破片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 2.5Y7/2 外：Hue 2.5Y6/2	11区2（27）号竪穴建物（包含層下）S1	先端部にスス付着
58	294	縄文土器	浅鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR4/1 外：Hue 10YR6/3	4区包含層②	御領式 外面に沈線2本
	295	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 条痕	内：Hue 7.5YR5/6 外：Hue 7.5YR5/6	4区4号溝ベルトの北東側	後期末葉～晩期初頭
	296	縄文土器	深鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ	内：Hue 2.5Y5/3 外：Hue 2.5Y6/4	4区4号溝ベルトの北東側	内外面一部にスス付着 外面に刻目突帯文 外面に沈線
	297	縄文土器	鉢	口径 底径 4.8 器高	底部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 7.5YR3/1 外：Hue 7.5YR5/6	10区西包含層③	後期末葉～晩期初頭 黒色磨研 外面一部にスス付着
	298	縄文土器	浅鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR5/2 外：Hue 10YR5/2	11区包含層	天城式 外面に沈線
	299	縄文土器	深鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/4	12区1号竪穴建物 P1・拡張部包含層・包含層	天城式 外面に凹線2本
	300	縄文土器	浅鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 7.5Y6/6 外：Hue 7.5Y6/6	13区包含層	古閑式
	301	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	14区包含層	晩期初頭 口縁部に斜位の沈線文
	302	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR4/1 外：Hue 10YR4/1	14区包含層	口唇部に刺突文
	303	縄文土器	深鉢	口径 底径 器高	胴部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR6/3 外：Hue 10YR5/4	14区包含層・撹乱	後期末葉～晩期初頭 内外面一部にスス付着
	304	縄文土器	鉢	口径 31.4 底径 器高	口縁～胴部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR3/1 外：Hue 10YR5/6	15区東15号ピット・東包含層	後期末葉～晩期初頭 内面一部にスス付着 外面にスス付着
	305	縄文土器	深鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR5/2	19区1号溝広	天城式
	306	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR6/2 外：Hue 10YR6/4	37区撹乱	後期末葉～晩期初頭
59	307	石器	不明	長さ 8.45 幅　5.05 厚さ 2.0	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	2区撹乱	重量26.0g 軽石
	308	石器	磨石	長さ 19.45 幅　7.5 厚さ 6.6	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	11区2（27）号竪穴建物包含層 S2	重量1382g 安山岩
	309	石器	不明	長さ 11.9 幅　9.0 厚さ 2.0	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	16区包含層	重量271g 安山岩
	310	石器	磨石	長さ 18.7 幅　5.9 厚さ 6.5	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	12区2号硬化面 S1	重量1339g 安山岩
	311	石器	砥石	長さ 8.15 幅　5.0 厚さ 5.05	破片	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S15	重量248g 砂岩
	312	石器	敲石	長さ 6.8 幅　11.0 厚さ 5.65	破片	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S7	重量393g 安山岩
	313	石器	砥石	長さ 7.8 幅　8.4 厚さ 6.4	破片	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S1	重量532g 砂岩
	314	石器	砥石	長さ 4.4 幅　2.6 厚さ 2.0	1/2以下	内： 外：	内：Hue 外：Hue	17区1号溝	重量42.6g 天草砥石 5面に使用痕あり
	346	石器	磨石	長さ 9.1 幅　8.5 厚さ 6.2	一部欠損	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区42号土器集中部 S3	重量713g，安山岩 円形で全体に4カ所磨痕あり
	347	石器	磨石？	長さ 9.0 幅　8.4 厚さ 2.3	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S5	重量212g，安山岩 ほぼ円形 扁平で表・裏面に使用痕か？
	348	石器	磨石	長さ 15.4 幅　9.5 厚さ 8.5	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S19	重量1784g，安山岩 長円形で2面が扁平 すり面あり
	349	石器	磨石	長さ 18.7 幅　11.9 厚さ 7.6	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S22	重量1976g，安山岩 一面が扁平 すり面あり

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
	350	石器	磨石	長さ 14.6 幅　7.5 厚さ 7.65	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S25	重量1226g 表・裏面扁平 すり面あり
	351	石器	磨石	長さ 18.0 幅　9.0 厚さ 8.4	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	15区西包含層 S26	重量2041g，安山岩 一面が著しく扁平 すり面あり
	352	石器	磨石	長さ 15.9 幅　8.8 厚さ 5.5	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	16区 S1	重量1084g，安山岩 長形で2面が扁平 すり面あり
	353	石器	磨石	長さ 10.3 幅　9.9 厚さ 3.0	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	20区8号竪穴建物№7	重量548g，安山岩 扁平な形状，表・裏・側面全体に顕著な磨痕あり すり面あり
	354	石器	磨石	長さ 9.8 幅　6.6 厚さ 3.6	一部欠損	内： 外：	内：Hue 外：Hue	32区2号溝	重量369g，安山岩 やや扁平な長形 3面にすり面あり
	355	石器	磨石	長さ 17.6 幅　9.3 厚さ 4.1	ほぼ完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	32区4号溝上 S1	重量957g，安山岩 長形 2面が扁平ですり面あり
	356	石器	台石	長さ 8.5 幅　8.8 厚さ 6.7	破片	内： 外：	内：Hue 外：Hue	32区4号溝下 S1	重量421g，安山岩 残存部の上部と側面の扁平部に使用面あり
	357	石器	磨石？	長さ 9.7 幅　7.5 厚さ 2.8	破片	内： 外：	内：Hue 外：Hue	32区包含層（2･3号溝上面南半）	重量154g，安山岩 扁平な長形 欠損の為使用面不明

表４　1322調査地点出土遺物一覧表

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
61	315	須恵器	甕	口径 18.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y5/1 外：Hue 5Y5/1	37区上層	
	316	縄文土器	鉢	口径 底径 7.4 器高	底部片	内：ナデ，磨き 外：ナデ，磨き	内：Hue 2.5Y6/3 外：Hue 2.5Y7/4	37区下層（地上5）	後期末葉～晩期初頭 内外面一部にスス付着

表５　1325調査地点出土遺物一覧表

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
63	317	土師器	坏	口径 14.9 底径 10.0 器高 3.3	1/4	内：回転ナデ，ナデ 外：回転ナデ，ナデ，削り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	6区1号ピット	内外面に赤色化粧土
	318	須恵器	蓋	口径 11.8 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y4/1 外：Hue 5Y4/1	6区1号ピット	外面に自然釉あり
65	319	須恵器	蓋	口径 14.6 底径 器高	口縁部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 2.5Y7/4 外：Hue 2.5Y6/1	17区包含層	
	320	須恵器	坏	口径 底径 9.0 器高	底部片	内：回転ナデ，ナデ 外：回転ナデ，ナデ	内：Hue 2.5Y7/3 外：Hue 2.5Y7/1	17区包含層	
	321	須恵器	鉢	口径 底径 10.8 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5YR6/4 外：Hue 7YR5/2	17区包含層	内面赤焼け
68	322	土師器	坏	口径 14.4 底径 8.0 器高 5.1	1/5	内：回転ナデ 外：回転ナデ，削り	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 5YR7/6	23区5号溝・P2	
	323	土師器	高坏	口径 底径 10.8 器高	脚部4/5	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/6 外：Hue 7.5YR7/6	23区 P1	
	324	土師器	坏	口径 底径 5.7 器高	底部片	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 7.5YR7/4 外：Hue 7.5YR6/6	23区包含層	
	325	土師器	碗	口径 底径 6.3 器高 2.9	底部片	内：回転ナデ，ハケ目 外：回転ナデ，削り	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/4	24区包含層初5	貼付高台
	326	須恵器	坏	口径 底径 7.8 器高	底部片	内：回転ナデ，ナデ 外：回転ナデ，回転ヘラ切り	内：Hue 5Y6/2 外：Hue 5Y7/2	24区 P3	
70	327	土師器	坏	口径 14.76 底径 9.0 器高 2.55	約1/8	内：回転ナデ 外：回転ナデ，回転ヘラ切り	内：Hue 2.5YR5/6 外：Hue 2.5YR5/6	25区1号土坑	内外面一部にスス付着 赤色化粧土
	328	土師器	坏	口径 底径 8.0 器高	約1/6	内：回転ナデ 外：回転ナデ，ナデ	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	25区包含層	
	329	土師器	碗	口径 底径 6.2 器高	底部片	内：回転ナデ，ナデ 外：回転ナデ，削り	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 10YR6/4	25区包含層	
	330	土師器	碗	口径 底径 8.8 器高	底部片	内：回転ナデ，ナデ 外：回転ナデ，ナデ	内：Hue 10YR7/4 外：Hue 10YR7/4	25区包含層	赤色化粧土
	331	土師器	皿	口径 底径 器高	底部片	内：ナデ，磨き 外：ナデ，削り	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR7/4	24区 P1（2） 25区 P2・P3・P4・②焼土下	内面一部にスス付着
	332	土師器	甑	口径 31.5 底径 器高	口縁～胴部片	内：回転ナデ，削り 外：回転ナデ，ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	25区 P7・包含層	
	333	須恵器	蓋	口径 16.1 底径 器高	約1/6	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue 5Y7/2 外：Hue 5Y7/2	25区 P2	

図	番号	遺　物	種類(器種)	法量（cm）	残　存　率	特　　徴	色　　調	出土遺構	備　考
71	334	土師器	坏	口径 12.0 底径 7.6 器高 3.0	1/4	内：回転ナデ, ナデ 外：回転ナデ, 回転ヘラ切り	内：Hue 5YR6/6 外：Hue 5YR6/6	21区包含層	赤色化粧土
	335	土製品	泥人形	長さ 4.1 幅　1.5 厚さ 1.8	頭部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 7.5YR6/6 外：Hue 7.5YR6/6	14区黄色土	
	336	銅製品	不明	長さ 1.9 幅　1.8 厚さ 0.08	留め具のみ	内： 外：	内：Hue 外：Hue	17区1号溝内(底から60㎝)	重量0.7g 緑青に覆われる
	337	鉄製品	鉄釘	長さ 10.8 幅　0.55 厚さ 0.35		内： 外：	内：Hue 外：Hue	17区1号溝（大溝）	重量11.0g 頭部は片方向
	338	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ 外：ナデ, 磨き	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/3	17区包含層	古閑式 外面一部にスス付着 外面に沈線文
	339	縄文土器	鉢	口径 底径 9.0 器高	胴部～底部片	内：磨き 外：ナデ, 磨き, 条痕	内：Hue 2.5Y6/3 外：Hue 2.5Y4/1 10YR5/3	17区包含層	後期末葉～晩期初頭 内外面にスス付着
	340	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 10YR6/4 外：Hue 10YR6/4	23区1号ピット	古閑式 波状口縁 口縁部外面に横位の沈線文
	341	縄文土器	鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue 10YR3/1 外：Hue 10YR6/3	24区包含層初5	古閑式 波状口縁 内外面にスス付着
	342	縄文土器	浅鉢	口径 底径 器高	口縁部片	内：磨き 外：磨き	内：Hue 7.5YR6/4 外：Hue 7.5YR6/3	25区包含層	古閑式
	343	古式土師器	甕	口径 底径 器高	口縁部片	内：ナデ, 磨き 外：ナデ, 条痕後ナデ	内：Hue 2.5Y4/1 外：Hue 2.5Y4/1	24区17号ピット	
	344	石器	台石	長さ 25.25 幅　10.6 厚さ 12.2	完形	内： 外：	内：Hue 外：Hue	23区 S1	重量4081g 安山岩
	345	石器	敲石	長さ 11.9 幅　6.1 厚さ 3.1	1/2	内： 外：	内：Hue 外：Hue	25区包含層	重量298g 安山岩